岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第142集

小　洞　古　墳　群

2019
岐阜県文化財保護センター

小洞古墳群

2019
岐阜県文化財保護センター

序

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道の建設に伴い、建設予定地にかかる関市広見において小洞古墳群の発掘調査を実施しました。

関市広見は、岐阜県の中央部に位置し、濃尾平野の北端にあたります。当地域は、古代には武儀郡としてムゲツ氏の統治下にあったことが知られていますが、中でも、小洞古墳群の所在する長良川と武儀川に挟まれた扇状地内には、ムゲツ氏の氏寺や武儀郡の郡衙と考えられている弥勒寺官衙遺跡群が所在するほか、古墳時代には多数の古墳群が形成されました。河川と山間部からなる地形を利用し、政治的要所として長く発展し続けた地域であるといえます。

今回の発掘調査では、主に古墳時代後期の円墳や、その他の埋葬施設を確認しました。円墳には大小の規模の差があり、同じ時期の土坑墓も見つかったことから、多様な埋葬形態を採用した古墳群であることが判明しました。身分の差などを反映させた、当時の人々の葬送観念がうかがわれます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、関市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年2月

岐阜県文化財保護センター
所長　野村　幹也

例　言

1　本書は、岐阜県関市広見に所在する小洞古墳群（岐阜県遺跡番号 21205-04049）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、東海環状自動車道（大野神戸 IC～関広見 IC）建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　宮内庁書陵部陵墓課徳田誠志陵墓調査官の指導のもとに、発掘作業は平成 27 年度に、整理等作業は平成 29 年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は辻田が行った。ただし、第 3 章は大本の所見をもとに辻田が執筆を行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　土器胎土分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第 4 章に掲載した。第 4 章第 1 節は辻田が執筆した。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

井川祥子、石黒立人、田中弘志、長瀬治義、成瀬正勝、藤澤良祐、森島一貴、横幕大祐、渡邉博人、関市教育委員会

10　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

序
例言
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第３章　調査の成果
　第１節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　第２節　遺構・遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第３節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
　第４節　古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
　第５節　中世の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
　第６節　包含層出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
　第７節　時期不明の土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
　　　　　遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図
第４章　自然科学分析
　第１節　分析の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
　第２節　２・４号古墳石室出土須恵器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第５章　総括
　第１節　小洞古墳群における墳丘と石室の構築技法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
　第２節　長良川中流域における横穴式石室の変遷と小洞古墳群の位置づけ・・・・・・・・・・・・ 96
　第３節　小洞古墳群の立地と古墳群の形成過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　小洞古墳群位置図・・・・・・・・・・・2
第 2 図　試掘坑と発掘調査区の位置・・・・・・・2
第 3 図　地区割り図・・・・・・・・・・・・・・3
第 4 図　小洞古墳群周辺地形図・・・・・・・・・6
第 5 図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・8
第 6 図　発掘区壁面土層図①・・・・・・・・・・12
第 7 図　発掘区壁面土層図②・・・・・・・・・・13
第 8 図　横穴式石室の名称・・・・・・・・・・・14
第 9 図　小洞古墳群 ・・・・・・・・・・・・・15
第 10 図　石材各面の名称（成瀬 1999）・・・・・・16
第 11 図　土坑分類模式図・・・・・・・・・・・・16
第 12 図　SK93　遺構実測図及び遺物出土位置図・・20
第 13 図　SK93　出土遺物・・・・・・・・・・・20
第 14 図　2 号古墳　墳丘平面図及び土層断面図・・22
第 15 図　2 号古墳　墳丘及び周溝土層断面図・・・23
第 16 図　2 号古墳　石室平面図及び土層断面図・・24
第 17 図　2 号古墳　石室実測図・・・・・・・・・25
第 18 図　2 号古墳　石室掘方平面図・・・・・・・27
第 19 図　2 号古墳　石室内遺物出土位置図・・・・28
第 20 図　2 号古墳　出土遺物・・・・・・・・・・28
第 21 図　3 号古墳　周溝平面図及び土層断面図・・30
第 22 図　4 号古墳　墳丘平面図・・・・・・・・・31
第 23 図　4 号古墳　墳丘土層断面図・・・・・・・32
第 24 図　4 号古墳　墳丘及び周溝土層断面図・・・33
第 25 図　4 号古墳　石室平面図及び土層断面図・・35
第 26 図　4 号古墳　石室実測図・・・・・・・・・36
第 27 図　4 号古墳　石室掘方平面図・・・・・・・37
第 28 図　4 号古墳　石室内遺物出土位置図・・・・38
第 29 図　4 号古墳　出土遺物・・・・・・・・・・39
第 30 図　5 号古墳　周溝平面図及び土層断面図・・41
第 31 図　5 号古墳　周溝出土遺物・・・・・・・・42
第 32 図　7 号古墳　周溝平面図及び土層断面図・・42
第 33 図　9 号古墳　平面図及び土層断面図・・・・43
第 34 図　9 号古墳　石室平面図及び土層断面図・・44
第 35 図　9 号古墳　石室実測図・・・・・・・・・44
第 36 図　9 号古墳　石室掘方平面図・・・・・・ 45
第 37 図　9 号古墳　石室内遺物出土位置図・・・ 45
第 38 図　9 号古墳　出土遺物・・・・・・・・・ 45
第 39 図　10 号古墳　平面図及び土層断面図・・・ 48
第 40 図　10 号古墳　石室平面図及び土層断面図・ 49
第 41 図　10 号古墳　石室実測図・・・・・・・・ 50
第 42 図　10 号古墳　石室掘方平面図及び断面図・ 50
第 43 図　ST 1 及び出土遺物実測図・・・・・・・・51
第 44 図　4 号古墳周溝　出土遺物・・・・・・・・52
第 45 図　包含層　出土遺物・・・・・・・・・・・53
第 46 図　発掘区全域図割付図・・・・・・・・・・59
第 47 図　発掘区全域図分割図①・・・・・・・・・60
第 48 図　発掘区全域図分割図②・・・・・・・・・61
第 49 図　発掘区全域図分割図③・・・・・・・・・62
第 50 図　発掘区全域図分割図④・・・・・・・・・63
第 51 図　発掘区全域図分割図⑤・・・・・・・・・64
第 52 図　発掘区全域図分割図⑥・・・・・・・・・65
第 53 図　発掘区全域図分割図⑦・・・・・・・・・66
第 54 図　発掘区全域図分割図⑧・・・・・・・・・67
第 55 図　発掘区全域図分割図⑨・・・・・・・・・68
第 56 図　発掘区全域図分割図⑩・・・・・・・・・69
第 57 図　発掘区全域図分割図⑪・・・・・・・・・70
第 58 図　発掘区全域図分割図⑫・・・・・・・・・71
第 59 図　発掘区全域図分割図⑬・・・・・・・・・72
第 60 図　発掘区全域図分割図⑭・・・・・・・・・73
第 61 図　発掘区全域図分割図⑮・・・・・・・・・74
第 62 図　発掘区全域図分割図⑯・・・・・・・・・75

第 63 図　発掘区全域図分割図⑰・・・・・・・・・76
第 64 図　発掘区全域図分割図⑱・・・・・・・・・77
第 65 図　発掘区全域図分割図⑲・・・・・・・・・78
第 66 図　発掘区全域図分割図⑳・・・・・・・・・79
第 67 図　発掘区全域図分割図㉑・・・・・・・・・80
第 68 図　発掘区全域図分割図㉒・・・・・・・・・81
第 69 図　発掘区全域図分割図㉓・・・・・・・・・82
第 70 図　発掘区全域図墳丘下分割図①・・・・・・83
第 71 図　発掘区全域図墳丘下分割図②・・・・・・84
第 72 図　各元素分布図・・・・・・・・・・・・・87
第 73 図　K_2O-P_2O_5 分布図 ・・・・・・・・・・・89
第 74 図　墳丘構築工程模式図（1）・・・・・・・91
第 75 図　墳丘構築工程模式図（2）・・・・・・・92
第 76 図　石室石材積み上げ状況図・・・・・・・・95
第 77 図　長良川中流域周辺の横穴式石室（1）・・98
第 78 図　長良川中流域周辺の横穴式石室（2）・・99
第 79 図　長良川中流域周辺における横穴式石室の分布・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第 80 図　短辺に小穴がある土坑墓・・・・・・・・101

表目次

第 1 表　周辺遺跡一覧 ・・・・・・・・・・・・9
第 2 表　古墳以外の検出遺構一覧 ・・・・・・・14
第 3 表　遺物出土点数・・・・・・・・・・・・・17
第 4 表　遺構ごとの出土遺物点数・・・・・・・・17
第 5 表　縄文時代の土坑一覧表・・・・・・・・・54
第 6 表　古墳一覧表・・・・・・・・・・・・・・54
第 7 表　土坑墓一覧表・・・・・・・・・・・・・54
第 8 表　時期不明の土坑一覧表（1）・・・・・・55
第 9 表　時期不明の土坑一覧表（2）・・・・・・56
第 10 表　土器観察表（1）・・・・・・・・・・・56
第 11 表　土器観察表（2）・・・・・・・・・・・57
第 12 表　土器観察表（3）・・・・・・・・・・・58
第 13 表　石器・石製品観察表・・・・・・・・・・58
第 14 表　金属製品観察表・・・・・・・・・・・・58
第 15 表　胎土分析対象・・・・・・・・・・・・・85
第 16 表　蛍光 X 線分析結果・・・・・・・・・・86
第 17 表　周辺の窯跡等出土試料の蛍光 X 線分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第 18 表　小洞古墳群における古墳の築造過程・・・92
第 19 表　横穴式石室各系譜の諸特徴・・・・・・・96
第 20 表　長良川中流域の横穴式石室一覧・・・・・97

挿入写真目次

写真 1　調査着手前(西から)・・・・・・・・・・5
写真 2　石室解体作業風景・・・・・・・・・・・5
写真 3　奥壁と側壁の設置関係・・・・・・・・・94

写真図版目次

図版 1　発掘区遠景・近景

図版 2　発掘区全景・調査前状況

図版 3　2号古墳（1）

図版 4　2号古墳（2）

図版 5　2号古墳（3）

図版 6　4号古墳（1）

図版 7　4号古墳（2）

図版 8　4号古墳（3）・3・5・7号古墳

図版 9　9号古墳

図版 10　10号古墳

図版 11　ST 1（1）

図版 12　ST 1（2）・SK93

図版 13　出土遺物（1）

図版 14　出土遺物（2）

図版 15　出土遺物（3）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

小洞古墳群は、関市広見字小洞に所在する（第１図）。当遺跡は、台地南部に点在する標高 100m程の丘陵の南斜面に位置し、調査以前より踏査や範囲確認によって、８基の古墳が知られていた。

平成 27 年度東海環状自動車道（大野神戸 IC～関広見 IC）建設に先立ち、その建設予定地内に小洞古墳群が所在することから、平成 26 年５月に岐阜県教育委員会社会教育文化課が試掘・確認調査を実施し、その結果をもとに、平成 26 年８月 28 日の岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、TP３～TP10 の間の 2,629 ㎡（第２図）の本発掘調査が必要との意見をまとめた。

本工事は、文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づき、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所長（以下「事務所長」という。）から岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）あての埋蔵文化財発掘通知（平成 26 年４月 17 日付け国部整岐調第１号）が提出され、同条４項の規定に基づき、県教育長から事務所長あて発掘調査実施勧告（平成 27 年４月９日付け社文第 54 号の 19）を通知した。本発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、岐阜国道事務所からの依頼により、岐阜県文化財保護センター（以下、センターという。）が実施した。センター所長は調査着手後、埋蔵文化財発掘調査の報告（平成 27 年５月 20 日付け文財セ第 87 号）を県教育長あてに提出した。

第２節　調査の方法と経過

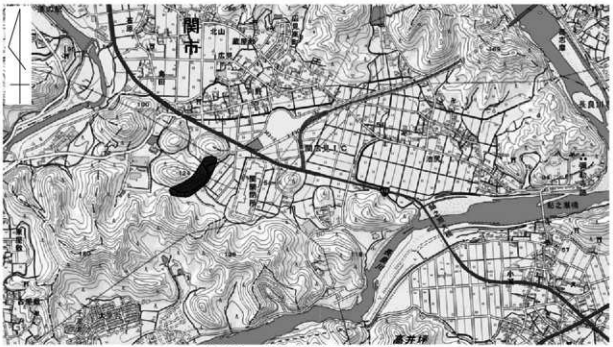
１　調査の方法

立木を伐採後、現況地形測量を実施した。遺物取り上げ等に用いる調査グリッドの設定は、世界測地系の座標に基づき、一辺５ｍとした（第３図）。人力での表土掘削を行う中央部を発掘区２、機械による表土掘削を行う西・東部を発掘区１・３と呼称し、実施した。発掘区外に広がる２・４号古墳の石室については、本工事によって発掘区外の石室にも影響が及ぶ可能性があることから、事業主と地権者の了解を得て、新たに 40 ㎡の範囲を調査した。墳丘の断ち割り調査は重機を用いて行い、横穴式石室と墳丘の構築工程、墳丘下の遺構の調査を行った。

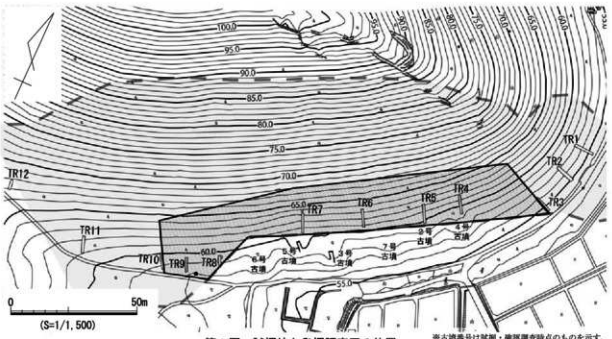
遺構番号は、原則として検出順に通番を付し、「S001」というようにＳと３桁の数字により表記した。この番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに遺構種別番号を付した。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、実測図を作成した。図面の縮尺は、20 分の１を基本とし、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。遺物は原則として全点の原位置をデジタル測量により記録した。

写真撮影では、35 ㎜フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、中判カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。なお、景観写真撮影では、ラジオコントロールヘリコプターを使用した。

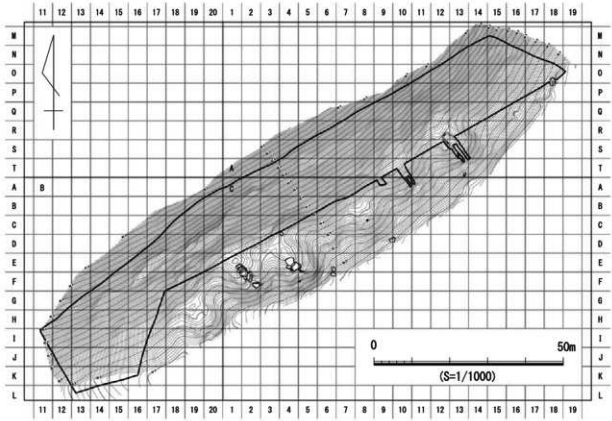


第１図　小洞古墳群位置図（S=1/25,000）
（国土地理院電子地形図 25000「岩佐」「美濃」「岐阜北部」「美濃関」2016 年発行）を元に作成



第２図　試掘坑と発掘調査区の位置

※古墳番号は試掘・確認調査時点のものを示す。
緑線は開発事業対象範囲を示す。



第３図　地区割り図

２　調査の経過

週ごとの調査経過は、以下のとおりである。

第１週～第４週（4/12～5/9）　発掘区にかかる立木伐採作業後、現況地形測量を実施。

第５週（5/10～16）　発掘区１で重機による表土掘削を開始。

第６週（5/17～23）　BG17 グリッドで９号古墳を確認。

第７週（5/24～30）　発掘区３で表土掘削完了。グリッド杭の打設。

第８週（5/31～6/6）　発掘区１で表土掘削を完了し、遺構検出を開始。

第９週（6/7～13）　発掘区２で人力による表土掘削を開始。９号古墳の墳丘の範囲・石室の位置を確認。

第 10 週（6/14～20）　９号古墳の礫床の一部を検出。

第 11 週（6/21～27）　発掘区１の遺構検出、発掘区２の表土掘削を続行。

第 12 週（6/28～7/4）　９号古墳の周溝を検出。

第 13 週（7/5～11）　BH16 グリッドで ST１（土坑墓）を検出し、その埋土中から耳環（30）が出土。発掘区から民地にかけて広がる石室の取扱いについて、岐阜国道事務所と協議。

第 14 週（7/12～18）　９号古墳の周溝を掘削。石室内で礫床を検出。墳丘断面の確認及び切り合い関係の把握のため、発掘区南側にトレンチを掘削し、新たな古墳（10 号古墳）の奥壁を確認。

第 15 週（7/19～25）　９号古墳の石室内の礫床間から須恵器（28、29）が出土。

第16週（7/26～8/1）　5号古墳周溝近くの根跡から鉄製品（31、32）が出土。
第17週（8/2～8）　発掘区2の表土掘削を続行。
第18週（8/9～15）　夏季作業休止期間
第19週（8/16～22）　平面精査により、5号古墳の周溝が3号古墳の周溝を切っていることを確認し、5号古墳の周溝を掘削開始。10号古墳の石室内で礫床と側壁を確認。
第20週（8/23～29）　2・4・10号古墳の石室内調査の方針について、田中弘志氏（関市文化財保護センター）と協議。
第21週（8/30～9/5）　3号古墳の周溝を検出。
第22週（9/6～12）　10号古墳の石室調査を終了。
第23週（9/13～19）　5号古墳の周溝を完掘。4号古墳の石室調査、3号古墳の周溝の掘削開始。
第24週（9/20～26）　3号古墳の周溝の掘削続行。4号古墳の石室の埋土3層から須恵器（13～20）が出土。
第25週（9/27～10/3）　長瀬治義氏（可児市教育委員会）の現地指導。3号古墳の周溝を完掘。4号古墳の石室内で礫床を確認し、その入口付近の床面直上から石製品（22）と金属製品（23、24）が出土。
第26週（10/4～10）　2号古墳の石室の掘削を開始。2号古墳の周溝を検出し、その掘削過程で10号古墳の周溝が2号古墳の周溝を切っていることを確認。
第27週（10/11～17）　2号古墳の石室の礫床と羨道部側壁を検出。発掘区南壁の土層観察により2号古墳の周溝が4号古墳の周溝を切っていることを確認し、2号古墳の周溝を掘削開始。土層観察ベルト（B－B'断面）の観察により、10号古墳の墳丘を確認。発掘区南壁の土層堆積状況から、2号古墳の周溝の埋土上に10号古墳の墳丘を構築していることを確認。4号古墳の周溝を検出。
第28週（10/18～24）　4号古墳の周溝の埋土2層から山茶碗（33～35）が出土。横幕大祐氏（池田町教育委員会）から現地指導。
第29週（10/25～31）　2号古墳の石室と4号古墳の周溝を完掘。現地見学会を行い、104名が参加。
第30週（11/1～7）　渡邉博人氏（各務原市）の出土須恵器に関する指導。発掘区3の遺構掘削を開始し、旧表土上面で土坑（S366）を検出。2号古墳の石室内の羨道部で側壁を検出。
第31週（11/8～14）　SK93から縄文土器（1～5）と石器（6、7）が出土。ラジオコントロールヘリコプターによる景観写真撮影を実施。
第32週（11/15～21）　徳田誠志氏（宮内庁書陵部）の現地指導。2・4・5・9・10号古墳の解体調査を開始。5号古墳周溝底面から土師器（25～27）が出土。9・10号古墳の石室掘方を掘削。
第33週（11/22～28）　2・4号古墳の石室解体作業・石室掘方を掘削。
第34週以降　発掘区埋戻し作業を完了。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成27年度、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は平成29年度に当センターで実施した。整理等作業において、平成29年7月24日に渡邉博人氏（各務原市）に須恵器に関する指導、平成29年11月20日に田中弘志氏（関市文化財保護センター）及び平成29年12月4日に徳田誠志氏（宮内庁書陵部）に古墳に関する指導を受けた。なお、胎土分析と金属製品保存処理を平成29年度に実施した。

３　発掘作業及び整理等作業の体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光（平成 27 年度）、羽田能崇（平成 29 年度）
総務課長	二宮　隆（平成 27 年度）、加藤武裕（平成 29 年度）
調査課長	成瀬正勝（平成 27 年度）、春日井恒（平成 29 年度）
調査担当係長	河合洋尚（平成 27 年度）、三輪晃三（平成 29 年度）
調査担当職員	大本直人（平成 27 年度）、辻田真穂（平成 29 年度）

写真１　調査着手前（西から）

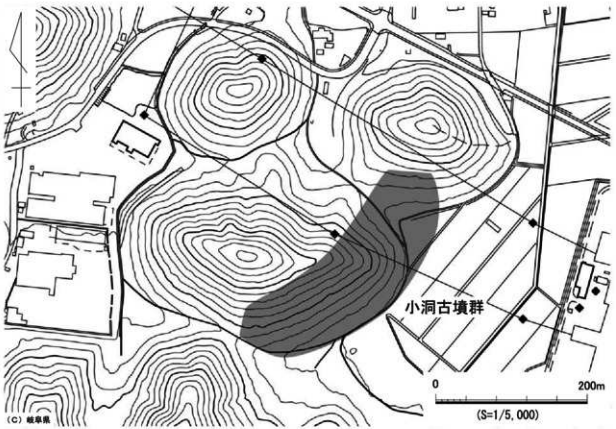
写真２　石室解体作業風景

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

関市は、岐阜県の中央部に位置し、平成 17 年に武儀郡（武芸川町、洞戸村、板取村、武儀町、上之保村）を編入したことにより、市域はアルファベットの「V」字状となる。当遺跡の所在する広見地区は、旧関市の西北端で、旧武芸川町との境に位置する。当遺跡は伊自良山地に属し、郡上方面から続く美濃権現山山地の南端から南へ１km の傾斜丘陵南斜面に位置する（第４図）。丘陵の傾斜は 15 度～20 度の緩斜面である。広見地区は、長良川とその右支川である武儀川に挟まれた扇状地で、河川堆積物からなる盆地に標高100m程度の丘陵が点在する。この一帯は、第四紀沖積層に属し、山地と丘陵との間には河岸段丘下位からなる灰色低地土壌の砂礫台地が広がり、通気性及び保水性の高い土壌の地域である。当遺跡のある丘陵はチャートを母岩とし、石礫は角礫・亜角礫で、古墳の石室石材に使用されている。

長良川を中心に、その左支川である津保川と武儀川に囲まれた一帯及びその周辺は、『和名抄』によれば武儀郡として統治されていた。各河川の開けた場所に設定された条里遺構は 21 坪を確認でき（八賀・玉井1971）、古代にはこの土地が利用されていた。武儀川の東西（跡部・広見地区）に確認できる条里遺構のうち、左岸の広見地区側は比較的残りがよく、地割の方向がやや西に傾いている。一方で、右岸の条里地割りの方向は真北を指しており、山間の地形に合わせた地割を行っていたと思われる。



第４図　小洞古墳群周辺地形図

第２節　歴史的環境

小洞古墳群の周辺で確認されている遺跡について、時代順に概観する。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、第５図及び第１表と一致する。

旧石器時代　松原遺跡（32）、赤土坂遺跡（36）、巾遺跡（38）などがある。長良川対岸に位置する松原遺跡では、ナイフ形石器２点、細石核２点が表面採集されたほか、チャート製のナイフ形石器が出土している。津保川右岸の小丘陵に立地する赤土坂遺跡は、「岐阜県下で最も早く発掘調査が行なわれた遺跡」[1]であり、ナイフ形石器30点以上をはじめ、彫器、掻器、削器等、多量の石器が採取されている。

縄文時代　塚原遺跡（29）、岩利ヶ洞遺跡（30）、渡来川北遺跡（105）、高野遺跡（127）などがある。塚原遺跡は、早期の屋外炉や焼化礫群、押型文土器のほか、中期の竪穴建物群や掘立柱建物群などの集落跡が確認され、土坑内からは漁に使用した石錘27点が出土している。渡来川北遺跡では、草創期の石器製作址や水場遺構が確認され、水場遺構は国内最古の事例として有名である。

弥生時代　塚原遺跡（29）、巾遺跡（38）、一ノ門遺跡（40）、森坪遺跡（81）、古村遺跡（86）、井守山遺跡（106）、渡来川北遺跡（105）、高野遺跡（127）などがある。古村遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓18基、竪穴建物11軒などを確認している。方形周溝墓からはパレス壺等の土器が出土している。

古墳時代　当遺跡の北西部300m程には小洞遺跡（２）、小洞西１号古墳（３）や大山古墳（４）、前山古墳（５）が所在し、周辺の丘陵裾部に多くの古墳を確認できる。小洞西１号古墳は、古墳時代後期の円墳であるが、周辺地域の同時期の古墳が横穴式石室を持つのに対し、木棺直葬による主体部をもつ点が特筆される。南西部約19kmに位置する陽徳寺裏山古墳群（25）は、総数14基からなる古墳群で、５号墳は古墳時代前期に属する関市最古の古墳として知られている。古墳時代後期まで造営が続けられ、６世紀初頭に築造された１号墳では７世紀初頭まで追葬が繰り返された。また、北陸地方とのつながりを想起させる角坏が出土したことでも有名である。塚原古墳群（29）は小円墳37基が確認されている、関市最大の後期から終末期の群集墳である。主墳の周囲に小規模な古墳を配置し、矮小な範囲に密集して古墳が造営されている。長良川対岸には、独立丘陵上に古墳が造営された片山遺跡（52）がある。前方後円墳である片山西塚古墳は、発掘調査が行なわれていないため詳細は不明であるが、「長良川に沿って広がる低地に面する北側の造りは丁寧」[2]で、県下では小型な古墳であるものの、立地と正面観が意識されたつくりである。また、この一帯は、八王子古墳（51）、御前塚古墳（50）、池尻大塚古墳（62）、殿岡古墳群（93）の殿岡１号墳といった方墳が集中的に造営された地域としても知られ、弥勒寺遺跡群を営んだムゲツ氏の趨勢との関係が考えられている（関市教育委員会2012）。当該期の集落遺跡としては松原遺跡（32）や南山遺跡（102）があり、Ｓ字状口縁台付甕を伴う竪穴建物が確認されている。

古代　弥勒寺跡（64）を中心に武儀郡衙と推定される弥勒寺東遺跡（68）や弥勒寺西遺跡（63）がある。弥勒寺跡は、講堂、塔、金堂の礎石や掘立柱建物等が確認され、法起寺式伽藍配置をとり、出土した須恵器から７世紀後半から末にかけて創建されたとされている。弥勒寺東遺跡では、大型掘立柱建物や区画溝、鍛冶遺構などを確認し、倉庫建築群（正倉院）や中心施設（郡庁院）として機能していたことが判明している。弥勒寺西遺跡では、役所跡や僧房跡、鍛冶工房跡と工人住居跡、厨房跡といった、弥勒寺を経営するための施設が集中するほか、８世紀後半から９世紀にかけての祭祀跡を確認している。また、当遺跡か

第５図　周辺の遺跡

ら2.4km北に位置する丸山古窯跡群（121）は、6世紀後半から須恵器窯として機能し始め、古代には弥勒寺の瓦を併焼したとされる。

中・近世　広見城跡（10）、和田山遺跡（57）、西屋敷遺跡（61）、上西田遺跡（73）、改田遺跡（98）、丸山北遺跡（120）、丸山南遺跡（122）などがあげられる。当遺跡から約1.5km東の西屋敷遺跡では、鎌倉時代後期から近代までの水田区画や畦畔を確認している。改田遺跡では、12世紀前半の大型掘立柱建物跡を確認している。

注

1）関市教育委員会編1996『新修関市史』（通史編　自然・原始・古代・中世）371頁

2）関市教育委員会編1996『新修関市史』（通史編　自然・原始・古代・中世）472頁

・第5図及び第1表は岐阜県教育委員会 2007『改訂版　岐阜県　遺跡地図』を基に、新たな成果をふまえて作成したが、時代については発掘調査報告書の記載も参考にした。

第1表　周辺遺跡一覧（1）

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	小洞古墳群	古墳	30	岩利ヶ洞遺跡・岩利ヶ洞古墳群	縄文・古墳
2	小洞遺跡	弥生・古墳・中世	31	新屋敷遺跡	古墳・古代
3	小洞西1号古墳	古墳	32	松原遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代(奈・平)・中世
4	大山古墳	古墳	33	高井坪古墳	古墳
5	前山古墳	古墳	34	薄原遺跡	縄文・古代
6	大原古墳群	古墳	35	小屋名神明前遺跡	古墳・古代・中世
7	大原北古墳	古墳	36	赤土坂遺跡	旧石器・縄文
8	大原南古墳	古墳	37	狐洞塚古墳	古墳
9	広見浦山古墳群	古墳	38	巾遺跡	旧石器・縄文・弥生
10	広見城跡	中世(城)	39	高山寺遺跡	縄文
11	火打山古墳	古墳	40	一ノ門遺跡	縄文・弥生
12	末田山1号古墳	古墳	41	上人塚	古代
13	末田山2号古墳	古墳	42	大塚東塚遺跡	古代
14	末田山3号古墳	古墳	43	茶屋塚	古代
15	末田山4号古墳	古墳	44	十三塚	古墳
16	末田山5号古墳	古墳	45	十三塚1号	古代
17	末田山6号古墳	古墳	46	十三塚2号	古代
18	末田山7号古墳	古墳	47	十三塚3号古墳	古墳
19	段之尾古墳群	古墳	48	小瀬方墳	古墳
20	源頼政首塚	近世	49	長野遺跡	中世
21	松洞古墳	古墳	50	御前塚古墳	古墳
22	松洞火葬墓	古代(奈)	51	八王子古墳	古墳
23	入ヶ洞古墳群	古墳	52	片山遺跡	縄文・古墳
24	野畔遺跡	縄文・古代	53	庄内遺跡	古代・中世
25	陽徳寺裏山古墳群	古墳	54	小屋名遺跡	縄文
26	千疋城跡	中世	55	赤根古墳群	古墳
27	竹之腰遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	56	向畑古墳	古墳
28	長平古墳群	古墳	57	和田山遺跡	中世(城)
29	塚原遺跡・塚原古墳群	縄文・弥生・古墳	58	西中畑古墳	古墳

第１表　周辺遺跡一覧（２）

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
59	反松大塚古墳	古墳	95	山後遺跡	古墳
60	反松寺下遺跡	古墳・古代(奈・平)・中世	96	岡ノ下遺跡	古墳
61	西屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)	97	道光寺塚古墳	古墳
62	池尻大塚古墳	古墳	98	改田遺跡	古墳・古代(奈)・中世
63	弥勒寺西遺跡	縄文・古代(奈・平)・中世・近世	99	藍川古墳	古墳
64	弥勒寺跡	古代(白・奈)	100	玄人遺跡	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世
65	円空入定塚	近世	101	樋口遺跡	縄文・古墳・古代(奈)・中世(鎌・室・安)
66	松尾山古墳	古墳	102	南山遺跡	縄文・古墳・中世
67	弥勒寺古墳	古墳	103	基盤洞遺跡	縄文・古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)
68	弥勒寺東遺跡	古代(飛)・中世(鎌・室)	104	南出遺跡	古代・中世
69	南宮前遺跡	古墳	105	渡来川北遺跡	旧石器・縄文・古墳
70	林光庵遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)	106	井守山遺跡	縄文・弥生・古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)
71	志摩城跡	中世	107	茶屋下遺跡	古代(奈・平)
72	西志摩遺物散布地	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	108	一本杉遺跡	縄文・古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世
73	上西田遺跡	中世	109	垣内遺跡	古代(奈・平)
74	鍋屋遺跡	古墳・中世(鎌・室・安) ・近世	110	中屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)
75	生栗遺物散布地	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	111	西側遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世
76	大門脇遺跡	中世(鎌・室・安)・近世	112	西出遺跡	中世(鎌・室・安)・近世
77	三井寺跡	中世(鎌・室・安)	113	大屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)・近世
78	正林寺前遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	114	松毛窯跡	古代(平)
79	弦賀遺跡	縄文・古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	115	大洞窯跡	古代(平)
80	宮前古墳	古墳	116	桜洞古窯跡群	古代(平)
81	森坪遺跡	弥生・古代(白・飛・奈)・中世(鎌・室・安)・近世	117	権蔵窯跡	近世
82	鍛冶屋洞古墳	古墳	118	亀蔵庵窯跡	近世
83	神田洞遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)	119	市場西屋敷遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世
84	神田洞古墳	古墳	120	丸山北遺跡	古墳・古代(奈)・中世・近世(鎌・室・安)
85	古村古墳	古墳	121	丸山古窯跡群	古代(白・奈)
86	古村遺跡	弥生・古墳・中世(室・安)・近世	122	丸山南遺跡	縄文・古墳・中世(鎌・室・安)・近世
87	黄金塚古墳	古墳	123	立長遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世
88	石橋遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)	124	柳洞遺跡	中世・近世
89	栃洞遺跡	近代	125	浦山遺跡	近代
90	矮子射田遺跡	弥生・中世・近世	126	高野古墳	古墳
91	猫洞遺跡	弥生・中世・近世	127	高野遺跡	縄文・弥生
92	大根洞遺跡	中世・近世	128	江尻古墳群	古墳
93	殿岡古墳群	古墳	129	猿喰古墳	古墳
94	西向遺跡	中世(鎌・室・安)			

※時代の呼称は、飛鳥を「飛」、白鳳を「白」、奈良を「奈」、平安を「平」、鎌倉を「鎌」、室町を「室」、安土桃山を「安」とした。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

当遺跡の現況は山林であり、表土は腐植土である。また、丘陵斜面に立地することから、上方の旧表土が流されて下方に堆積している可能性が高く、層厚に差異がある。試掘・確認調査の結果に基づき、基本層序をⅠ層からⅢ層に設定した。

Ⅰ層　表土　層厚 0.05m～0.3m

地表面に堆積した腐植土を含む土層である。しまりがなく、粘性もない。発掘区全域に堆積する。２・４・９・10 号古墳の墳丘上では土層の厚さが薄く、４号古墳では墳丘盛土や墳丘盛土からの流土が露出した箇所もみられた。

Ⅱ層　流土

Ⅱ層は２つに分けることができる。

Ⅱa 層　層厚 0.1m～0.25m

土壌化したⅢa 層や腐植土が斜面下方に流出し堆積した土層である。発掘区西部ではⅡb 層の上層に分布するが、発掘区中央部以東では確認できない。

Ⅱb 層　層厚 0.05m～0.3m

斜面上方のⅢb 層及びⅢc 層が斜面下方に流出し堆積した層である。発掘区中央部では周溝埋土上層に厚く堆積する。発掘区東部では表土直下が旧表土となり、Ⅱb 層は確認できない。

Ⅲ層　旧表土・漸移層・基盤層

Ⅲ層は３つに分けることができる。

Ⅲa 層　旧表土　　層厚 0.15m～0.4m

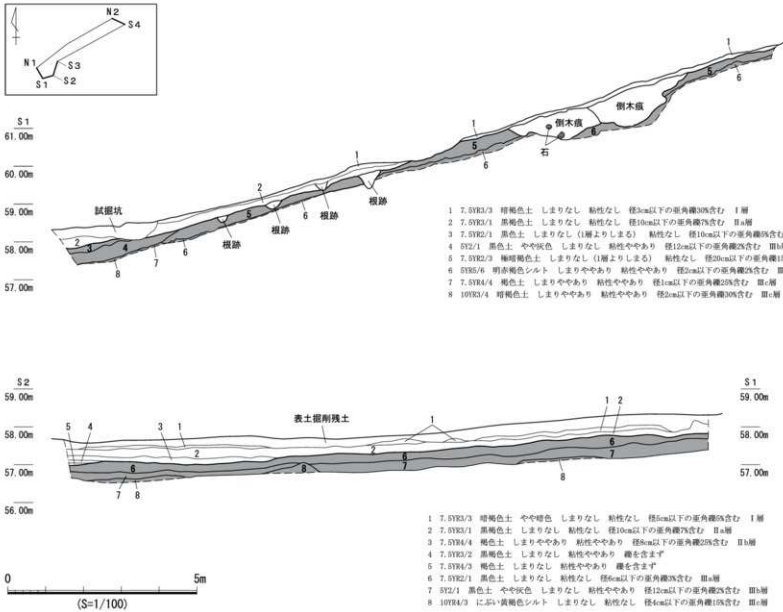
１・Ⅱ層下層の黒色・黒褐色の土層である。丘陵の中腹に当たる発掘区の北側では確認できないため、流出している可能性がある。発掘区西部南側、発掘区東部、墳丘盛土下に堆積する。

Ⅲb 層　漸移層　層厚 0.1m～0.3m

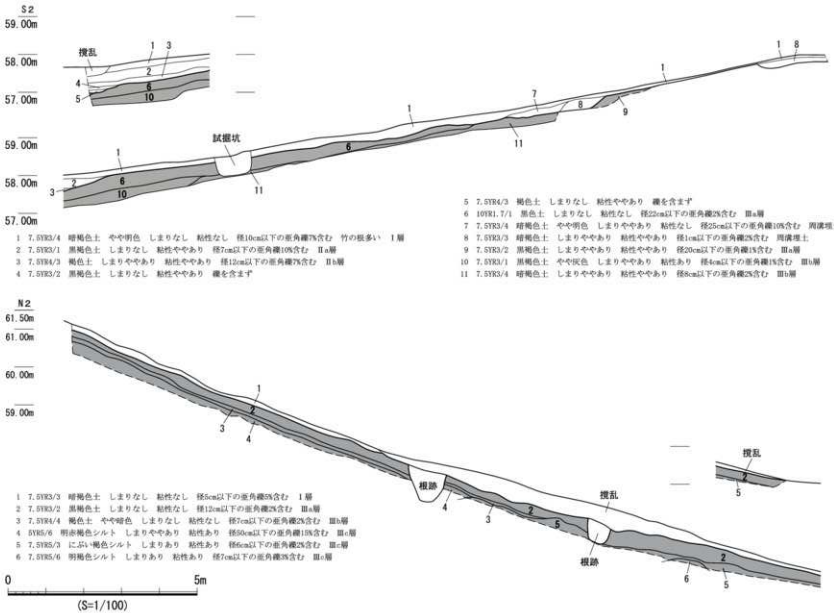
Ⅲa 層とⅢc 層に挟まれる土層である。褐色から黒色に漸移している。発掘区西部南側、発掘区東部、墳丘盛土下に分布する。

Ⅲc 層　基盤層

褐色系シルト質の土層である。斜面上方や石室掘方・周溝で深く掘り下げた箇所は明赤褐色の土色を示す。



第69図 発掘区壁面土層図①



1 7.5YR3/4 暗褐色土 やや粗色 しまりなし 粘性なし 径10cm以下の亜角礫7%含む 竹の根多い Ⅰ層
2 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径7cm以下の亜角礫10%含む Ⅱa層
3 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径12cm以下の亜角礫7%含む Ⅱb層
4 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 礫を含まず
5 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 礫を含まず
6 10YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性なし 径22cm以下の亜角礫2%含む Ⅲa層
7 7.5YR3/4 暗褐色土 やや明色 しまりややあり 粘性なし 径25cm以下の亜角礫10%含む 周溝埋土
8 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cm以下の亜角礫2%含む 周溝埋土
9 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径20cm以下の亜角礫1%含む Ⅲa層
10 7.5YR3/1 黒褐色土 やや灰色 しまりややあり 粘性あり 径4cm以下の亜角礫1%含む Ⅲb層
11 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径8cm以下の亜角礫2%含む Ⅲb層

1 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の亜角礫5%含む Ⅰ層
2 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径12cm以下の亜角礫2%含む Ⅲa層
3 7.5YR4/4 褐色土 やや暗色 しまりなし 粘性なし 径7cm以下の亜角礫2%含む Ⅲb層
4 5YR5/6 明赤褐色シルト しまりややあり 粘性あり 径50cm以下の亜角礫15%含む Ⅲc層
5 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト しまりあり 粘性あり 径6cm以下の亜角礫2%含む Ⅲc層
6 7.5YR5/6 明褐色シルト しまりあり 粘性あり 径7cm以下の亜角礫3%含む Ⅲc層

第7図 発掘区基本層図(2)

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構の概要

（１）　概要

今回の調査では、７基の古墳の他、土坑墓、土坑を検出した（第９図）。古墳は発掘区内にかかる部分のみを調査対象としたが、埋葬施設が発掘区外に広がる２・４号古墳は、玄室全体及び羨道上面の検出を行った。埋葬施設の調査を行ったのは７基中４基（２・４・９・10 号古墳）、周溝の一部のみを調査したのは３基（３・５・７号古墳）である。その他、古墳と同時期の土坑墓や縄文時代の土坑の他、発掘区の西側を中心に時期不明の土坑を確認した。遺構の時期は、おもに出土遺物や遺構の重複関係から判断した。本書では、当遺跡の性格を示す古墳時代の遺構は全て詳述した。その他の遺構は、出土遺物から時代が特定できるものは詳述し、遺物が出土せず遺構の形状等からその性格を検討することが困難なものについては、一覧表の記載に留めた。

古墳以外の遺構の種類、遺構記号（括弧内）、分類内容は以下のとおりである。

土坑墓（ST）遺構の形状、掘方、埋土、出土遺物等から埋葬施設と判断したもの。

土坑　（SK）ＳＴ以外の人為的な掘り込みと判断したもの。

なお、古墳以外の遺構における本書掲載時の遺構番号は、原則として発掘区の西側から順に番号を付した。

遺構種別毎の検出遺構数は、第２表のとおりである。本書における遺構の挿図や写真は、遺構の性格を理解する上で必要なものを中心に掲載した。

第２表　古墳以外の検出遺構一覧

遺構名	記号	検出遺構数	グリッドごと		
			A	B	C
土坑墓	ST	1	−	1	−
土坑	SK	93	1	91	1

（２）　遺構の計測について

各遺構の規模は、発掘調査時の測量値を参考にしたが、一部掲載図面上で計測した数値を記載した。古墳各部の測量位置と名称については、次のとおりである。

・墳丘の計測は、計測点を明記し、その水平距離若しくは垂直距離を計測した。

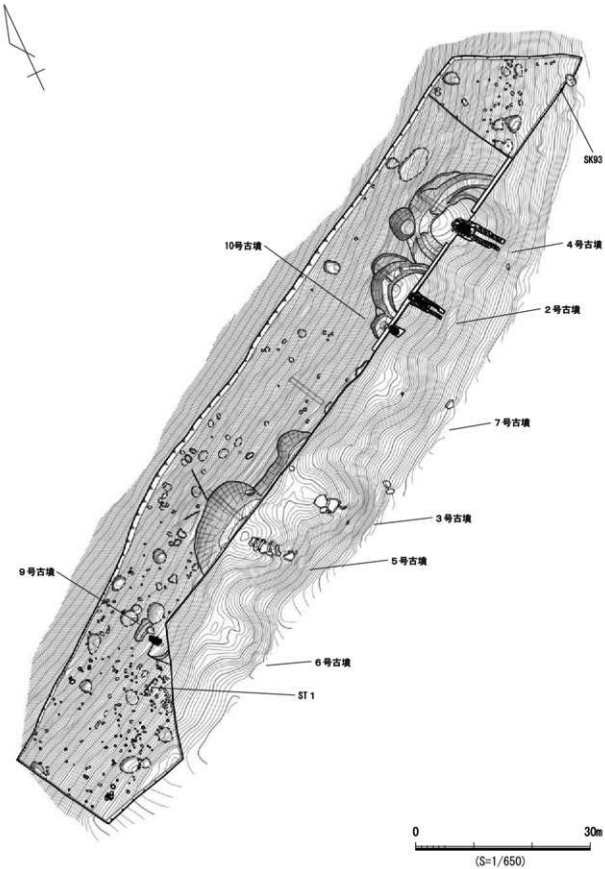
・周溝の計測は、『発掘調査のてびき』[1]「溝」に倣い、溝の肩部に当たる傾斜変換点の水平距離を幅の規模、最上面から最深部までの垂直距離を深さとして計測した。

・石室側壁の呼称は、『発掘調査のてびき』[1]に倣い、石室入口から奥壁を見て右手を右側壁、左手を左側壁とした（第８図）。玄室長を計測する場合は、奥壁から袖石の手前までの長さを計測した。その他の石室構造に関する各部名称は、石井（2007）[2]による定義に準じた。

第８図　横穴式石室の名称

・石室構造及び壁面を構成する石材の説明には、以下の用語を用いた。

胴張り：玄室中央部が外側に膨らむ平面形をいう。奥壁幅÷玄室最大幅の数値が 0.8 以下となる



第９図　小洞古墳群

場合（須川 2006）[3] にこの用語を用いた。

袖　石：袖部を形成するために用いられた石材。縦長の石材を柱状に用いる場合は、「玄門立柱石」という用語を用いた。

基底石：墓坑の基底部に据えられた、壁体最下段の石材。このうち、奥壁最下段が一枚の大型石材からなる場合は「鏡石」の用語を用いた。また、第５章中では、壁体最下段に石材の長辺を横方向にして立てて配置する石材について、「腰石」の用語を用いた。

また、石材の名称や積み方の呼称は、成瀬（1999）[4] を参照し、壁面に表れる面によって「小口積み」「長手積み」「平積み」とした（第 10 図）。

第10 図　石材各面の名称（成瀬 1999）

（３）遺構一覧表

古墳以外の遺構の位置や規模について、遺構種別及び時期ごとに一覧表で示した。遺構観察表の各項目内容は次のとおりである。

位置　遺構を検出した位置を示し、複数の地区にまたがる場合は「～」で結んだ。

検出面　基本層序（本章第１節）で示した記載をもとに、略号で示した。Ⅲ層上面で検出した遺構の場合、「Ⅲ上」と表記した。

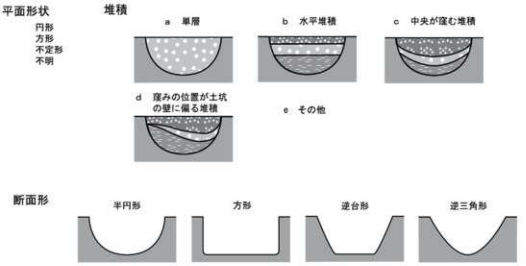
平面形・堆積・断面形　第 11 図のとおり分類した。

規模　（　）で示した数値は、残存値を示す。

重複関係　重複した遺構は、その遺構より新しい遺構の番号を「新」、古い遺構の番号を「旧」に記載した。

出土遺物　遺構内から出土した遺物の種別を下記の略号で示し、注記を行った破片数と併せて記載した。

J-縄文土器、H-土師器、P-須恵器、Y-山茶碗、T-近代陶磁器、S-石器・石製品、I-金属製品、C-炭化物



第11図　土坑分類模式図

２　遺物の概要

（１）概要

今回の調査で出土した遺物は 230 点である。土器類では、縄文土器、土師器、須恵器、山茶碗、近代陶磁器がある。その他、石器・石製品、金属製品、炭化物が出土した。数量は第３表のとおりである。土器類は、接合後 114 点となった。

本書では、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺構の性格を端的に示す遺物を中心に抽出して報告した。その結果、掲載遺物は 35 点である。

第３表　遺物出土点数

	土器類					石器類		金属製品	炭化物	合計
	縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	近代陶磁器	石器類	石製品			
接合前破片数(a)	60	38	58	40	3	2	1	7	21	230
接合後破片数(b)	25	25	22	8	3	2	1	7	21	114
(b)の全体に対する割合(%)	22	22	19.3	7.1	2.7	1.8	0.9	6.2	18.5	-
接合比率(%)	41.7	65.8	38	20	0	0	0	0	0	-
本書掲載数	5	3	13	4	0	2	1	7	0	35

※接合前破片数は、土器類は破片数、その他は取り上げ点数を示す。近代陶磁器には、時期不明１点を含む。

第４表　遺構ごとの出土遺物点数

遺構名	調査時遺構番号	土器類					石器類		金属製品	炭化物	合計
		縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	近代陶磁器	石器類	石製品			
２号古墳	S296（石室） S310（周溝） S311（墳丘）		6	20					2	4	32
４号古墳	S276（石室） S312（周溝）		4	35	40	3		1	2	2	87
５号古墳	S251（周溝）		28								28
９号古墳	S317（石室）			2						1	3
10号古墳	S273（石室）									13	13
ST1	S191								1		1
SK93	S366	60					2				62
SK	S43									1	1
根跡	S264								2		2
試掘坑	（AR12グリッド）			1							1
合計		60	38	58	40	3	2	1	7	21	230

※遺物点数は、土器類は接合前破片数、その他は取り上げ点数を示す。

掲載遺物について、種別ごとの概要は以下のとおりである。

縄文土器　A0～AP18 グリッド、SK93 から出土した。器種は深鉢で、破片は全て同一個体の可能性がある。縄文時代晩期末（馬見塚式併行期）に比定される[5]。

須恵器　全て古墳の石室から出土した。器種は坏身、坏蓋、長頸壺、鉢（短頸壺）、平瓶、甕があり、時期は概ね７世紀前半である。産地及び時期は既存の研究を参考にした[6]。

土師器　５号古墳周溝（CD1 グリッド）の基盤層直上堆土からまとまって出土した。器種は甕であり、時期は不明である。

山茶碗　４号古墳石室内から１点出土した他、４号古墳周溝（AR11 グリッド）の２層からまとまって

出土した。器種は全て碗で、４号古墳石室内から出土した山茶碗は尾張型、他は東濃型である。時期は既存の研究を参考にした[7]。

石器・石製品　SK93 から縄文土器と共にチャート製の剥片が２点、４号古墳石室から滑石製の臼玉が１点出土した。剥片については使用痕等確認できなかった。

金属製品　耳環２点、刀子３点、不明鉄製品２点で、耳環と刀子は石室内及び土坑墓から出土し、副葬品と考えられる。不明鉄製品は５号古墳に近接する根跡から出土した。

（２）遺物観察表

本報告書に掲載した遺物について、種別毎に観察表を作成し、遺物番号順に記載した。各項目の内容は、次のとおりである。

出土位置　グリッド及び遺構番号を記載した。複数のグリッドから出土した遺物が接合した場合は、全ての出土位置を記載した。

大きさ　（　）で示した数値は、土器類は復元、その他については残存値を示す。

口縁部残存率・底部個体数　X/12 のXにあたる数値を記載した[8]。底部個体数は、２分の１以上残存するものを１と表記することとし作成したが、今回報告する遺物については該当するものがなかったため、底部が確認できるものについては０を付した。

胎土・色調　胎土中の含有物は肉眼観察で判断した。色調は、『新版標準土色帳』（小山・竹原 2006）を基に肉眼観察で判断し、見本に近い色調の JIS notation 番号を記載した。

石材・素材　石器類及び金属製品の材質は肉眼観察で判断した。なお、石材の観察には倍率 10 倍のルーペを使用した。

注

1）独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき』各種遺構調査編、文化庁文化財部記念物課監修、株式会社同成社

2）石井智大 2007「横穴式石室に関する用語」『近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会事務局

3）須川勝以 2006「東海の横穴式石室　三河編」『東海学セミナー（２）』、春日井市教育委員会

4）成瀬正勝 1999「美濃における横穴式石室の築造技法」『岐阜史学』第 96 号、岐阜史学会

5）石黒立人氏（愛知県埋蔵文化財センター）の御教示による。

6）須恵器については渡辺博人氏（各務原市教育委員会）の指導を得て、以下の文献を参照し、最終的な判断は筆者が行った。

各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

齊藤孝正 1995「Ⅰ　東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第３巻東日本編、雄山閣出版

田辺昭三 1982『須恵器大成』、角川書店

渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会

7）山茶碗については藤澤良祐氏（愛知学院大学）の指導を得て、以下の文献を参照し、最終的な判断は筆者が行った。

藤澤良祐 2007「第２節　灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史』別編窯業２中世・近世　瀬戸系、愛知県史編さん委員会

8）口縁部残存率の計測は以下の文献を参照し、12 分の１未満の場合は１に切り上げ、12 分の１以上の場合は小数点以下第１位まで計測した。

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、国立歴史民俗博物館

第３節　縄文時代の遺構・遺物

SK93（第 12 図）

発掘区の東側（ＡＰ18 グリッド）においてⅢ層上面で検出した。西から東に向かってゆるやかに下がる斜面地に位置する。発掘区南壁面から縄文土器片が出土したため、その範囲を拡張して遺構検出を行い、土坑を検出した。遺構の北側は重機掘削によって消失している。

遺構　残存部で長径 0.28m×短径 0.22m、深さは 0.28mである。発掘区南壁面で土層断面を観察した。埋土は単層である。

遺物出土状況　埋土全体から縄文土器片 44 点、埋土下方から石器２点が出土した。

出土遺物（第 13 図）　１～５は縄文時代晩期末の縄文土器片であり[1]、器種は深鉢である。１・２は、口縁部の破片で、端部は特に厚く丸みをもつ。１は、粘土を外面側に折り返すことで口縁部を厚く作出し、内外面には二枚貝による条痕を施す。外面に幅 1.2～1.5cm の細い突帯を貼り付け、指で横位に押圧を施す。２も同様の手法で口縁部を形成し、内外面に条痕を施すことから、１と同一個体である可能性が高い。３～５は体部の一部である。３・４は、外面に横位の条痕文を施しており、３はやや薄手である。３は外面下方のわずかな範囲に、４は外面全体と内面に煤が付着している。５は、底部に近い位置の破片である。外面は縦位の条痕を施しており、下方の条痕は凹凸が浅く磨耗している。外面及び内面下方に煤が付着している。

６・７はチャート製の剥片である。６は、主要剥離面側の下端部が摩耗を受けてやや丸みがある。長さ 3.4cm、幅 2.6cm、重さ 4.6ｇである。７は、上端に階段状剥離痕がみられ、長さ 5.8cm、幅 4.5cm、重さ 16.9ｇである。ともに使用痕の確認はできず[2]、石器として使用されていたかどうかは判断できない。

小結　本遺構の時期は、出土した土器片の所属時期から、縄文時代晩期末と判断した。出土した縄文土器片は同一個体の可能性が高く、口縁部片が土坑の底部付近、体部片が中央中位付近から出土している。土坑の埋土はしまりのある黒色土による単層であり、他の土坑とは様相が異なるが、人為的に土坑が埋められたかどうかは不明である。

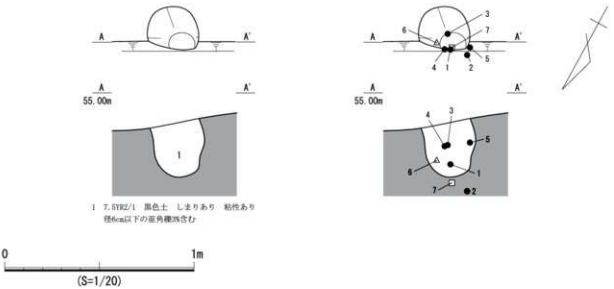
注

1）石黒立人氏（愛知県埋蔵文化財センター）の御教示による。突帯のある１の特徴から馬見塚式併行期であり、伊勢周辺に類例がみられる。内外面に条痕を施し、幅の細い素文帯を貼り付ける例として四ツ野Ｂ遺跡包含層出土遺物がある。

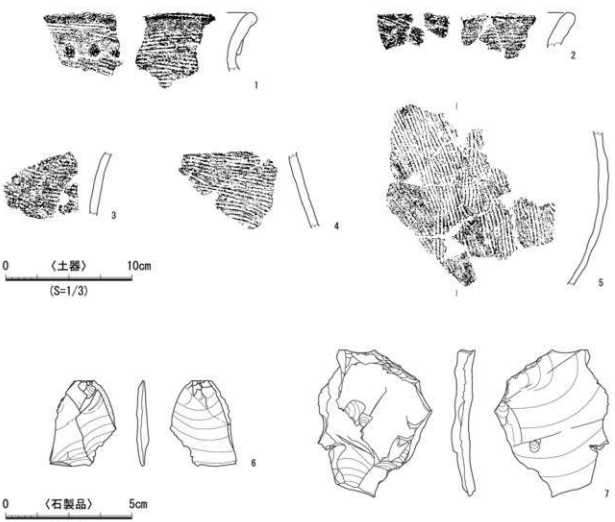
津市埋蔵文化財センター2005『津市埋蔵文化財センター年報９』

2）剥片の観察は倍率 10 倍のルーペで行った。摩耗痕は使用痕としての判別が難しく、埋没の過程で使用痕に類似した痕跡が形成されることがある（藤山 2013）。

藤山龍造 2013「“利器としての剥片”から考えるために－その認識に向けて－」『駿台史学』第 147 号、明治大学史学地理学会



第12図　SK93　遺構実測図及び遺物出土位置図



第13図　SK93　出土遺物

第４節　古墳時代の遺構・遺物

当古墳群では、これまでに合計 10 基の古墳が確認されており、うち、７基（２・３・４・５・７・９・10 号古墳）について発掘調査を実施した。遺跡は大円に２つの小円がつくような形状の丘陵に立地し、10 基中８基が発掘区南側及びその区外にあたる丘陵南東側（大円側）に位置する。

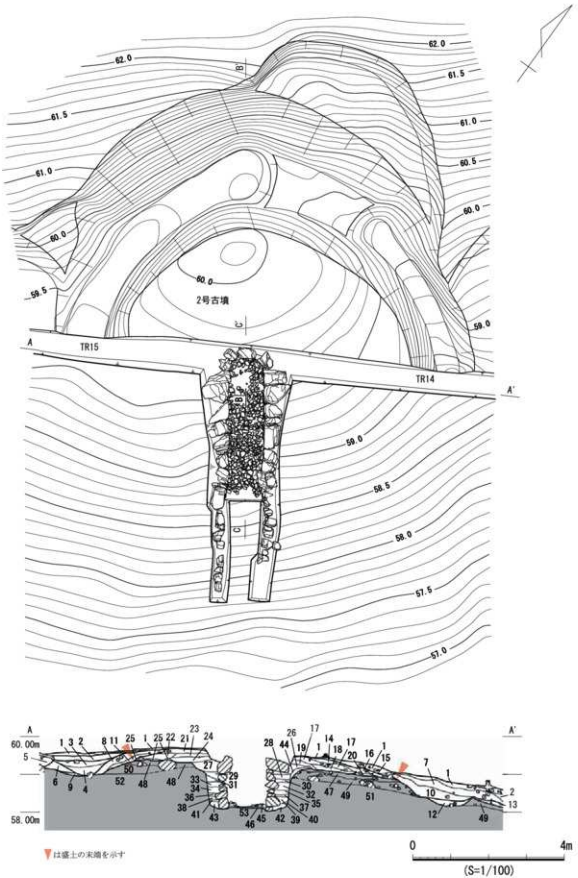
２・４号古墳では、墳丘及び埋葬施設の調査を行った。石室内からは須恵器・土師器・山茶碗・金属製品（耳環・刀子）・玉類が出土した。原位置を保っていたものはなく小破片で出土するものが大半であった。当該期の古墳としては副葬品の数が少なく、後世に盗掘にあったと思われる。また、墳丘の断割り調査によって古墳の築造過程が判明した。３・５号古墳は埋葬施設が発掘区外のため、周溝のみ調査を行った。なお、石室は発掘区にかかる範囲のみ解体し、完掘した。本節では、２・３・４・５・７・９・10 号古墳及び古墳以外の遺構（ST・SK）について以下に記述する。

（１）２号古墳

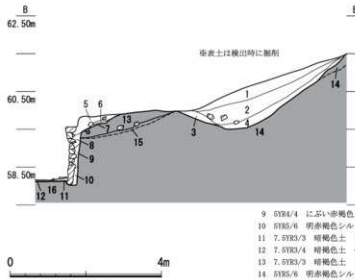
現況地形から墳丘が確認でき、試掘・確認調査時の TR５において、北側の墳丘及び周溝の範囲を確認した。発掘区の南側に沿ってトレンチを設定し土層観察を行った結果、墳丘の東西方向の範囲と、西側周溝が 10 号古墳墳丘よりも古く、東側周溝が４号古墳周溝よりも新しいという時期的前後関係を確認することができた。表土掘削後も埋葬施設の様相が判明しなかったため、TR14 と TR15 を繋ぐように掘削したところ、石室の奥壁及び南方に延びる側壁を確認した。さらに石室の平面形状を明らかにするために南へ発掘区を広げ、玄門部と羨道側壁の上面を確認した。その結果、両袖式横穴式石室をもつ円墳であり、周溝を含む古墳の規模は東西断面（A-A’断面）で 11.2ｍであることがわかった。

地山成形　小洞古墳群は丘陵南側裾部の緩斜面に立地し、小型の９・10 号古墳以外では古墳築造ごとに地山整形を行って墳丘を築造している。２号古墳では、標高 62.0ｍ付近から弧を描くような傾斜変換点が確認でき、急な傾きを形成して一見幅広の周溝にみえる。しかし、この溝の外縁は、東側で周溝に削平されて収束しており、墳丘後背部のみに作られたものと考えられる。これは、古墳築造初段階で、平坦面を造成するための地山成形時の溝（以下、「丘陵切断部」という）で、石室後背部の旧表土上面（B-B’断面 13 層上面）には平らに整地された面を確認できる。

墳丘（第 14・15 図）　発掘区内の墳丘及び周溝の形状から円墳と判断できるが、発掘区外の現況地形の高まりや石室の側壁石材の検出状況から、北西－南東方向に長い楕円形となると予想される。地山整形後、平坦面に石室掘方を掘り込み、石室の石積みと石室掘方内の充填が整地面（平坦面）に達した段階で、墳丘外方へ向かって盛土を開始する。旧表土上にはシルト質の暗褐色土が薄く堆積しており、西側では断片的にしかみられないが、東側では盛土がのる範囲に広がっている。その上層に堆積する墳丘盛土は、西側では約 1.8ｍの範囲に水平に堆積し、東側では約 2.7ｍの範囲に斜めに堆積している。この違いは東へ８° 下がる傾斜のある旧表土の地形に起因するものと考えられる。北側では石室から約１ｍの範囲に斜めに堆積するように盛土が観察され、東・西側に比べて盛土範囲が狭い。また、旧表土上に炭化物（第 15 図第７層）がわずかに確認できるが、２号墳及び４号古墳の墳丘基底面上に黒色系の土の広がりを確認できず、地山整形後に野焼が行われた可能性は低い。墳丘規模は、東西断面の傾斜変換点を結んで算出される範囲から短径 8.2ｍである。墳丘高は墳丘西側盛土の最高点



第14図　２号古墳　墳丘平面図及び土層断面図



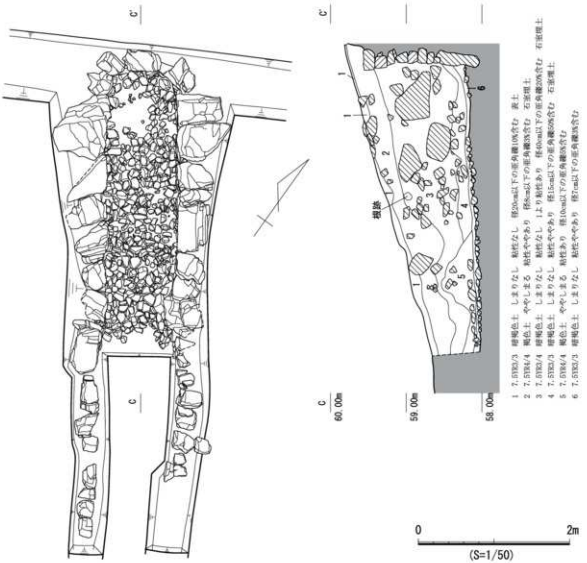
B-B' 断面

1 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし
径12cm以下の亜角礫を3%含む 礫は墳丘側に集中 周溝埋土
2 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径25cm以下の亜角礫を3%含む 礫は墳丘側に集中 周溝埋土
3 7.5YR4/4 褐色土やや暗色 しまりなし 粘性ややあり
礫をまさず 墳丘からの流土
4 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径8cm以下の亜角礫を2%含む 礫は墳丘側に集中 周溝埋土
5 7.5YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径11cm以下の亜角礫10%含む 墳丘盛土
6 7.5YR4/4 褐色土（やや明色） やや しまる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫3%含む 墳丘盛土
7 炭化物
8 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる
炭化物が混じる 石室掘方埋土
9 5YR4/4 にぶい赤褐色土 しまりなし 粘性あり 礫を含まず 石室掘方埋土
10 5YR5/6 明赤褐色シルト しまりなし 粘性あり 径4cm以下の亜角礫1%含む 石室掘方埋土
11 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 礫床以外の礫を含まず 整地層
12 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径3cm以下の亜角礫2%含む 整地層
13 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径15cm以下の亜角礫15%含む 旧表土
14 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり 径5cm以下の亜角礫を2%含む 基盤層
15 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり 径5cm以下の亜角礫2%含む 基盤層
16 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり 径3cm以下の亜角礫3%含む 基盤層

A-A' 断面

1 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径15cmの亜角礫3%含む 表土
2 7.5YR3/4 暗褐色土（やや明色） やや しまる 粘性ややあり
径10cmの亜角礫3%含む 流土
3 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径15cm以下の亜角礫を3%含む 周溝埋土（10号古墳）
4 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性あり
径5cm以下の亜角礫2%含む 周溝埋土（10号古墳）
5 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径7cm以下の亜角礫2%含む 根掘乱
6 7.5YR3/4 暗褐色土 しまる 粘性あり
径5cmの亜角礫1%含む 墳丘盛土（10号古墳）
7 2.5YR4/4 褐色シルト（やや暗色） やや しまる 粘性なし
径12cm以下の亜角礫3%含む 墳丘からの流土
8 7.5YR4/4 褐色シルト やや しまる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫2%含む 墳丘からの流土
9 7.5YR4/3 褐色土 やや しまる 粘性あり 径15cm以下の亜角礫3%含む 周溝埋土
10 7.5YR3/2 黒褐色土 やや しまる 粘性なし
径10cm以下の亜角礫7%含む 周溝埋土（4号古墳）
11 7.5YR4/3 褐色土 しまる 粘性なし 径7cmの亜角礫1%含む 墳丘盛土
12 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径6cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
13 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径6cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
14 7.5YR3/2 黒褐色土 やや しまる 粘性なし
径6cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
15 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径6cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
16 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径6cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
17 7.5YR4/4 褐色土 しまる 粘性なし 径10cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
18 5YR2/2 極暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径2cmの亜角礫1%含む 墳丘盛土
19 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径5cmの亜角礫2%含む 墳丘盛土
20 7.5YR3/4 暗褐色土やや シルト質 やや しまる 粘性なし
径2cmの亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
21 7.5YR4/6 褐色土 しまる 粘性ややあり 径10cmの亜角礫3%含む 墳丘盛土
22 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径14cmの亜角礫3%含む
23 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径3cmの亜角礫2%含む
24 7.5YR2/2 極暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり 径2cmの亜角礫1%含む
25 7.5YR3/4 暗褐色土やや シルト質 やや しまる 粘性なし
径3cmの亜角礫2%含む 明赤褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
26 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径2cm以下の亜角礫1%含む 褐色土ブロックが混じる 炭化物が混じる 石室掘方埋土
27 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径1cm程度の亜角礫2%含む 径0.5cm以下の亜角礫30%含む 石室掘方埋土
28 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫3%含む 石室掘方埋土
29 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫2%含む 石室掘方埋土
30 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径2cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
31 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径2cm以下の亜角礫3%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
32 5YR5/6 明赤褐色シルト やや しまる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫3%含む 黒褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
33 5YR5/6 明赤褐色シルト やや しまる 粘性ややあり
径2cm以下の亜角礫2%含む 黒褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
34 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性あり
径3cm以下の亜角礫1%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
35 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径3cm以下の亜角礫3%含む 石室掘方埋土
36 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径4cm以下の亜角礫3%含む 石室掘方埋土
37 5.YR5/6 明褐色シルト しまりなし 粘性あり 礫を含まず
石室掘方埋土
38 5.YR5/6 明褐色シルト しまりなし 粘性あり 礫を含まず
暗褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
39 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
40 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
41 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
42 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径7cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
43 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径4cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが多く混じる
石室掘方埋土
44 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径2cm以下の亜角礫3%含む 撹乱な礫多い 石室掘方埋土
旧表土の流れ込みか
45 7.5YR3/2 黒褐色土 やや しまる 粘性ややあり
礫床以外の礫をさまず 整地層
46 7.5YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫2%含む 整地層
47 7.5YR2/2 黒褐色土 やや しまる 粘性なし
径15cm以下の亜角礫10%含む 旧表土
48 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径50cm以下の亜角礫10%含む 旧表土
49 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性なし
径10cm以下の亜角礫3%含む 撹乱層
50 7.5YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性なし
径9cm以下の亜角礫5%含む 撹乱層
51 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト しまる 粘性あり 礫を含まず 基盤層
52 7.5YR4/6 褐色シルト しまる 粘性あり
径20cm以下の亜角礫3%含む 基盤層
53 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり
径7cm以下の亜角礫3%含む 基盤層

第15図　２号古墳　墳丘及び周溝土層断面図

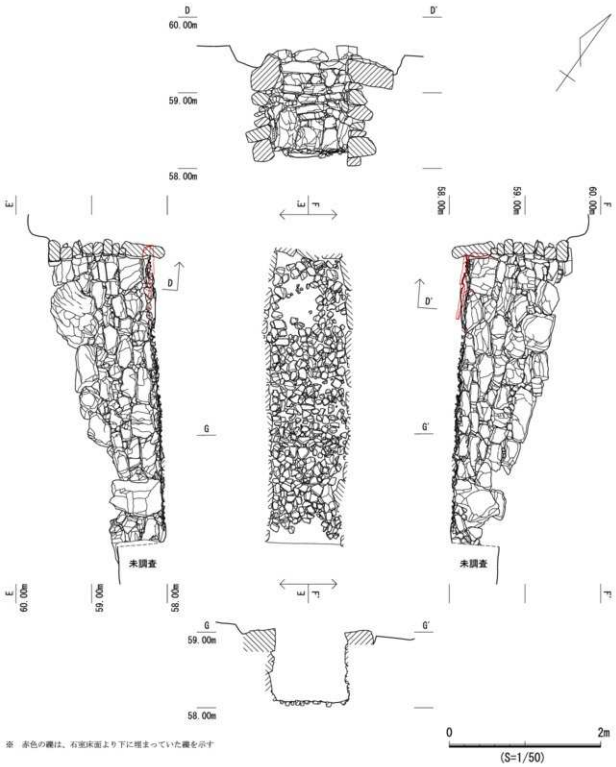


第16図　2号古墳　石室平面図及び土層断面図

高－東側傾斜変換点から1.2mである。

周溝（第14・15図）　墳丘北側及び東西両側で確認した。北側は丘陵切断部法面から平坦面にかけて掘削し、墳丘を独立させる。B-B'断面で幅3.9m、深さ1.5mである。西側は、10号古墳の墳丘盛土によって一部被覆され、10号古墳墳丘盛土の下層に当たる9層（第14図）を2号古墳の周溝埋土とすると、幅2.1m、深さ0.4mである。東側は4号古墳の周溝を一部削平する。A-A'断面では、幅2.0m、深さ0.7mである。南側は発掘区外のため不明であるが、斜面上方から下方に向かって周溝の規模が縮小しており、羨道部側は周溝が途切れる可能性が高い。また、土師器の小破片6点が周溝北東部の埋土から出土したが、内外面ともに磨耗が激しく時期不明である。

石室（第16・17図）　全長6.12mとなる両袖式の横穴式石室である。玄室は玄門立柱石によって区画され、玄室長は2.88mである。玄室の幅は、奥壁付近で0.82m、中央付近で0.98m、玄門付近で0.94mであり、ゆるやかな胴張り形となる。天井石は残っておらず、周囲にそれらしい石材も確認で



第17図　２号古墳　石室実測図

きなかった。石材は全てチャートである。

奥壁は、高さ0.3～0.6m、幅0.25～0.35m、奥行き0.13～0.2mの石材（腰石）を用いて最下段とし、平積みで3枚並べ、その上部に長手積みを基本に8段程小ぶりな石材を積み上げている。側壁の基底石はやや外傾（傾斜角度99°）するように置かれ、奥壁と両側壁のなす隅角に丸みを持たず明瞭な角を成し、右隅角のなす角度を102°とやや開くことによって石室の幅を広げている。両隅角部の中位以上には、奥壁と側壁を繋ぐように石材を斜めに架け渡す積み方が採用されるが、中位の高さは奥壁左端基底石の高さと一致する。また、内傾させながら積む「持ち送り技法」の開始点もこの高さと一致しており、基底石の高さを石室構築の基準としていたことが伺える。

側壁は、両側ともに6段目までを確認した。石材は、小口積みか長手積みによって積み上げられるが、両側壁の奥壁に接するやや大振りな石材は、奥壁と同じく平積みで設置されている。さらに、これらの石材の下（石室床面よりも下）には扁平な石材を敷いており、旧表土の傾斜を意識した高さ調節を行っている。傾斜に沿って石材を積んでいるため、奥壁から入口に向かって下がる横目地が通る。奥壁付近の0.8mの高さ及び玄門立柱石の高さでは、入り口に向かって10°下がる横目地が通るが、この目地より上方の石材は下方よりも大きく、特に奥壁側から2、3番目の石には奥行0.7m以上ある大型石材が用いられている。この大型石材は、旧表土直上付近に位置すると想定される。なお、石室埋土中に側壁石材と思われる大型の礫を確認した。

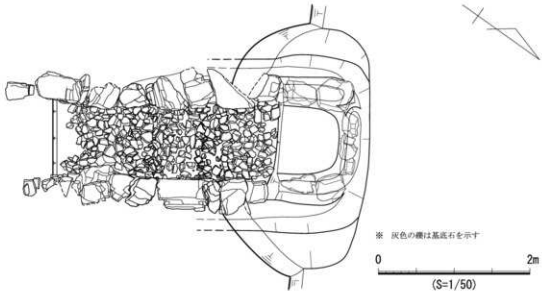
玄室床面は、ほぼ全面に0.05～0.2mの角礫を敷き詰めている。奥壁付近は、大型石材の崩落により礫床の礫が粉砕された可能性があり、掘削の際に埋土中の礫として取り外したものもあると思われる。玄室入り口付近では礫床上に拳大の礫による層（第16図5層）が確認できるが、崩落に伴って流入した土砂による層の下層から検出したこと、面が揃わないことから崩落に伴うものと思われる。

羨道　両側共に縦長の大振りな石材を平積みにして玄門立柱石とする。袖部は内側にあまり突出せず、玄門部の幅は0.78mである。羨道部は、両袖石以南の残存する側壁上面を確認したのみにとどまり、幅は0.9～1.0mである。石積みや礫床、前庭との境の状況は未調査のため不明である。右側壁の玄門から約1.5m南の位置に、外方に続く可能性のある石材1点を確認している。

石室掘方（第18図）　発掘区内にかかる奥壁周辺部分のみ基底石まで石室を解体し、石室掘方の調査を実施した。掘方上端の幅は3.12m、高さは奥壁付近で1.32mである。奥壁側はほぼ垂直に下がるのに対し、側壁側は外に開く形状であり、西側上方には段がみられる。東側上方には旧表土層（第14図44層）が掘方に向かって流れ込む状況が確認でき、東西側から石材を搬入した結果傾斜ができたと考えられる。奥壁・側壁の基底石下には、緩やかな溝状の掘り込みが確認できる。奥壁ではこの掘り込みを据付溝として利用しているが、側壁では掘り込み幅よりも大きな扁平石材を乗せている。調査時には、この溝をつたって排水される様子が確認され[1]、石室構築段階における排水機能を果たしていた可能性もあるが現段階で類例等は見出せない。掘方壁と石材の間は、黒褐色土・明褐色シルト等を側壁設置に合わせて埋めている。

その他の施設　閉塞施設、前庭部ともに、発掘区内で確認できなかった。旧表土の傾斜にあわせて石室を構築したため石室が入り口方向に下がる構造となり、石室構築後も排水機能は保たれていたと思われる。

遺物出土状況（第19図）　石室内部から須恵器3点（鉢2、甕破片1）、耳環1点、刀子1点が出土し

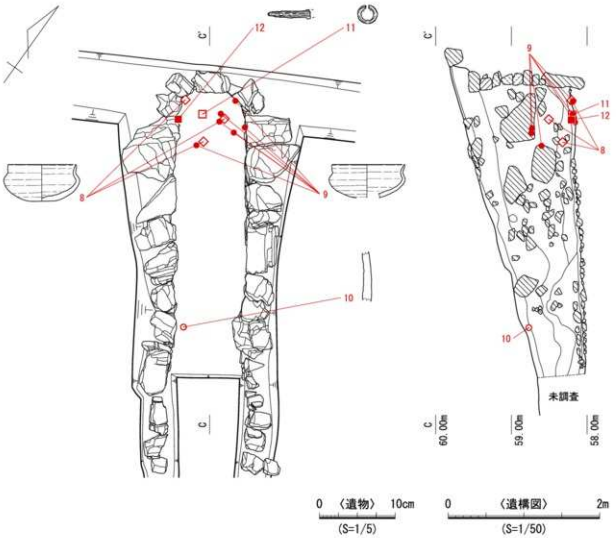


第18図　２号古墳　石室掘方平面図

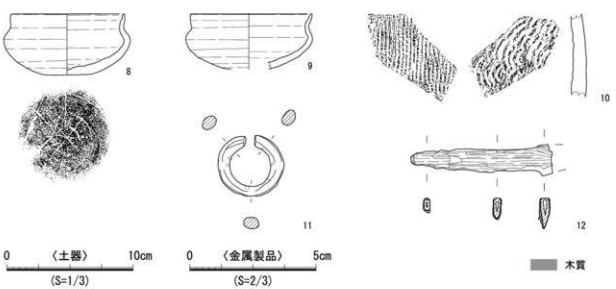
た。出土層位は、須恵器鉢は床面直上から石室埋土下層、耳環及び刀子は床面直上で、奥壁付近に集中している。須恵器甕破片は出土層位が表土であることや同一個体と思われる破片が出土していないことから、この石室に伴うものではない可能性が高い。

出土遺物（第 20 図）　８・９は、須恵器の小形の鉢である。８は、口縁部は緩やかに外反したのち、端部付近で内湾する。端部は丸くおさめ、内側に段がみられる。肩部はやや強めに張り出す。底部は厚く、外面には回転ヘラケズリを施す。底部外面は平らで板目痕がみられ、ヘラ記号を刻む。内面には回転ナデが施され、底部内面にはユビオサエがみられる。胎土分析の結果（第４章詳述）から、丸山古窯産であることが判明した。９は、口縁部は外反したのち端部付近で内湾するが、８よりも強く外反する。端部は丸くおさめ、口縁部内面には段がみられる。肩部の張り出しは緩やかで、体部外面下半には回転ヘラケズリを施している。丸山古窯等の在地産の可能性が高い。10 は須恵器の甕の体部片で、外面には平行文の叩き目、内面には同心円文の当て具痕がある。内面の当て具痕は凹凸が著しく、木製の当て具による。美濃須衛Ⅲ期前半に比定される。11 は、耳環の芯部分であり、緑青を確認できることから銅製である。平面形はほぼ正円形で、開口部は 0.4cm 開く。全面に面をとり、断面は 0.4cm×0.6cm の楕円形である。環の内側には縦方向の皺が確認できる。開口部端面はほぼ平らである。外表面は全て剥がれており不明である。長径（左右径）2.6cm×短径 2.5cm、現重量 8.5g である。12 は、刀子の茎から刃部基部にかけての破片であり、片関である。茎部茎尻に向かって細くなり、断面長方形である。茎部の両面には木質が残る。現存長 5.6cm、茎部長 5.3cm である。

小結　古墳の築造時期は、以下のとおり石室形態や石室内の床面に近い位置から出土した須恵器８・９から判断した。石室の平面形が胴張り形であることや、玄門立柱石によって両袖の玄門部を形成するのは、美濃地方における６世紀後半代以降の代表的な特徴[2]であるが、袖部の張り出しが浅く末期的な様相を示している。小形の鉢は、美濃地方において７世紀代に限定的にみられる器種である。胎土分析の結果では明確な産地は判明しなかったが、肉眼での観察では在地産の可能性が高いと判断した。当遺跡から最も近い丸山古窯群は、丸山２号窯出土須恵器の形態から、美濃須衛Ⅲ期前半に併行



第19図　２号古墳　石室内遺物出土位置図



第20図　２号古墳　出土遺物

すると考えられている[3]。石室形態は6世紀後葉の特徴を備えており、出土遺物の所属年代とは若干ずれが生じる印象であるが、遺物の出土状況や床面の状態から追葬時に関わる痕跡は確認できなかった。

以上のことから2号古墳の築造時期は、6世紀末から7世紀前半と時期幅を見ておく必要がある。また、丘陵切断線や周溝の重複関係から、構築の順序は4号古墳→2号古墳→10号古墳であると推測されるが、後述する4号古墳とは墳丘規模や石室の形態が近似することから、比較的短期間のうちに築造された可能性が高い。

（2）3号古墳

発掘区のほぼ中央に位置する。南に開口する横穴式石室が地表面に露出しているが、発掘区外のため今回は調査を行っていない。ここでは発掘区にかかる墳丘北側の周溝について記述する。現存する石室の中軸線を北へ延長して主軸を設定し、土層観察用畔（B－B'断面）を残して掘削し、発掘区南壁で周溝の東西断面（A－A'断面）の観察を行った。

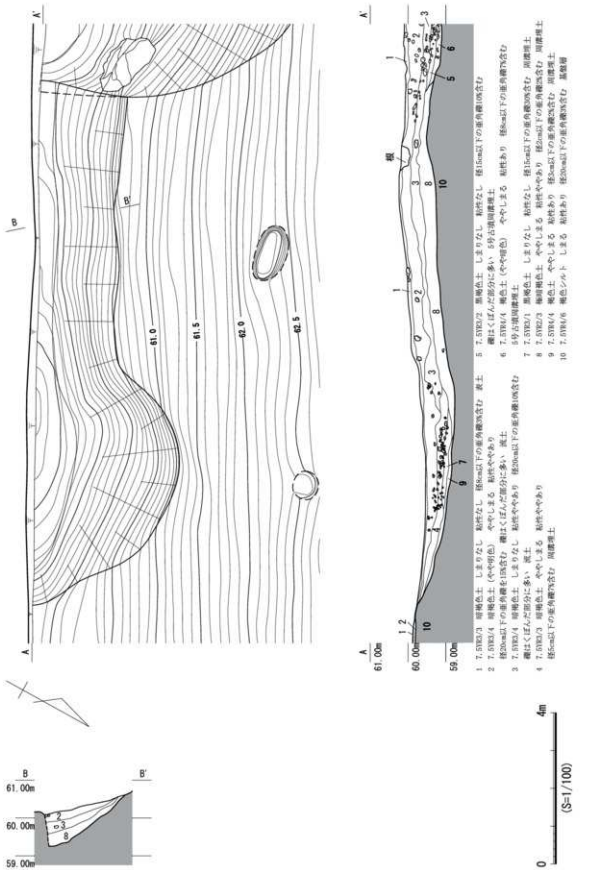
周溝（第21図）　外側の上端ラインが西から東に向かって直線的に伸び、東側で大きく膨らんで南側へ下る。東側の膨らみは、底面の傾斜角度や埋土の状況から、この直線部分と一続きであると判断した。西側の最大幅は2.5m、東側の土取り部分の最大幅は4.0mである。外側法面に傾斜変換点は確認できず、丘陵切断を行ったかどうかは不明である。周溝に8層が堆積した段階で5号古墳の周溝に削平されている。この重複関係から、3号古墳は5号古墳よりも古い時期に築造されたことがわかるが、現存する石室の形状から時期差はほぼないと考えられる。遺物は出土しなかった。

（3）4号古墳

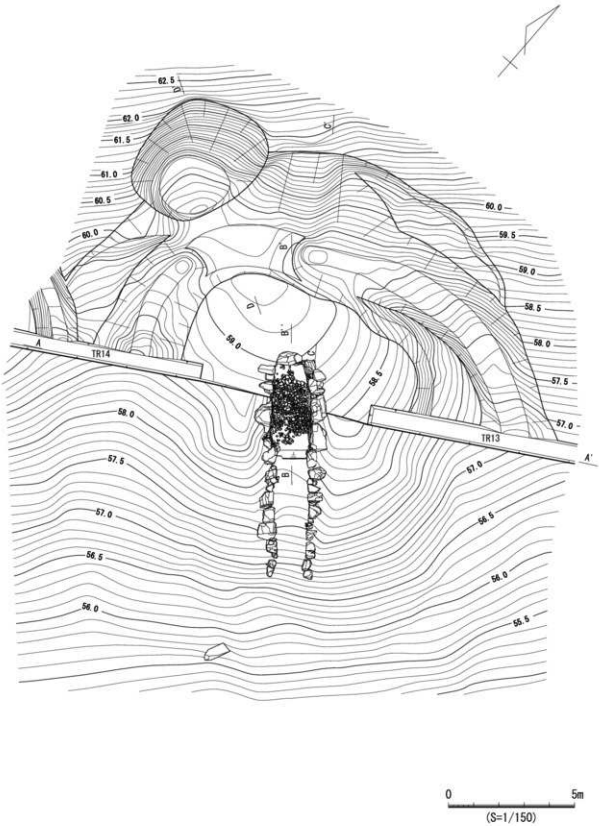
2号古墳の東側に位置し、今回調査した古墳の中で、石室・墳丘ともに最大の古墳である。現地表面で墳丘と石室の一部が確認でき、試掘・確認調査のTR4において北側の墳丘及び周溝の範囲を確認した。発掘区南壁に沿って設定したトレンチ（TR13・14）の土層観察によって墳丘の東西範囲と構造が明らかになった。埋葬施設の構造を明らかにするため、発掘区を南側へ拡張し、玄室と羨道側壁の上面を確認した。その結果、4号古墳は両袖式横穴式石室をもつ円墳であり、周溝を含む古墳の規模は19.4mであることがわかった。

地山成形　2号古墳同様、丘陵切断を行い、石室構築のための平坦面を造成する。丘陵切断は標高61.1m付近より弧を描くように、墳丘後背部のみに行われた。東側では標高58.5m付近で周溝の掘り込みに、西側では隣接する2号古墳の周溝に削平される。この切断部が2号古墳の丘陵切断部と繋がるかは不明であるが、地山成形が古墳築造毎に行われていたとすれば、この重複関係から4号古墳→2号古墳という築造順を想定することができる。石室後背部の旧表土上面（B-B'断面15層上面）は平坦に成形されており、この平坦面までの深さは約3.0mである。この平坦面は、石室天井石のレベルとほぼ同じになると予想される。

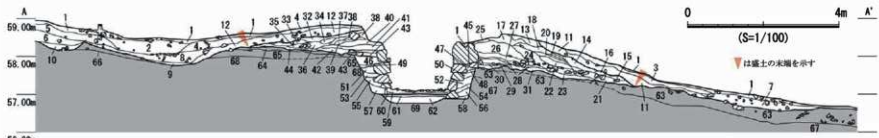
墳丘（第22・23図）　発掘区内の墳丘及び周溝の形状から円墳と判断されるが、平面形状は2号古墳と同様、北西－南東方向に長い楕円形となると予想される。地山整形後、平坦面に石室掘方を掘り込み、石室の石積みが石室掘方の上端に至った段階で盛土を開始し、墳丘を築造する。旧表土直上には



第21図　３号古墳　周溝平面図及び土層断面図

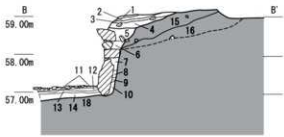


第22図　４号古墳　墳丘平面図



第23図 4号古墳 墳丘土層断面図

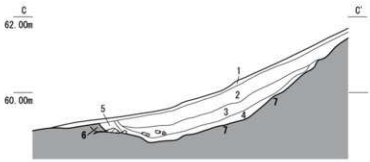
1 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径12cm以下の亜角礫3%含む 表土
2 7.5YR3/4 暗褐色土（やや明色） ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の亜角礫5%含む 流土
3 7.5YR3/3 褐色シルト やや固まる 粘性なし 径5cm以下の亜角礫2%含む 墳丘からの流土
4 7.5YR4/6 褐色シルト やや固まる 粘性なし 径5cm以下の亜角礫3%含む 墳丘からの流土
5 7.5YR4/4 褐色シルト（やや暗色） やや固まる 粘性なし 径12cm以下の亜角礫3%含む 墳丘からの流土（2号古墳）
6 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径12cm以下の亜角礫3%含む 墳丘からの流土
7 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性あり 径3cm以下の亜角礫2%含む 周溝埋土
8 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性なし 径10cm以下の亜角礫を7%含む 周溝埋土
9 7.5YR4/4 褐色土（やや暗色） やや固まる 粘性ややあり 径4cm以下の礫を3%含む 周溝埋土
10 5YR3/2 黒褐色土 しまる 粘性なし 径6cm以下の亜角礫5%含む 周溝埋土（2号古墳）
11 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径10cm以下の亜角礫1%含む 墳丘からの流土
12 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘からの流土
13 5YR5/6 明赤褐色シルト やや固まる 粘性なし 径4cm以下の亜角礫5%含む 墳丘盛土
14 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径4cm以下の亜角礫5%含む 墳丘盛土
15 5YR4/4 にぶい赤褐色土 やや固まる 粘性あり 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
16 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 礫を含まず 墳丘盛土
17 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径7cm以下の亜角礫3%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
18 7.5YR3/4 暗褐色土 しまる 粘性ややあり 径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが多く混じる 墳丘盛土
19 5YR5/6 明赤褐色シルト やや固まる 粘性なし 径4cm以下の亜角礫2%含む 墳丘盛土
20 7.5YR3/4 暗褐色土 しまる 粘性ややあり 径2cm以下の亜角礫1%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
21 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径22cm以下の礫を2%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
22 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり 径2cm以下の亜角礫2%含む 暗褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
23 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径22cm以下の亜角礫25%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
24 7.5YR2/2 黒褐色土 やや固まる 粘性なし 径15cm以下の亜角礫3%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
25 5YR4/4 にぶい赤褐色土 しまりなし 粘性なし 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
26 7.5YR2/3 極暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径1cm以下の亜角礫2%含む 墳丘盛土
27 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性なし 径14cm以下の亜角礫3%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
28 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径15cm以下の亜角礫10%含む 墳丘盛土
29 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径6cm以下の亜角礫7%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
30 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径7cm以下の亜角礫5%含む 墳丘盛土
31 5YR4/4 にぶい赤褐色土 しまる 粘性あり 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
32 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径4cm以下の亜角礫1%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
33 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径10cm以下の亜角礫3%含む 墳丘盛土
34 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
35 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径4cm以下の礫を2%含む 墳丘盛土
36 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径13cm以下の亜角礫10%含む 墳丘盛土
37 5YR5/6 明赤褐色シルト やや固まる 粘性なし 径3cm以下の亜角礫2%含む 墳丘盛土
38 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 墳丘盛土
39 5YR5/6 明赤褐色シルト やや固まる 粘性なし 径11cm以下の亜角礫3%含む 墳丘盛土
40 7.5YR3/3 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径5cm以下の礫を3%含む 墳丘盛土
41 7.5YR2/2 黒褐色土 やや固まる 粘性ややあり 径12cm以下の亜角礫7%含む 墳丘盛土
42 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径15cm以下の亜角礫10%含む 墳丘盛土
43 7.5YR4/6 褐色土 しまる 粘性ややあり 径2cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
44 7.5YR4/6 褐色土 しまる 粘性ややあり 径4cm以下の亜角礫1%含む 墳丘盛土
45 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
径4cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
46 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性なし
径15cm以下の亜角礫7%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
47 7.5YR4/6 褐色土 しまる 粘性やや 礫を含まず 石室掘方埋土
48 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性ややあり
径1cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
49 7.5YR3/2 黒褐色土 やや固まる 粘性なし
径3cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
50 7.5YR3/1黒褐色土と7.5YR4/6褐色土の混合土 やや固まる 粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫を2%含む 石室掘方埋土
51 7.5YR5/6 明褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径4cm以下の亜角礫2%含む 石室掘方埋土
52 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径2cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
53 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
径8cm以下の亜角礫2%含む 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
54 7.5YR3/4 暗褐色土 やや固まる 粘性ややあり
径2cm以下の亜角礫1%含む 黒褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
55 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 礫を含まず 褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
56 7.5YR2/2黒褐色土と7.5YR4/6褐色土の混合土 やや固まる 粘性ややあり
径2cm以下の亜角礫1%含む 石室掘方埋土
57 7.5YR4/4 褐色土 しまる 粘性あり 礫を含まず 暗褐色土ブロックが混じる 石室掘方埋土
58 7.5YR4/6 褐色土 しまる 粘性あり 径17cm以下の亜角礫1%含む 石室掘方埋土
59 7.5YR3/4 暗褐色土（やや明色） やや固まる 粘性ややあり 径4cm以下の亜角礫3%含む 整地層
60 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径2cm以下の亜角礫2%含む 整地層
61 5YR5/6 明赤褐色シルト しまる 粘性あり 径3cm以下の亜角礫10%含む 整地層
62 7.5YR5/6 明褐色シルト やや固まる 粘性あり 径4cm以下の亜角礫1%含む 整地層
63 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の亜角礫25%含む 旧表土
64 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径7cm以下の亜角礫20%含む 旧表土
65 7.5YR2/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径50cm以下の亜角礫10%含む 撹乱層
66 7.5YR3/3 暗褐色土 やや固まる 粘性なし 径10cm以下の亜角礫7%含む 撹乱層
67 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまる 粘性あり 径5cm以下の亜角礫10%含む 基盤層
68 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト しまる 粘性あり 礫を含まず 基盤層
69 7.5YR5/6 明褐色シルト しまる 粘性あり 径10cm以下の亜角礫3%含む 基盤層



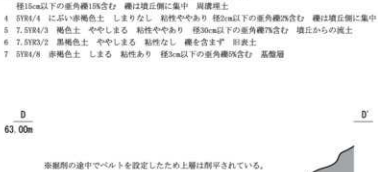
1　7.5YR4/4　褐色土　しまる　粘性あり　径2cmの亜角礫1%含む
　7.5YR5/8明褐色土ブロックが混じる　墳丘盛土
2　7.5YR4/3　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径3cmの亜角礫1%含む　墳丘盛土
3　7.5YR4/4　褐色土　しまる　粘性あり　径8cmの亜角礫を2%含む　墳丘盛土
4　7.5YR3/4　暗褐色土　しまる　粘性ややあり　径10cmの亜角礫7%含む　墳丘盛土
5　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径10cmの亜角礫7%含む（貼込めも含む）
　7.5YR5/6明褐色土ブロックが混じる　石室掘方埋土
6　7.5YR2/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし
　径3cm以下の亜角礫2%含む　7.5YR5/6明褐色土ブロックが混じる　石室掘方埋土
7　7.5YR2/2　黒褐色土　ややしまる　粘性なし　径2cm以下の亜角礫2%含む　石室掘方埋土
8　7.5YR4/6　褐色土　ややしまる　粘性あり　礫を含まず　石室掘方埋土
9　7.5YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径6cm以上の亜角礫2%含む　石室掘方埋土
10　7.5YR4/6　褐色土　しまりなし　粘性あり　礫を含まず　石室掘方埋土
11　7.5YR3/4　暗褐色土（やや明色）　ややしまる　粘性ややあり　径4cm以下の亜角礫3%含む　整地層
12　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　径2cm以下の亜角礫2%含む　整地層
13　5YR5/6　明赤褐色シルト　しまる　粘性あり径3cm以下の亜角礫10%含む　整地層
14　7.5YR5/6　明褐色シルト　ややしまる　粘性あり径4cm以下の亜角礫1%含む　整地層
15　7.5YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし径10cmの亜角礫2%含む　旧表土
16　5YR5/6　明褐色シルト　しまる　粘性あり径8cmの亜角礫2%含む　基盤層
18　7.5YR5/6　明褐色シルト（やや淡色）　しまる　粘性あり径10cm以下の亜角礫3%含む　基盤層

0　4m
(S=1/100)

第24図　4号古墳　墳丘及び周溝土層断面図



1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　径3cm以下の亜角礫2%含む　表土
2　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性なし（1層より粘性あり）
　径5cm以下の亜角礫7%含む　礫は墳丘側に集中　周溝埋土
3　7.5YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし（1層より粘性あり）
　径15cm以下の亜角礫15%含む　礫は墳丘側に集中　周溝埋土
4　5YR4/4　にぶい赤褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径2cm以下の亜角礫2%含む　礫は墳丘側に集中　周溝埋土
5　7.5YR4/3　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径30cm以下の亜角礫7%含む　墳丘からの流土
6　7.5YR3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性なし　礫を含まず　旧表土
7　5YR4/8　赤褐色土　しまる　粘性あり　径3cm以下の亜角礫5%含む　基盤層



1　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径30cm以下の亜角礫2%含む　周溝埋土
2　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　径8cm以下の亜角礫25%含む　周溝埋土
3　5YR3/4　暗赤褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径10cm以下の亜角礫20%含む　礫は南側に集中　周溝埋土
4　5YR4/6　赤褐色土　しまる　粘性あり　径2cm以下の亜角礫2%含む　周溝埋土
5　5YR4/4　にぶい赤褐色土　しまる　粘性あり　径2cm以下の亜角礫10%含む　周溝埋土
6　5YR4/8　赤褐色土　しまる　粘性あり　径4cm以下の亜角礫を5%含む　周溝埋土
7　7.5YR4/3　褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径2cm以下の亜角礫2%含む　墳丘からの流土
8　5YR4/3　にぶい赤褐色土　ややしまる　粘性あり　径6cm以下の亜角礫3%含む　周溝埋土
9　5YR5/6　明赤褐色シルト　しまる　粘性あり　径8cm以下の亜角礫2%含む　基盤層

赤褐色土の薄い土層（31・43・44層）が観察でき、その幅は盛土範囲に近い。東側では、この土層の直上付近で人頭大の礫を多数含む土層（23・27・28層）が観察できる。礫は墳丘の広がりに沿ってほぼ水平に並び、間隔が緩く墳丘を回らない。東側は盛土が厚いことから、これらの礫は盛土を支えるための石材の可能性がある。盛土は石室から外方に向かって行われ、西側では 3.3mの範囲でほぼ水平に堆積し、斜面下方にあたる東側では 4.1mの範囲で下方に伸びるよう斜めに堆積している。北側では、盛土は石室から約 1.8mの範囲でほぼ水平に堆積し、東西側に比べて盛土範囲が狭い。残存する墳丘の規模は、東西断面での盛土範囲から短径 10.2mである。墳丘高は、墳丘西側盛土の最高点高－東側盛土端部高から 1.4mである。

周溝（第 23・24 図）　墳丘の北側及び東西両側で確認した。北側は丘陵切断部法面から平坦面にかけて掘削する。東西側に比べて広く掘り込まれ、C-C’断面で幅 5.8m、深さ 2.2mである。西側は、A-A’断面において2号古墳周溝とぶつかる様子が確認でき、この部分の上幅は 4.7m、深さは 0.5mである。一方で旧表土の斜面下方にあたる東側は掘り込みが浅く、周溝底面が基盤層に達していない。北西側には直径約 4.5mの土坑状のくぼみがあり、周溝外縁を削平する。墳丘盛土に使用するための土取り時の掘り込みの可能性がある。また、周溝北西部（第 24 図 C-C’断面 2 層）より山茶碗が出土した。本章第 5 節に詳述する。

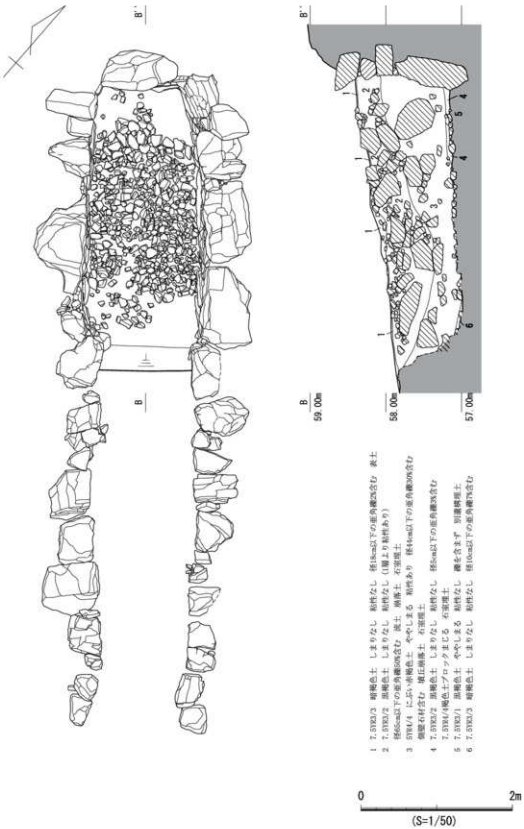
石室（第 25・26 図）　全長 8.28mの両袖式の横穴式石室である。玄室は 2 枚の石材を積み上げた袖部で区切られ、玄室長は 3.24mである。玄室の幅は、奥壁付近で 0.98m、中央付近で 1.52m、玄門付近で 1.40mである。玄室内側の基底石の並びは直線的で、平面形は長方形に近い。天井石は取り外されており、玄室床面直上の埋土が墳丘盛土に近い土色であることから、天井石が取り外される直前まで、石室の開口部から人が出入りできる状態であった可能性がある。石材は全てチャートである。

奥壁は、最下段に高さ 0.94m、幅 0.98m、奥行き 0.38mの大型石材 1 枚（鏡石）を平積みで置き、その上部にほぼ同じ幅のある石材を長手積みで 3 段積み上げている。最下段の大型石材はやや外傾（傾斜角度 103°）するように置かれ、上部の石材は内傾して「持ち送り構造」となり、4 段目の石材は庇状にせり出す。奥壁と側壁のなす隅角は丸みを持たず明瞭で、約 105° 開き石室を広げる。

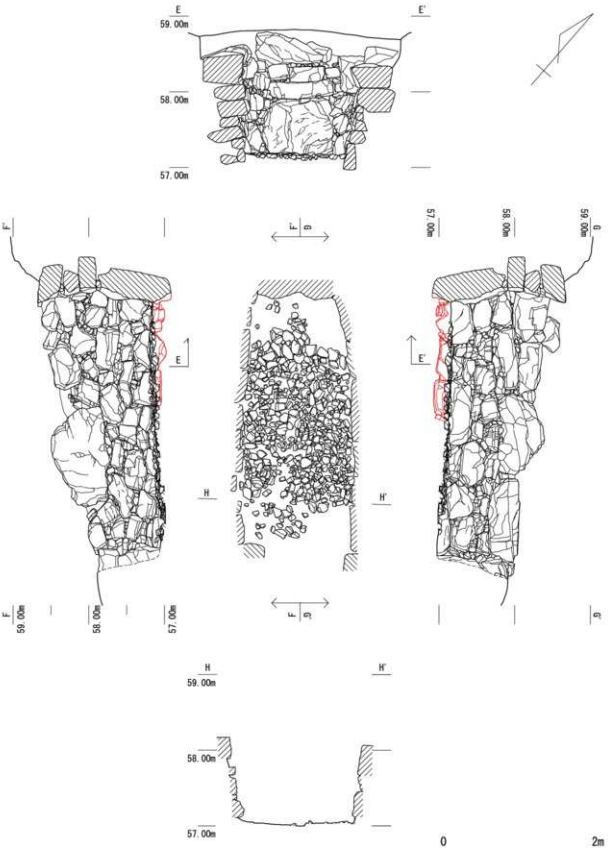
側壁は、両側ともに 6 段目までを確認した。袖石の上面の高さにあたる 3 段目に横目地が通り、この目地よりも下方には幅約 0.15～0.5mの石材が使用され、やや外傾気味に積む。目地よりも上方は幅約 0.4～1.5mの比較的大型の石材を使用しており、6 段目を内側にせり出すように積むことで「持ち送り構造」としている。旧表土には東へ 20° 程下がる傾斜があったと想定されるが、旧表土の角度に関係なく水平方向を意識した石積みが行われた。奥壁から約 1.5mの位置に配置された両側壁上方の特に大型の石材は、墓坑掘方の直上付近に位置すると想定される。なお、石室埋土中に側壁石材と思われる大型の礫を確認した。

玄室床面は、ほぼ全面に 0.05～0.5mの角礫を敷き詰めている。奥壁及び玄門付近は、床面を検出する際に埋土中の礫として取り外した可能性がある。礫は面を揃えて並べられ、奥壁側には比較的大きな礫を、玄門側には小型の礫を用いている。石室中央付近やや玄門寄りに川原石を 1 石含む[4]。

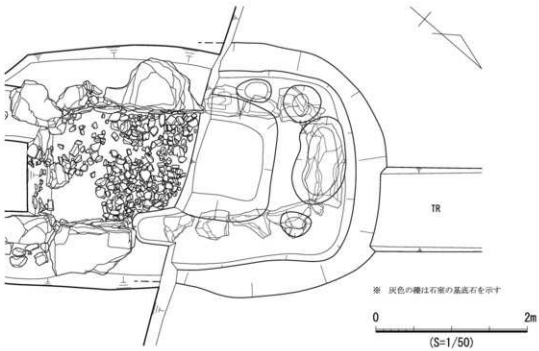
羨道　両側壁共に角柱状に石材を積み上げ、角をわずかに突出させることにより玄門部を設けている。袖部は内側にあまり突出させず、玄門部の幅は 1.05mである。羨道は、両玄門袖石以南の残存する側壁上面を確認したのみにとどまり、幅は約 1.1～1.4mである。玄門部から南へ 3.0mの位置にある石



第25図　４号古墳　石室平面図及び土層断面図



第26図　4号古墳　石室実測図



第27図　４号古墳　石室掘方平面図

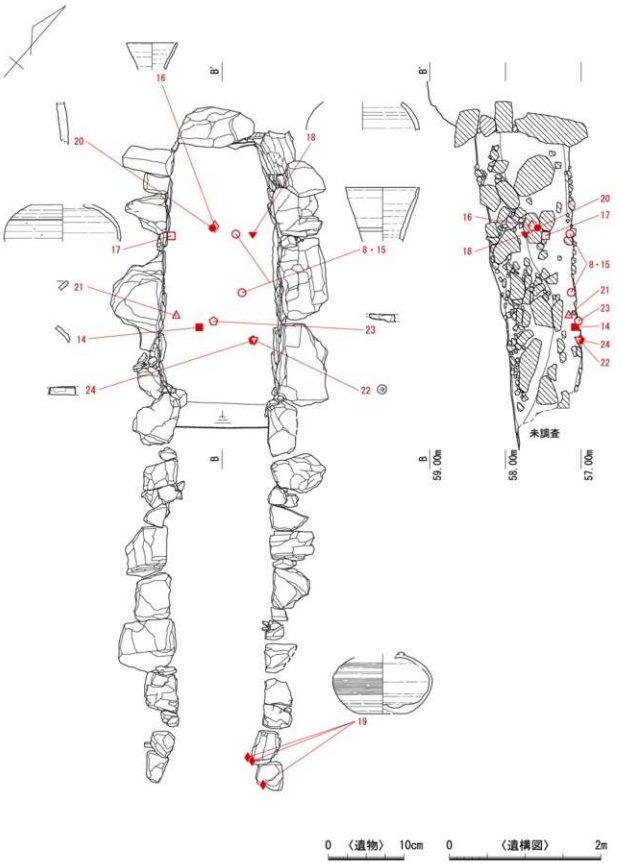
材から石室入口に向かってやや幅が狭くなり、平面位置が主軸から西へわずかにずれる。石積みや床面、前庭との境の状況は不明である。

石室掘方（第 27 図）　発掘区内にかかる奥壁周辺部分のみ石室を解体し、石室掘方の調査を実施した。掘方上端の幅は最大 3.34m、高さは奥壁付近で 1.76m である。外に向かって開く形状であるが、西側壁面には段がみられ、東側が西側よりも低くなっている。調査時には、斜面上方にあたる北側底面からの湧水が右側壁の基底石をつたって入口から石室外へ排水される様子が確認されており、底面の東西方向の傾斜を利用して石室積み上げ前の排水を図った可能性がある[5]。底部中央には深さ約 0.25m の掘り込みを設けるが、排水に関わるかは不明である。奥壁及び右側壁の基底石を設置後に基盤層と同じシルト質土（61・62 層）で整地している。これにより、右側壁基底石には完全に埋め殺しとなるものがある。掘方壁と石材の間は、黒褐色土・黄褐色土等を側壁設置に合わせて埋めている。

その他の施設　閉塞施設、前庭部ともに、発掘区内では確認できなかった。石室の掘方底面及び床面が入口に向かって下がることから、石室構築後も排水機能は保たれていたと思われる。

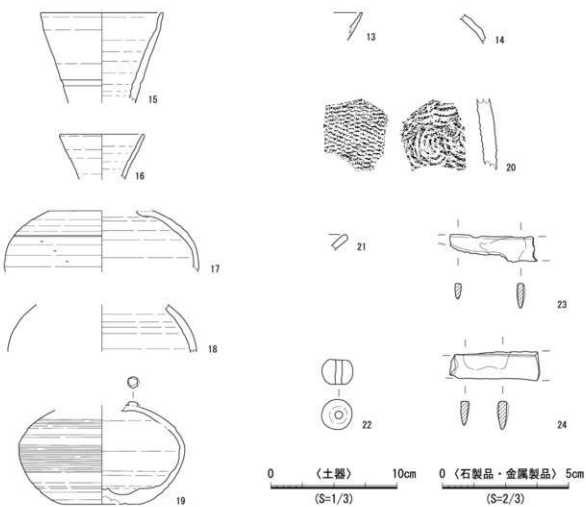
石室内出土遺物（第 28 図）　石室床面直上及び石室埋土（３層）から、須恵器破片 26 点、土師器片２点、刀子２点、石製玉１点、山茶碗１点が出土した。土器類は小片で、ほとんどが石室埋土中から出土した。石室入口側の遺物は床面直上付近から出土したが、原位置を保っていると判断できるものはない。19 は羨道入口付近から出土したが、墓前祭祀によるものか石室内からかき出されたものかの判断は難しい。

出土遺物（第 29 図）　13 は、須恵器坏の口縁部の破片である。直線的に外方へ伸び、器壁が非常に薄く、やや粗雑なつくりである。美濃須衛Ⅲ期前半～後半に比定できる可能性がある。14 は、坏蓋の破片である。畿内系の胎土である。15 は須恵器長頸壺で、口縁部の破片である。口縁部の大きさから、



第28図　4号古墳　石室内遺物出土位置図

脚部を有するような大型の長頸壺の可能性がある。14・15 ともに TK209 型式に比定される。頸部から口縁部に向かって広がり、外面下方には不明瞭な沈線を1条廻らす。内面には自然釉がかかる。畿内系の胎土ある。16～19 は須恵器平瓶である。16 は口縁部の破片で、やや直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。17 は、肩部から体部にかけての破片である。肩部に当たる部分には、やや不明瞭な沈線を1条施している。天井部に当たる部分には端部を丸く収めた円孔が開き、外面の円孔周辺には剥離痕がみられる。体部を成形後、粘土板でふさいだものである。胎土分析の結果、在地産であることが判明した。16 と 17 は同一個体の可能性がある。18 は、天井部から肩部にかけての破片と思われ、外面は磨耗が激しい。19 は体部で、平瓶にしては小型である。天井部付近に径約 0.9㎝ の円形浮文を貼り付けている。肩部は緩やかに張り出し、底部は非常に厚く、外面底部には板目痕が確認できる。内面底部には特に強い回転ナデによって中心部が山状に盛り上がっている。16～19 の平瓶は、その胎土から美濃須衛産と判断でき、Ⅱ期後半に比定できる可能性が高い[6]。20 は、須恵器甕の体部片である。外面には平行文タタキが交錯し、内面には同心円文の当て具痕跡が残る。美濃須衛Ⅲ期前半に比定さ



第29図　4号古墳　出土遺物

れる。21は、山茶碗の口縁部破片である。比較的厚みがあり、外反は少ない。尾張型第６型式に比定できる。22は、滑石製丸玉である。両面穿孔で、全面に仕上げ磨きを丁寧に行っている。最大径部 1.2cm、長さ 1.0cm、孔径 0.3cm、重さ 1.7ｇ。23・24は刀子である。23は、茎部から刃部基部にかけての破片で、茎部先端を欠く。片関で、茎部から刃部にかけてやや反る。断面は、背側に幅を持ち、刃部側を鋭利に仕上げている。現存長 3.3cm。24は、刃部の破片である。平面形は、背側にふくらみをもち、刃部側は内側にやや反る。断面は、背側に幅をもち、刃部側は鋭利に仕上げている。現存長 3.5cm、幅 1.2cm。23と同一個体の可能性もある。その他、近代陶磁器破片３点が出土している。

小結　古墳の築造時期は、石室形態や石室内から出土した須恵器により、以下のように判断した。

奥壁と側壁の隅角が明瞭に残り、袖部の張り出しからやや古い様相が感じられるが、横目地が通る施工単位は２号古墳と非常によく似ており、時期差は感じられない。石室内から出土した土器は元の位置を保っていると判断できるものはなく、TK209 型式に比定される畿内系胎土の土器（14・15）、美濃須衛Ⅱ期後半からⅢ期にかけての土器、丸山古窯産の可能性が高い在地産の土器など産地や所属時期に幅がみられるが、２号古墳よりもやや古手の土器が出土している。

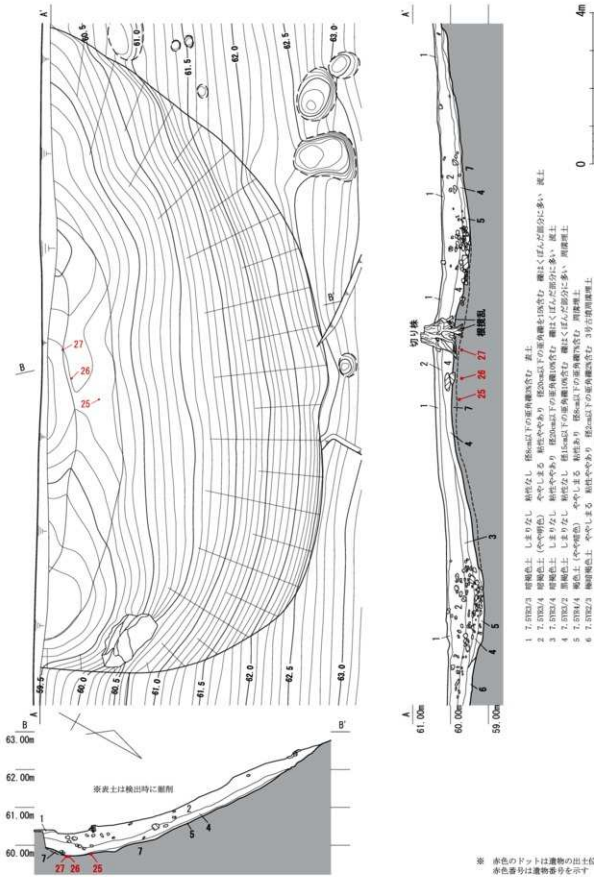
東側の丘陵切断部が２号古墳周溝に削平されることから、２号古墳に先行して築造されたことは明らかであり、石室形態や出土遺物に古い様相がみられることと矛盾しない。これらのことから、４号古墳が築造されたのは６世紀後葉から７世紀前葉と判断できよう。なお、遺物の出土位置に偏りはなく、整地土等の状況からも追葬時のものと判断できる痕跡は検出されなかったが、出土須恵器の産地にばらつきがあり、時期差もあることから追葬の可能性は十分に考えられる。床面直上から 21 が、石室埋土（３層）中から 16～18・20 が出土している状況から、遅くとも 13 世紀前半頃までに何らかの理由で天井石が外され、石室埋土の堆積状況から意図的に石室を埋めた可能性が高い。

（４）５号古墳

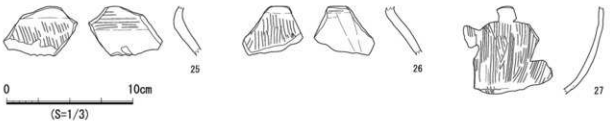
３号古墳の西側に位置する。３号古墳同様、南に開口する横穴式石室が地表面に露出しているが、発掘区外のため調査は行っていない。ここでは発掘区内にかかる墳丘北側の周溝について記述する。現存する石室の中軸線を北へ延長して主軸を設定し、土層観察用畔（B－B’断面）を残して掘削した。発掘区南壁で周溝の東西断面（A－A’断面）の観察を行った。

周溝（第 30 図）　半円形の平面プランを検出した。外側の上端ラインは、西側では緩やかな弧を描くのに対し、東側では南側に強く屈曲する弧を描く。傾斜変換点は確認できないが、比較的幅が広く、丘陵切断を行っている可能性もある。東側は３号古墳の周溝を削平するが、３号古墳を避けようとした意図によって急な弧になったと思われる。南北断面（B－B’断面）では幅約 7.5ｍであり、皿状に掘りくぼめている。南側に基盤層の若干の立ち上がりを確認できる。東西断面（A－A’断面）は、東西両側がくぼみ、中央部がやや膨らむ形状である。このくぼみ部分に堆積する３・４層には拳大の転石が多量に含まれていた。

遺物出土状況　東西断面の中央付近の基盤層直上埋土（４層）から、土師器片 20 点がまとまって出土した。いずれも小片で完形に復元できるものはなく、図化できたのは３点である。帰属する時期を決定することは難しい。また、出土した土層から古墳築造後近い時期に置かれたと思われるが、供献されたものなのか、破棄されたものなのかは判断できない。



第30図　５号古墳　周溝平面図及び土層断面図



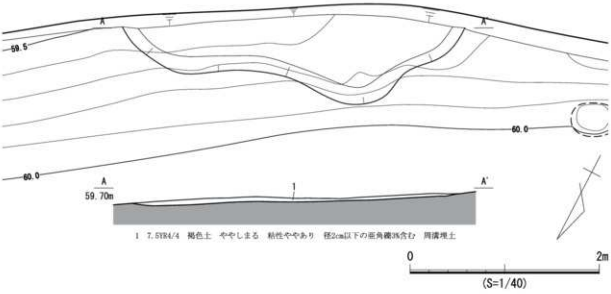
第31図　５号古墳　周溝出土遺物

出土遺物（第 31 図）　25・26 は甕の頸部の破片で、くびれ部は比較的ゆるやかである。外面は、くびれ部よりも上方にはヨコナデ、下方にはタテハケの調整を施す。内面は、くびれ部より上方にヨコナデを確認できる。26 は 25 とほぼ同じ調整を確認することができる。27 は甕の体部の破片である。外面にはタテハケ、内面にはナデ調整を確認できる。外面下方に粘土が重なる痕跡を確認でき、体部と底部の接合部とも考えられるが断定はできない。

（５）７号古墳

東西に並ぶ古墳の列中、ほぼ中央に位置し、現況地形の形状から円墳であると推測される。発掘区内から北側の周溝の一部を検出したため、発掘区南壁で周溝の東西断面（A－A’断面）の観察を行った。

周溝（第 32 図）　北側周溝の端部である。弧状を描くと思われるが、やや歪な形状である。３・５号古墳と比べて、東西方向への広がりをもたない。遺物は出土しなかった。

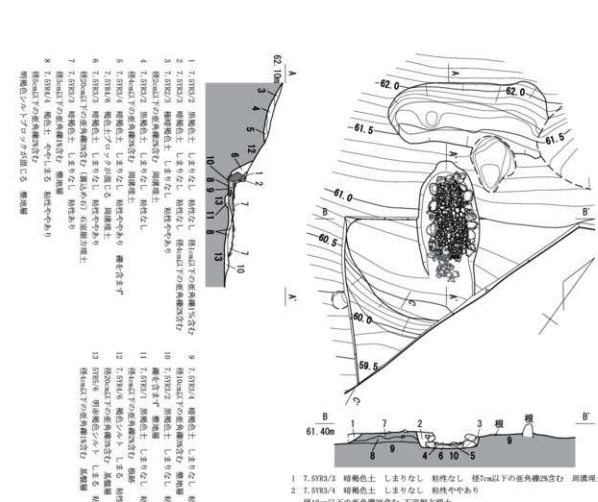


第32図　７号古墳　周溝平面図及び土層断面図

（６）９号古墳

発掘区の最も西側に位置する古墳であり、２・４号古墳と比較するとかなり小型である。重機による表土掘削の際に周溝と石室の一部を確認したため、人力掘削に変更して遺構の検出作業を行い、規模を確認した。その結果、９号古墳は南東に開口する横穴式石室をもつ円墳であることがわかった。

墳丘（第 33 図）　周溝が楕円形の弧を描くような形状であることから、南北方向にのびる円墳である。墳丘は重機掘削の際に消失した可能性があり、盛土状況は確認できない。特に南西側では、Ⅲb 層ま

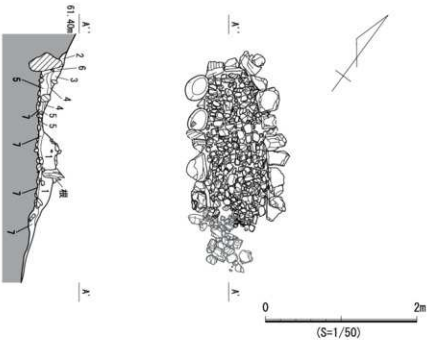


1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　径7cm以下の亜角礫2%含む　周溝埋土
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性ややあり
径10cm以下の亜角礫3%含む　石室掘方埋土
3　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性ややあり　礫を含まず　石室掘方埋土
4　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりなし　粘性ややあり　礫径以外の礫を含まず　整地層
5　7.5YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径5cm以下の亜角礫2%含む
明褐色シルトブロックが混じる　整地層
6　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　礫を含まず　整地層
7　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径6cm以下の亜角礫3%含む　旧表土
8　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　↓よりしまる　粘性ややあり
径6cm以下の亜角礫1%含む　廃棄層
9　7.5YR4/6　褐色シルト　しまる　粘性あり　径20cm以下の亜角礫3%含む　基盤層
10　5YR5/6　明赤褐色シルト　しまる　粘性あり　径4cm以下の亜角礫1%含む　基盤層

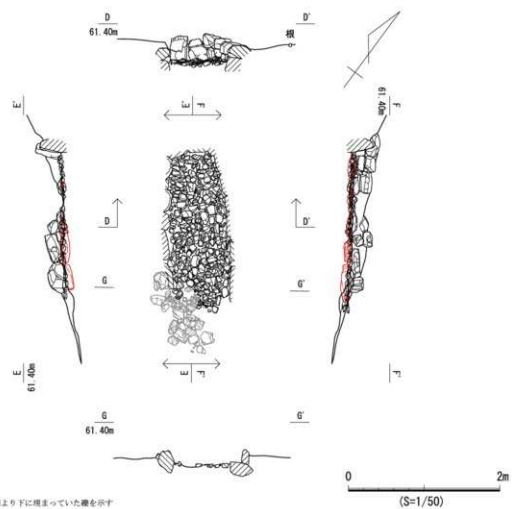
1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　径5cm以下の亜角礫18%含む　表土
2　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　径10cm以下の亜角礫30%含む　斜面上方からの流土　周溝埋土
3　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりなし　2よりしまる　粘性なし　2より粘性あり
7.5YR4/4　褐色土ブロックが混じる　径3cm以下の亜角礫2%含む　周溝埋土
4　7.5YR3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径25cm以下の亜角礫3%含む　旧表土

0　4m
(S=1/100)

第33図　９号古墳　平面図及び土層断面図

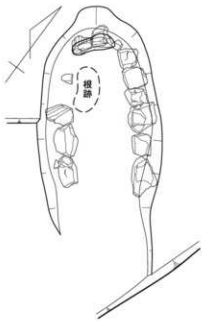


第34図　９号古墳　石室平面図及び土層断面図

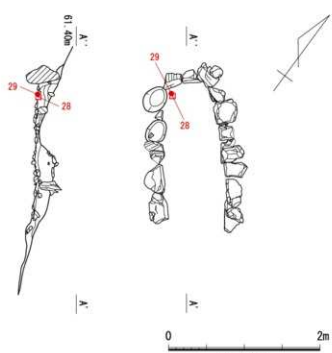


※　赤色の礫は、石室床面より下に埋まっていた礫を示す

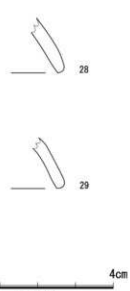
第35図　９号古墳　石室実測図



第36図　９号古墳　石室掘方平面図



第37図　９号古墳　石室内遺物出土位置図



第38図　９号古墳　出土遺物

でを削り出して墳丘の基礎を整えている。墳丘規模は、石室主軸方向を平面図上で計測すると 4.6m である。

周溝（第 33 図）　墳丘の北側で確認し、A-A' 断面で幅 1.6m、深さ 0.5m である。周溝の東端は倒木痕によって壊されているが、以東に伸びる様子はなく、墳丘後背部のみ掘削した可能性が高い。

石室（第 34・35 図）　残存部で全長 2.7m の横穴式石室である。石室の平面形状は、石室入口付近より南側が流出して確認できなかったため不明である。石室入口側の礫床は、調査時に後世の集石遺構と判断したため記録して取り外してしまったが、検討の結果石室の礫床と判断し、図上合成した。玄室基底部の幅は、奥壁付近で 0.51m、残存部の南東端側で 0.75m であり、胴張り形の可能性がある。天井石と思われる石材は確認できなかった。石材は全てチャートである。

奥壁は、高さ 0.2～0.43m、幅 0.09～0.28m、奥行き 0.12～0.23m の石材を 3 枚平積みで並べて基底石とする。奥壁と右側壁のなす隅角は不明瞭で、やや丸みをもつ。右側壁に接する奥壁基底石とその上段の石は、隅角が鈍角となるよう斜めに配置され、約 135° 開いて石室を広げる。

側壁は、両側ともに 2 段目までを確認した。左側壁の奥壁から 2 石は、検出時に石室内側に倒れこんでいたため取り外した。側壁は遺存状況が悪く目地は確認できないが、右側壁では奥壁基底石の高さに揃えるようにして石材を積んでいるように見え、2・4 号古墳同様横目地が通っていた可能性がある。基底石は、整地土・礫床に半分以上が埋まっている。残存する左側壁南端の石材は平積みされており、玄門部を意識した可能性があるが、右側壁で対応する石材はない。

玄室床面は、0.04～0.18m の角礫を、面を揃えて全面に敷き詰めている。入口に向かって下がる傾斜がある。

石室掘方（第 36 図）　幅は最大 1.62m、高さは奥壁付近で 0.54m である。平面形は不整な長方形になると思われ、右側は掘方上端が発掘区壁面まで伸びる様子から羨道が設けられていた可能性が高い。奥壁付近ほど深く、掘方底面には入口に向かってやや下がる傾斜がある。奥壁設置の際、掘方底面をさらに掘りくぼめている。

その他の施設　羨道、前庭、閉塞施設については、玄室入口以南が流出していることから、構造及びそれらの有無は不明である。排水施設は確認されなかったが、石室掘方及び礫床が入口に向かって下がる傾斜をもつことから、排水機能は保たれていたと思われる。

遺物出土状況（第 37 図）　石室奥壁側の床面直上から、須恵器の小片が 2 片出土した。

出土遺物（第 38 図）　28・29 は、蓋の口縁部の破片で、ともに極小片である。口縁部は端部付近でゆるやかに内湾し、端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデの調整を施す。ともによく似た特徴をもち、同一個体の可能性も否定できない。美濃須衛産か。

小結　周溝を伴うことから、横穴式石室をもつ小形の円墳と判断した。しかし、石室埋土中には側壁に用いられた石材と同規模の角礫をわずかに含むのみで、天井石は確認できなかった。石室の規模は、玄室残存部が 0.75m と狭く、成人 1 人を埋葬するのに足る程度であるものの、造り自体は 2・4 号古墳と近似している（第 5 章第 1 節詳述）。横穴式石室の形態をとりながらも、天井石を用いなかった可能性も考えられ、「小石室」の範疇[7]に含まれる可能性がある。床面直上から出土した須恵器（28・29）は口径が 10cm 程度で、小型化が進行した美濃須衛Ⅲ期（7 世紀代）に比定するならば、他より若干新しい可能性がある。古墳の築造時期は、出土遺物から判断すれば 7 世紀代に築造されたことにな

るが、2・4号古墳との石室形態の類似性から、これらの古墳との時期差はあまりない可能性が高く、7世紀前半から中ごろに築造されたと判断した。

（7）10号古墳

発掘区の中央に位置する、9号古墳と同規模の小型の古墳である。2号古墳の墳丘トレンチを掘削中に、トレンチ中央付近で10号古墳の石室奥壁と側壁を、トレンチ底面では石室掘方を、トレンチ断面では石室の両側に墳丘の立ち上がりを確認した。その結果、10号古墳は南東に開口する横穴式石室をもつ円墳であり、周溝を含む古墳の直径は東西断面（A-A'）で5.9mであることがわかった。

墳丘（第39図）　周溝の形状から円墳と判断できるが、発掘区外の現況地形の高まりから、北西―南東方向に長い楕円形と考えられる。東側は、2号古墳の周溝埋土上（第14図14層）に盛土を行っており、2号古墳の周溝肩部の高まりを利用して墳丘の基礎としている。西側は、漸移層の上部に盛土を行うが、他の古墳のように周溝を削り出した部分を墳端にしていない。傾斜を均した後に石室掘方を掘削し、石室の構築と共に墳丘の盛土を行ったと考えられる。

周溝（第39図）　墳丘の北半分で確認した。東側で2号古墳の周溝を削平するが、2号古墳周溝の掘削を先行してしまい、東側の周溝を消失した。北側から西側にかけて、ややいびつにめぐり、西側から南側に向かって直線的に伸びると予想される。周溝の規模は、西側（A-A'断面）で幅1.45m、北側（B-B'断面）では幅1.8m、深さ0.9mである。南側は発掘区外のため未調査であり、周溝が全周するかは不明である。

石室（第40・41図）　礫床の残存部で全長1.62mの横穴式石室である。石室の平面形状は、石室入口付近より南側が流出して確認できなかったため不明である。玄室基底部の幅は、奥壁付近で0.46m、残存部の南東端側で0.63mであり、胴張り形となると思われる。天井石と思われる石材は確認できなかった。石材は全て、チャートである。

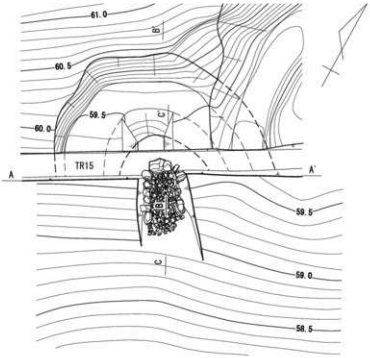
奥壁は、高さ0.7m、幅0.54m、奥行き0.28mの石材1枚（鏡石）をもって構築している。石材の平面形は逆台形で、幅狭側を下にして石室掘方底面に直に立て、下部両側を礫や掘方埋土・整地土で支えている。奥壁と左側壁のなす隅角は明瞭である。側壁は、最大4段が残存するが、遺存状況が悪い。奥壁付近に残る石材の状況から、横目地が通る可能性がある。基底石は、整地土・礫床に半分以上が埋まっている。玄室床面は、0.04～0.12mの角礫を、面を揃えて全面に敷き詰めている。入口に向かって3.4°下がる。

石室掘方（第42図）　発掘区内にかかる奥壁側のみ検出した。幅は最大1.46m、高さは奥壁付近で0.75mである。平面形は不整な長方形になると思われ、掘方底面には入口に向かってやや下がる傾斜がある。

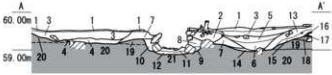
その他の施設　石室の入口付近が流出しているため、羨道、前庭、閉塞施設の有無は不明である。排水施設は検出されなかったが、石室掘方及び礫床が入口に向かって下がる傾斜をもつことから、排水機能は保たれていたと思われる。

出土遺物　遺物は出土しなかったが、石室床面直上及び石室埋土全体に炭化物の広がりを確認した。

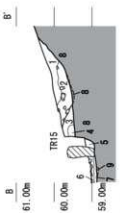
小結　墳丘及び周溝を伴うことから、9号古墳同様、横穴式石室をもつ小型の円墳であると判断した。石室は9号古墳と似た規模及び特徴をもち、同じ構築法による可能性が高い。天井石は、古墳周囲や



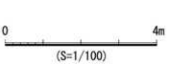
※　破線は推定線を示す。



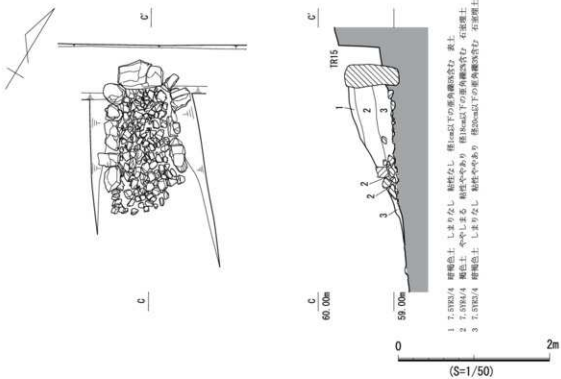
1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　径15cm以下の亜角礫3%含む　表土
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　径7cm以下の亜角礫2%含む　根攪乱
3　7.5YR3/4　暗褐色土　やや暗色　ややしまる　粘性ややあり　径10cm以下の亜角礫5%含む　流土
4　7.5YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性あり　礫を含まず　周溝埋土
5　7.5YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径15cm以下の亜角礫を2%含む　周溝埋土
6　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性あり　径5cm以下の亜角礫2%含む　周溝埋土
7　7.5YR3/4　暗褐色土　しまる　粘性あり　径5cm以下の亜角礫1%含む　墳丘盛土
8　7.5YR3/4　暗褐色土（やや明色）　しまりなし　粘性ややあり　径4cm以下の亜角礫を2%含む　石室脇方埋土
9　7.5YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径2cm以下の亜角礫1%含む　石室脇方埋土
10　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性あり　径3cm以下の亜角礫を2%含む　石室脇方埋土
11　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性ややあり　礫床以外の礫を含まず　整地層
12　5YR4/4　にぶい赤褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径7cm以下の亜角礫2%含む　整地層
13　7.5YR4/4　褐色シルト　ややしまる　粘性ややあり　径3cm以下の亜角礫2%含む　2号古墳墳丘からの流土
14　7.5YR4/3　褐色土　ややしまる　粘性あり　径15cm以下の亜角礫を3%含む　2号古墳周溝埋土
15　7.5YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径4cm以下の亜角礫2%含む　褐色土ブロックが混じる　2号古墳墳丘からの流土
16　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径14cmの亜角礫3%含む　2号古墳墳丘盛土
17　7.5YR3/4　暗褐色土ややシルト質　ややしまる　粘性なし
　径3cmの亜角礫2%含む　明赤褐色土ブロックが混じる　2号古墳墳丘盛土
18　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　径50cm以下の亜角礫10%含む　旧表土
19　7.5YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性なし　径9cm以下の亜角礫5%含む　断移層
20　7.5YR4/6　褐色シルト　しまる　粘性あり　径20cm以下の亜角礫3%含む　基盤層
21　5YR5/6　明赤褐色シルト　しまる　粘性あり　径15cm以下の亜角礫7%含む　基盤層



5　7.5YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径20cm以下の亜角礫を10%含む（裏込めれを含む）　石室脇方埋土
6　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　礫床以下の礫を含まず
7　5YR4/4　にぶい赤褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径7cm以下の亜角礫を2%含む　敷土
8　5YR5/6　明赤褐色シルト　しまる　粘性あり　径2cm以下の亜角礫を1%含む　基盤層
9　5YR5/6　明赤褐色土シルト　しまる　粘性あり　径15cm以下の亜角礫を7%含む　基盤層



第39図　10号古墳　平面図及び土層断面図



第40図　10号古墳　石室平面図及び土層断面図

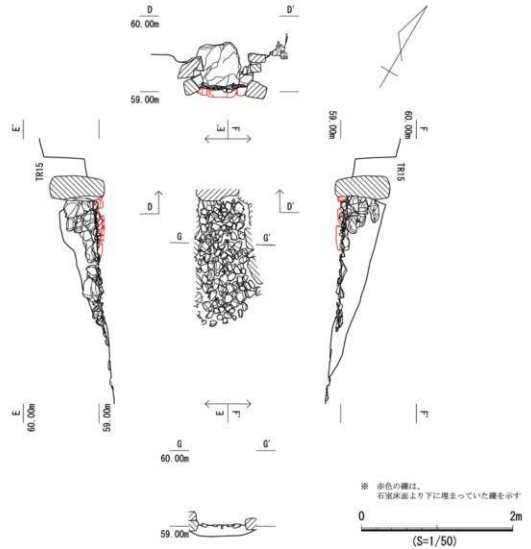
石室埋土中に確認できず、その有無については現時点で判断することができない。石室の規模から、10号古墳についても「小石室」の性格を考えることができる。重複関係から２号古墳→10号古墳という築造順序は明らかであり、２号古墳の周溝肩部の高まりを利用して周溝埋土上に盛土を行った可能性がある。10号古墳の築造に際して２号古墳の墳丘を壊していないことから、10号古墳の位置は２号古墳を意識した選地によるものであり、被葬者の関係性を示している可能性が高い。

築造時期は、出土遺物がないため詳細な時期を求めることは難しいが、９号古墳石室の形態や構築法との類似性から７世紀前半から中頃と判断した。

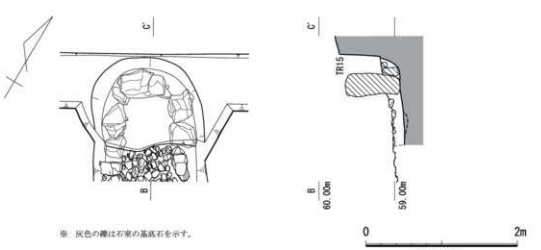
（８）ST１（第43図）

発掘区の西端側、９号古墳の南西約５ｍに位置する土坑墓である。検出当初は溝と判断していたため、南北方向（遺構の短軸方向）に主軸を設定し、断面を観察後掘削した。その過程で長軸両端に小さな穴を２つ検出したため、東西方向に新たに主軸を設定し、長軸断面及び小穴の観察を行った。

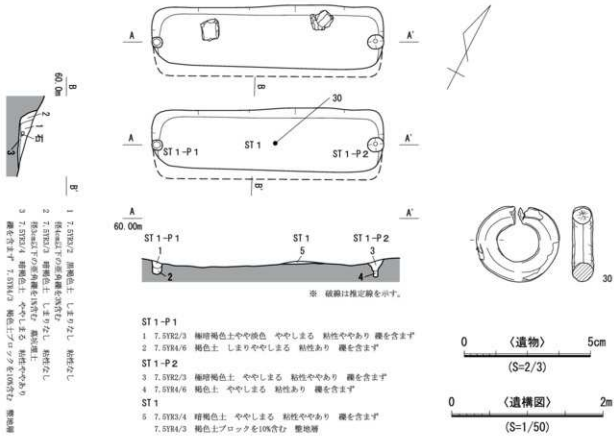
遺構の平面形状は隅丸長方形となると思われる。斜面地に位置するため、遺構の南辺は表土掘削時に消失もしくは流失した可能性がある。長軸長は 3.04m、残存部の短軸長は 0.76m、深さ 0.25mである。長軸方位はN-63° -Eで、各古墳の横穴式石室の主軸と直行する向きである。土坑の東西端の中央にはそれぞれ小穴が設けられており、西側（ST１-P１）は径 0.10m、深さ約 0.16m、東側（ST１-P２）は径 0.20m、深さ約 0.21mである。ST１-P２は奥に窄まる形状である。東西断面は土坑内掘削後に観察されたため図上に土層の記録が残っていないが、調査時の所見によれば、これらの穴は土坑内の整地後に掘削されたとされている。穴内に柱や杭等の痕跡は確認できない。遺構内では、北辺に沿



第41図　10号古墳　石室実測図



第42図　10号古墳　石室掘方平面図及び断面図



第43図　ST１及び出土遺物実測図

う位置に、長辺 0.25m程の扁平な角礫が平坦面を上にした状態で２点出土した。東側の石材下のレベル高が西側の石材下と比べて 10cm 程高いことから、棺台の可能性は低い。遺構に伴う石材ではあるが、用途は不明である。

遺物出土状況　土坑中央付近の埋土１層から、副葬品と思われる耳環１点が出土した。

出土遺物（第 43 図）　30 は銅芯銀板張の耳環である。平面形は正円形に近く、開口部幅は、0.4cm 程であったと思われる。断面は径約 0.8cm の円形だが、端部はややつぶれて 0.75cm×0.65cm の楕円形である。環の内側には縦方向の皺、端面には銀板を折りたたんだ際の皺が確認できる。表面の銀箔が剥がれている部分から、銅芯が確認できる。長径（左右径）3.3cm×短径 3.0cm、現重量 8.5ｇ。

注

1）田中弘志氏（関市教育委員会）の御教示による。

2）成瀬正勝 1992「美濃の横穴式石室」『美濃の後期古墳』、美濃古墳文化研究会

3）渡辺博人 1988「美濃須衛窯の須恵器生産」『古代文化』第 40 巻第６号、財團法人古代学協会

4）５号古墳では、奥壁両隅角付近において、側壁と天井石の間詰めに川原石を用いていることを確認している。

5）前掲１）

6）美濃須衛古窯跡群では瓶類の出土数が極めて少なく、現在までに提示されている編年観の中で４号古墳出土の平瓶の所属

時期を決定することは難しい。17の肩部の沈線や19の円形浮文などは、陶邑古窯跡群では高蔵217号窯出土平瓶に確認できることを根拠とし、ここでは17・19を美濃須衛Ⅱ期後半に位置づけておく。

7）服部伊久男は、小石室について、「成人の伸展葬に最低限必要な埋葬空間を有する石室、あるいはそれより小さい法量をもつ石室」と定義している。

服部伊久男（1988）「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集』第９、吉川弘文館

第５節　中世の遺物

４号古墳の周溝北西側の埋土(第23図２層)中から、山茶碗が小破片の状態でまとまって出土した。

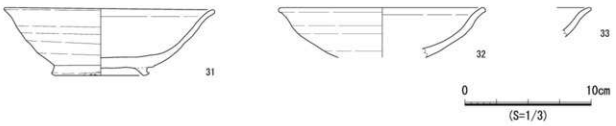
31は、ほぼ完形である。口縁部はやや厚みがあり、端部を丸く収め、緩やかに外反する。体部は比較的浅い。貼り付け高台は断面台形で、外面上半はきつく屈曲して外反し、下半は内湾する。端部には籾殻痕がつく。器壁内面の口縁付近及び底部と、高台の接地面に摩耗痕を確認できる[1)]。32は、口縁部から体部にかけての破片である。体部は31よりも浅く、ゆるやかに外反したのち、口縁部付近で再度広がる。端部は丸く収め、一部に玉縁状に厚みをもつ部分がみられる。外面の胴部付近と内面下半にわずかに煤が付着する。器壁内面の口縁付近にわずかに摩耗痕がみられる。33は、口縁部の破片である。端部は丸く収めるが、外面には面取りをしたような稜が確認できる。器壁内面の口縁付近の一部に摩耗痕がみられる。

31～33はいずれも似た特徴をもち、東濃型第４型式（12世紀中葉）に比定される。器壁内面が磨耗しているため、使用されていたものが何らかの形で持ち込まれたと考えられる。

注

1）武部真木（2006）は、山茶碗内外部の摩耗痕の分析から、尾張型６型式を境に使用形態が変化すると説く。尾張型５型式までは擂鉢のような「調理道具」として、それ以降を「食膳具」としている。上述した31は、時期的にも摩耗痕跡の位置からも調理道具として使用されていた可能性が高い。なお、武部は「摩耗痕」ではなく「摩滅痕」の用語を用いている。

武部真紀 2006「山茶碗の用途をめぐって」『研究紀要』第７号、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化センター



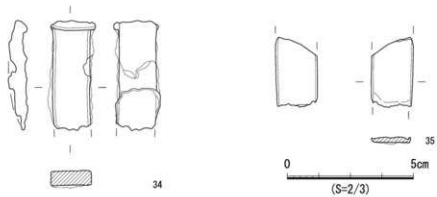
第44図　４号古墳周溝　出土遺物

第6節　包含層出土の遺物

BD19 グリッドのⅢ層上面で検出した、5号古墳周溝の北西約 3.0mに位置する根跡から、鉄製品が2点出土した。

遺物出土状況　根跡の中央、根が広がる埋土中から2点同時に出土した。

出土遺物（第 45 図）　34・35 は、器種不明の鉄製品である 34 は、端部が残り、平面形は長方形状で長辺は直線的である。端部はつぶれて外面下方にまくようにも見えるが、裏面が欠損しており不明である。残存部で、長さ 4.5cm、幅 1.5cm、厚さ 0.7cm。35 は、外表面が剥がれ落ちたものであり、経年に伴う変形によって断面はやや開いたコの字型である。残存部で長さ 3.7cm、幅 1.55cm。34・35 が同一個体だとすれば、端部に向かって細くなる形状となる。34 の端部の形状から、鑿の頭部の可能性も考えられる。



第45図　包含層　出土遺物

第7節　時期不明の土坑

遺物等が検出されず、時期及びその性格が判断できなかった遺構として土坑 92 基がある。すべてⅢ層の上面で検出した。

土坑（第8・9表）　位置に規則性は認められないが、古墳の周辺には少なく、発掘区の西端側に集中している。平面形は円形、断面形状は半円形のもが多く、土坑の規模は、長径 0.5m未満のものが大半を占める。深さはほとんどが 0.2m未満と非常に浅く、窪みのような形状である。各土坑の埋土1層はしまりや粘性のない暗褐色系の土で、斜面上方からの流土によって自然堆積した可能性が高い。2～3基が重複して連なるものもある。土坑内に礫を含むものはなく、用途は不明である。

第５表　縄文時代の土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	東西	南北					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK93	AP	18	Ⅲ上	円形	a	方形	0.27	0.13	(0.80)	(0.50)	0.28	―			J44 S2

第６表　古墳一覧表

遺構名	大区画	地区割り		検出面	墳丘			石室											重複関係		出土遺物	
		東西	南北		墳形	規模（m）		形態	玄室規模				羨道規模		石室方向	玄室床面傾斜			新	旧	石室外	石室内
						南北	東西		長さ	幅		高さ	長さ	幅							
										奥	最大	入口										
2号古墳	A	E-T	9-11	Ⅲ上	円墳	―	8.20	両袖式	2.88	0.82	0.98	0.94	(1.32)	3.24	1.00	N 35° W	3.10		10号古墳	4号古墳	H5 C1	P11 12 C3
3号古墳	C	B-9	2-5	Ⅲ上	円墳	―	―	―	4.40	0.70	1.63	1.28	―	―	―	N 42° W	―		5号古墳			
4号古墳	A	D-S	10-14	Ⅲ上	円墳	―	10.20	両袖式	3.24	0.98	1.52	1.40	(1.50)	(3.04)	1.1～1.4	N 40° W	2.90				Y17	H2 P26 Y1 T3 12 C2
5号古墳	B/C C	C-F D-E	19・20・1・2 1-2	Ⅲ上	円墳	―	―	―	―	1.30	1.80	―	―	―	―	N 42° W	―			3号古墳	H28	
7号古墳	C	A-B	7-8	Ⅲ上	円墳	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―					
9号古墳	B	F-H	16-17	Ⅲ上	円墳	―	―	―	2.70	0.51	0.75	―	(0.30)	―	―	N 35° W	3.00				P2 C1	
10号古墳	A/C	T/A	8-9	Ⅲ上	円墳	―	―	―	1.62	0.46	0.63	―	(0.54)	―	―	N 30° W	3.40			2号古墳		

※３・５号古墳は略測のみ実施した。

第７表　土坑墓一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	東西	南北					上端	下端	上端	下端			新	旧	
ST1	BH	16	Ⅲ上	方形	b	方形	3.04	2.88	(0.76)	(0.67)	(0.23)	N 63° E	ST1-P1 ST1-P2		T1

第8表　時期不明の土坑一覧表（1）

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	東西	南北					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK01	BI	11	Ⅲ上	円形	e	方形	0.35	0.27	0.35	0.20	0.13	―	根跡		
SK02	BI	12	Ⅲ上	不定形	e	半円形	0.42	0.24	0.32	0.15	0.10	―			
SK03	BH	12	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.31	0.22	0.20	0.15	0.04	―			
SK04	BI	12	Ⅲ上	不定形	a	半円形	0.48	0.35	0.38	0.31	0.04	―			
SK05	BI	12	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.40	0.37	0.14	0.15	0.12	―			
SK06	BI	12	Ⅲ上	円形	e	半円形	0.38	0.30	0.32	0.17	0.37	―			
SK07	BJ	12	Ⅲ上	円形	b/c	半円形	0.18	0.09	0.16	0.08	0.08	―			
SK08	BG	13	Ⅲ上	方形	c	逆台形	0.35	0.23	0.34	0.20	0.09	―			
SK09	BG	13	Ⅲ上	円形	e	逆台形	0.27	0.20	0.24	0.16	0.06	―			
SK10	BH	13	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.24	0.19	0.24	0.15	0.06	―			
SK11	BJ	12	Ⅲ上	円形	c	方形	0.28	0.21	0.26	0.16	0.13	―			
SK12	BK	12	Ⅲ上	円形	e	逆台形	0.34	0.20	0.34	0.18	0.09	―			
SK13	BJ	13	Ⅲ上	円形	e	逆三角	0.35	0.10	0.33	0.14	0.15	―			
SK14	BK	13	Ⅲ上	円形	c	逆台形	0.33	0.19	0.28	0.18	0.13	―			
SK15	BJ	13	Ⅲ上	円形	b	逆台形	0.84	0.76	0.45	0.27	0.17	N　55°　W			
SK16	BG	15	Ⅲ上	円形	b	半円形	0.51	0.41	0.50	0.25	0.10	―			C1
SK17	BF	15	Ⅲ上	円形	a	逆台形	0.25	0.15	0.22	0.13	0.14	―			
SK18	BF	15	Ⅲ上	円形	a	逆三角	0.24	0.12	0.20	0.09	0.12	―			
SK19	BE	15	Ⅲ上	方形	a	半円形	0.19	0.10	0.18	0.08	0.06	―			
SK20	BE	16	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.24	0.09	0.13	0.07	0.03	―			
SK21	BE	16	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.45	0.36	0.37	0.28	0.13	―			
SK22	BE～F	16	Ⅲ上	円形	e	逆台形	0.40	0.22	0.32	0.25	0.07	―			
SK23	BE	16	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.17	0.07	0.15	0.07	0.04	―		根跡	
SK24	BG	13	Ⅲ上	不定形	e	方形	0.26	0.20	0.24	0.15	0.07	―			
SK25	BG	14	Ⅲ上	円形	a	半円形	(0.16)	(0.09)	0.15	0.08	0.06	―	SK27		
SK26	BG	14	Ⅲ上	円形	d	半円形	0.95	0.62	0.70	0.33	0.15	―	SK27		
SK27	BG	14	Ⅲ上	円形	e	逆三角	0.65	0.19	0.45	0.13	0.23	―		SK25 SK26	
SK28	BH	13～14	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.32	0.23	0.21	0.14	0.08	―			
SK29	BH	14	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.32	0.20	0.32	0.25	0.04	―			
SK30	BI	14	Ⅲ上	円形	c	方形	0.24	0.14	0.20	0.14	0.09	―			
SK31	BI	14	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.18	0.08	0.17	0.05	0.06	―			
SK32	BI	14	Ⅲ上	不定形	e	半円形	0.54	0.22	0.33	0.15	0.07	―			
SK33	BG	14	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.40	0.19	0.24	0.11	0.09	―			
SK34	BG	14	Ⅲ上	不明	a	逆三角	(0.41)	(0.38)	(0.40)	(0.15)	0.18	―	根跡		
SK35	BG	14	Ⅲ上	不明	a	不定形	0.60	0.52	(0.20)	(0.10)	0.12	―	根跡		
SK36	BH	14	Ⅲ上	不定形	a	半円形	0.30	0.24	0.21	0.12	0.05	―			
SK37	BG	14	Ⅲ上	円形	c	半円形	(0.48)	(0.20)	0.42	0.15	0.20	―	SK38		
SK38	BG	14	Ⅲ上	円形	e	不定形	0.45	0.10	0.34	0.06	0.21	―		SK37	
SK39	BG	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.16	0.05	0.15	0.04	0.06	―			
SK40	BJ	14	Ⅲ上	円形	e	方形	0.38	0.22	0.35	0.21	0.09	―			
SK41	BI	14	Ⅲ上	円形	d	半円形	0.40	0.22	0.38	0.26	0.10	―			
SK42	BI	14	Ⅲ上	円形	e	半円形	0.40	0.14	0.29	0.14	0.08	―			
SK43	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	逆台形	0.24	0.15	0.23	0.11	0.07	―			
SK44	BI	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.35	0.23	0.35	0.21	0.06	―			
SK45	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.40	0.11	0.39	0.11	0.13	―			
SK46	BJ	15	Ⅲ上	円形	e	逆台形	0.50	0.31	0.44	0.30	0.07	―			
SK47	BH	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.51	0.44	0.38	0.21	0.07	―			
SK48	BI	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.24	0.18	0.15	0.07	0.04	―			
SK49	BI	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.26	0.13	0.23	0.10	0.05	―			
SK50	BI	15	Ⅲ上	円形	e	半円形	0.25	0.09	0.22	0.08	0.09	―			
SK51	BI	15	Ⅲ上	円形	a	逆台形	0.51	0.31	0.48	0.33	0.10	―			
SK52	BH	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.54	0.44	0.36	0.20	0.10	S　76°　E			
SK53	BH	16	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.30	0.14	0.26	0.13	0.05	―			
SK54	BH	16	Ⅲ上	方形	a	方形	0.40	0.32	0.31	0.25	0.03	―			
SK55	BG	16	Ⅲ上	円形	b	逆台形	0.24	0.14	0.17	0.07	0.08	―			
SK56	BG	16	Ⅲ上	円形	b	方形	0.25	0.11	0.20	0.14	0.10	―			
SK57	BI	16	Ⅲ上	円形	c	方形	0.35	0.24	0.33	0.19	0.10	―			
SK58	BI	16	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.34	0.20	0.34	0.10	0.13	―			
SK59	BJ	16	Ⅲ上	円形	c	方形	0.45	0.22	0.44	0.31	0.12	―			
SK60	BI	16	Ⅲ上	円形	c	逆台形	0.34	0.21	0.27	0.18	0.07	―			
SK61	BI	16	Ⅲ上	円形	c	逆三角	0.28	0.11	0.24	0.12	0.10	―			
SK62	BH	16	Ⅲ上	円形	c	逆台形	0.37	0.23	0.25	0.14	0.07	―			
SK63	BH	17	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.22	0.10	0.21	0.13	0.06	―			
SK64	BH	17	Ⅲ上	円形	e	逆台形	0.37	0.24	0.33	0.24	0.05	―	SK65		
SK65	BH	17	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.32	0.18	0.30	0.17	0.06	―		SK64	
SK66	BK	13	Ⅲ上	不明	a	半円形	(0.55)	(0.55)	0.40	0.28	0.02	―	SK68 SK69		
SK67	BK	13	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.16	0.10	0.15	0.09	0.03	―	SK69		

第９表　時期不明の土坑一覧表（２）

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ(m)	主軸方位	重複関係		出土遺物
	東西	南北					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK68	BK	13	Ⅲ上	円形	a	方形	0.52	0.40	0.49	0.45	0.02	―		SK66	
SK69	BK	13	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.36	0.19	0.35	0.20	0.02	―		SK66 SK67	
SK70	BK	13	Ⅲ上	不明	a	半円形	(0.30)	(0.27)	0.32	0.23	0.04	―	SK71 SK72		
SK71	BK	13	Ⅲ上	円形	e	不定形	0.76	0.54	0.72	0.56	0.15	―		SK70	
SK72	BK	13	Ⅲ上	方形	e	方形	0.60	0.54	0.51	0.42	0.07	―		SK70	
SK73	BK	13	Ⅲ上	不定形	d	逆台形	0.77	0.48	0.46	0.29	0.10	N　13°　W			
SK74	BK	14	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.35	0.28	0.31	0.21	0.05	―			
SK75	BJ	14	Ⅲ上	円形	e	逆三角	0.30	0.07	0.28	0.09	0.12	―			
SK76	BJ	14	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.43	0.24	0.34	0.19	0.10	―			
SK77	BK	14	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.20	0.10	0.18	0.08	0.04	―			
SK78	BK	14～15	Ⅲ上	円形	b	半円形	0.42	0.21	0.42	0.18	0.09	―			
SK79	BJ	14	Ⅲ上	円形	a	逆台形	0.37	0.22	0.36	0.28	0.11	―			
SK80	BJ	14	Ⅲ上	円形	e	半円形	0.30	0.12	0.30	0.15	0.11	―			
SK81	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.25	0.17	0.20	0.12	0.04	―			
SK82	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.23	0.12	0.20	0.14	0.05	―			
SK83	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.34	0.12	0.31	0.19	0.12	―			
SK84	BJ	15	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.25	0.13	0.18	0.05	0.10	―			
SK85	BJ	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.25	0.15	0.24	0.10	0.08	―			
SK86	BJ	15	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.25	0.16	0.24	0.14	0.07	―			
SK87	BJ	16	Ⅲ上	円形	c	半円形	0.25	0.15	0.24	0.11	0.15	―			
SK88	CB	1	Ⅲ上	円形	e	逆台形	1.26	1.11	1.00	0.78	0.07	N　13°　W			
SK89	BD	17	Ⅲ上	円形	c	方形	0.38	0.20	(0.24)	(0.20)	0.11	―	SK90		
SK90	BD	17	Ⅲ上	円形	b	方形	0.39	0.27	0.38	0.24	0.16	―		SK89	
SK91	BD	18	Ⅲ上	円形	a	逆台形	0.24	0.12	0.18	0.10	0.11	―			
SK92	BD	18	Ⅲ上	円形	e	半円形	0.28	0.13	0.21	0.13	0.15	―			

第10表　土器観察表（１）

掲載番号	種別	器種	出土位置			大きさ(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	文様(幅単位cm)	分類・時期	備考	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位	口径 底径 器高										
1	縄文土器	深鉢	AP18	SK93	1	― ― (4.6)	1	密（φ4mm以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	7.5YR 6/6 7.5YR 5/4 10YR 6/2	ナデ、条痕文／ナデ、条痕文		縄文時代晩期末		13	13
2	縄文土器	深鉢	AP18	SK93	1	― ― (2.8)	1・―	密（φ3mm以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	7.5YR 6/4 7.5YR 6/4 10YR 7/1	ナデ、ハケ／ナデ、条痕文		縄文時代晩期末		13	13
3	縄文土器	深鉢	AP18	SK93	1	― ― (5.0)	―・―	やや粗（φ3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	7.5YR 6/6 7.5YR 8/6 2.5YR 7/3	ナデ／条痕文		縄文時代晩期末		13	13
4	縄文土器	深鉢	AP17	SK93	1	― ― (6.0)	―・―	やや粗（φ4mm以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	7.5YR 6/6 7.5YR 7/6 2.5Y 7/3	ナデ／条痕文		縄文時代晩期末		13	13
5	縄文土器	深鉢	AP18	SK93	1	― ― (8.4)	―・―	密（φ4mm以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	7.5YR 6/4 7.5YR 6/4 10YR 7/3	ナデ／条痕文		縄文時代晩期末		13	13
8	須恵器	鉢	AT10	2号古墳（石室）　①	4層床直	9.0 3.4 4.9	5.5・1	密（φ2mm以下の長石をわずかに含む）	良好	10Y 7/1 5Y 7/1 10Y 7/1	ロクロナデ、ユビオサエ／ロクロナデ、回転ヘラケズリ、板目痕	外面底部に線刻	丸山古窯産美濃須衛Ⅲ期前半並行期か		20	14

第11表　土器観察表（2）

掲載番号	種別	器種	出土位置 出土区・グリット	遺構番号	層位	大きさ(cm) 口径 底径 器高	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整 内面/外面	文様(幅単位cm)	分類・時期	備考	挿図番号	図版番号
9	須恵器	鉢	AT10	2号古墳 ②(石室) ③(石室) ④	4層床直 3 3	9.7 — (4.4)	4・—	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	不良	5Y 7/2 5Y 7/1 5Y 7/2	ロクロナデ／ロクロナデ、回転ヘラケズリ		丸山古窯産須恵器期前半並行期か		29	14
10	須恵器	甕	AT10	2号古墳 ⑤	1	— — (6.7)	—・—	密（φ2mm以下の長石、石英をわずかに含む）	普通	5Y 6/1 5Y 7/1 5Y 6/2	同心円文タタキ／平行文タタキ		須恵器Ⅲ期前半		29	14
13	須恵器	坏身	AR12	4号古墳（石室） ①	2	— — (2.2)	1・—	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	普通	5Y 7/1 5Y 6/1 2.5Y 7/3	ロクロナデ／ロクロナデ		須恵器Ⅲ期か		29	14
14	須恵器	坏蓋	AS13	4号古墳（石室） ③	4	— — (2.3)	—・—	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	良好	GB 6/1 GB 6/1 5Y 6/1	ロクロナデ／ロクロナデ、回転ヘラケズリか		TK209型式		29	14
15	須恵器	長頸壺	AR13	4号古墳（石室） ④	2	(9.6) — (7.2)	4.2・—	密（φ3mm以下の長石をわずかに含む）	良好	7.5Y 6/1 7.5Y 4/1 5Y 6/1	ロクロナデ／ロクロナデ	弱い沈線1条	TK209型式		29	14
16	須恵器	平瓶	AR12	4号古墳（石室） ①	2	(6.5) — (3.6)	7.2・—	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	良好	7.5Y 6/1 7.5Y 6/1 7.5Y 6/1	ロクロナデ／ロクロナデ		須恵器Ⅲ期後半		29	14
17	須恵器	平瓶	AR12	4号古墳（石室） ①	2	— — (4.9)	—・—	密（φ4mm以下の長石を多く含む）	普通	10Y 6/1 10Y 6/1 10Y 6/1	ロクロナデ、回転ヘラケズリ／ロクロナデ、回転ヘラケズリ	沈線1条	須恵器Ⅲ期後半	18と同一個体か	29	14
18	須恵器	平瓶か	AR12	4号古墳（石室） ②	2（埋土上層）	— — (3.8)	—・—	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	不良	2.5Y 7/1 2.5Y 8/1 2.5Y 7/1	ロクロナデ／摩滅		須恵器Ⅲ期後半	17と同一個体か	29	14
19	須恵器	平瓶	AS13	4号古墳（石室）	右室埋土	— (6.5) (7.5)	—・0	密（φ2mm以下の長石、チャートをわずかに含む）	普通	5Y 7/1 2.5Y 6/1 2.5Y 8/1	ロクロナデ／ロクロナデ、回転ヘラケズリ、板目痕	カキ目、耳（円形浮文）貼付	須恵器Ⅲ期後半		29	14
20	須恵器	甕	AR12	4号古墳（石室） ①	2	— — (5.7)	—・—	密（φ2mm以下の長石、石英をわずかに含む）	普通	5Y 6/1 5Y 7/1 5Y 6/2	同心円文タタキ／平行文タタキ		須恵器Ⅲ期前半		29	14
21	山茶椀	椀	AS12	4号古墳（石室） ③	3	— — (1.8)	1	密（φ2mm以下の長石を多く含む）	普通	5Y 8/4 5Y 8/1 5Y 8/3	ロクロナデ／ロクロナデ		足張型第6型式		29	15
25	土師器	甕	CD1	5号古墳（周溝）	4（最下層）	— — (3.9)	—・—	密（φ2mm以下の長石、チャートを多く含む）	良好	2.5Y 8/3 2.5Y 8/3 2.5Y 5/1	ナデ、ヨコハケ／タテハケ、ヨコナデ				31	15
26	土師器	甕	CE1	5号古墳（周溝）	4（最下層）	— — (3.9)	—・—	密（φ2mm以下のチャートを、赤色酸化土粒を多く含む）	良好	2.5Y 8/3 10YR 7/4 2.5Y 7/1	ナデ、ユビオサエ、ヨコハケ／タテハケ、ヨコナデ				31	15
27	土師器	甕	CE1	5号古墳（周溝）	4（最下層）	— — (6.9)	—・—	密（φ2mm以下のチャートを多く含む）	良好	10YR 7/3 10YR 7/3 2.5Y 8/2	ナデ／タテハケ、横合板				31	15
28	須恵器	坏蓋	BG17	9号古墳（石室）	2層床直	— — (2.0)	1・—	密（細かい砂粒はみられない）	良好	5Y 6/1 5Y 6/1 5Y 6/1	ロクロナデ／ロクロナデ		須恵器Ⅲ期か		38	—
29	須恵器	坏蓋	BG17	9号古墳（石室）	2層床直	— — (1.8)	1・—	密（細かい砂粒はみられない）	良好	5Y 6/1 5Y 6/1 5Y 6/1	ロクロナデ／ロクロナデ		須恵器Ⅲ期か		38	—

第 12 表　土器観察表（３）

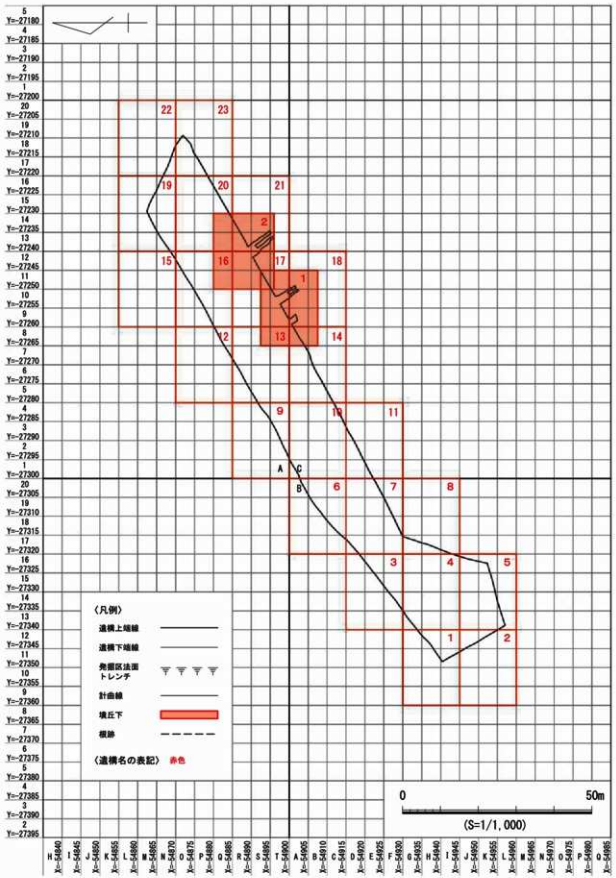
掲載番号	種別	器種	出土位置			大きさ（cm）	口縁部残存率（L/12）・底部個体数	胎土	焼成	色調（内面）（外面）（断面）	器面調整 内面／外面	文様（幅単位 cm）	分類・時期	備考	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位	口径 底径 器高										
31	山茶碗	碗	AR11	4号古墳（周溝）	2	16.7 7.7 5.4	5・1	密（φ0.5mm以下の長石をわずかに含む）	良好	5Y 8/1 5Y 8/1 5Y 8/1	静止ユビナデ、ロクロナデ／ロクロナデ、高台貼付、糸切痕、板目痕		東濃型第4型式		44	15
32	山茶碗	碗	AR11	4号古墳（周溝）	2	(16.2) ― (4.0)	5・―	密（φ1mm以下の長石をわずかに含む）	良好	7.5Y 7/1 7.5Y 7/1 2.5Y 7/1	ロクロナデ／ロクロナデ		東濃型第4型式		44	15
33	山茶碗	碗	AR11	4号古墳（周溝）	2	― ― (2.4)	1	密（細かい砂粒はみられない）	良好	5Y 8/4 5Y 8/1 5Y 8/3	ロクロナデ／ロクロナデ		東濃型第4型式		44	15

第 13 表　石器・石製品観察表

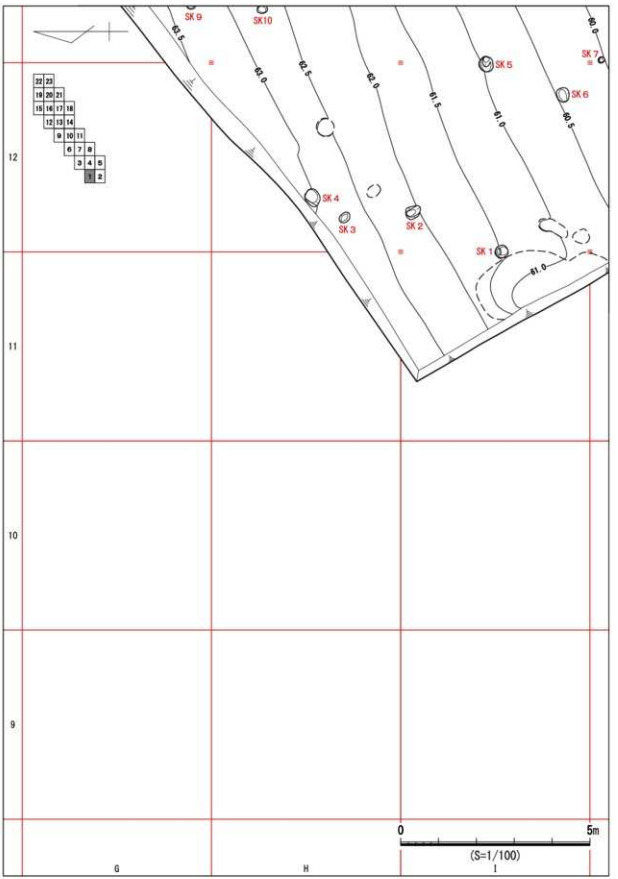
掲載番号	器種	出土位置		層位	石材	大きさ（cm）			重さ（g）	備考	挿図番号	図版番号
		出土区・グリット	遺構番号			長さ	幅	厚さ				
6	剥片	AP18	SK93	1	チャート	3.40	2.60	0.45	4.6		13	13
7	剥片	AP18	SK93	1	チャート	5.80	4.50	0.70	16.9		13	13
22	丸玉	AS13	4号古墳（石室）	4	滑石	1.00	1.20	―	1.7	上下端面径0.7cm、孔径0.3cm、両面穿孔	29	13

第 14 表　金属製品観察表

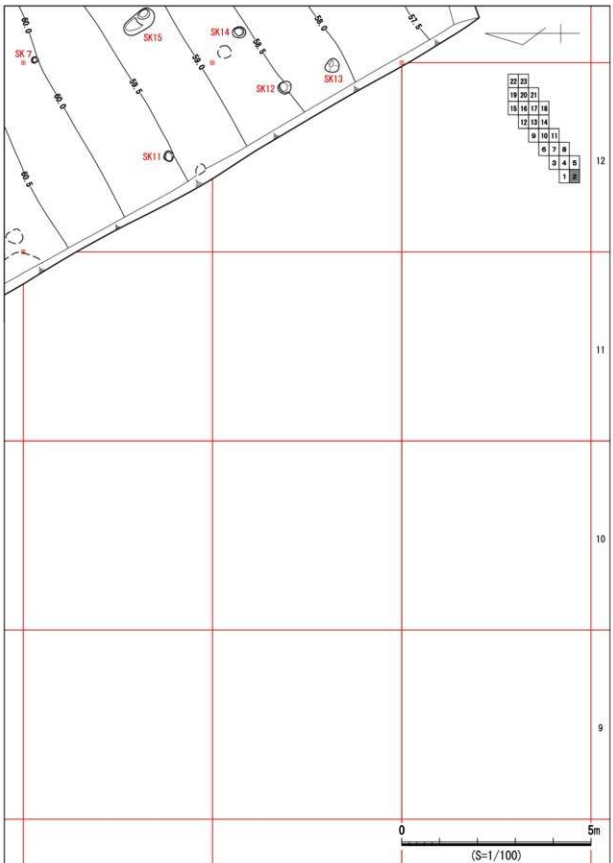
掲載番号	器種分類	出土位置			素材	大きさ（cm）			重量（g）	重量（g）（処理前）	備考	挿図番号	図版番号
		出土区・グリット	遺構番号	層位		長さ	幅	厚さ					
11	耳環	AT10	2号古墳（石室）	4層床直	銅	2.5	2.6	0.6	8.5	8.5		20	15
12	刀子	AT10	2号古墳（石室）	4層床直	鉄	(5.6)	1.4	0.5	3.9	4.2	上端欠損	20	15
23	刀子	AR12	4号古墳（石室）	4	鉄	(3.4)	1.0	0.3	2.0	2.4	両端欠損	29	15
24	刀子	AR13	4号古墳（石室）	4	鉄	(3.5)	1.2	0.4	3.4	4.0	両端欠損	29	15
30	耳環		ST1	―	銅	3.0	3.3	0.8	22.9	22.8		43	15
34	鏨か	BD19	包含層	埋土下層	鉄	(4.4)	1.8	0.7	11.8	21.6	下端欠損	45	15
35	不明	BD19	包含層	埋土下層	鉄	(2.8)	1.7	0.3	1.9	19.2	両端欠損	45	15



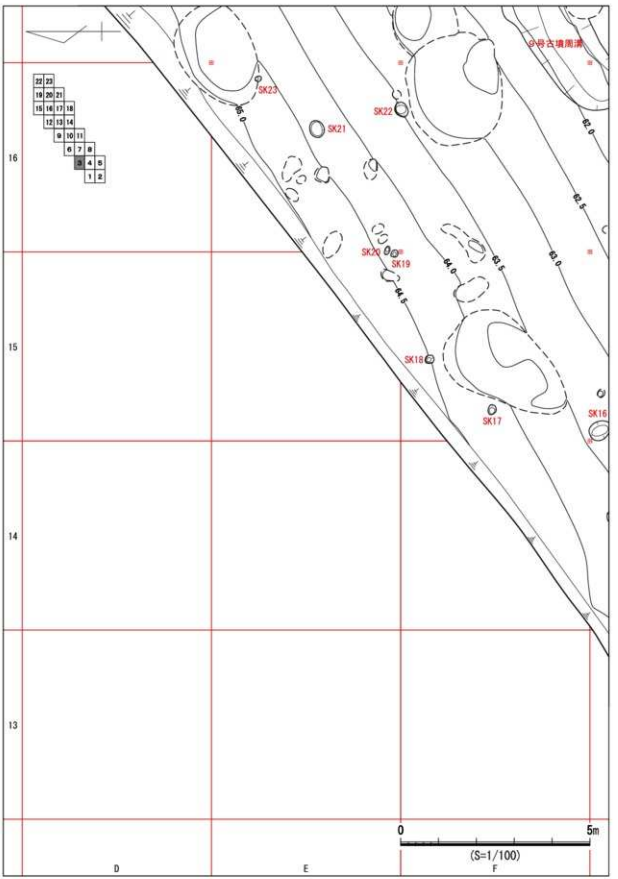
第46図　発掘区全域図割付図



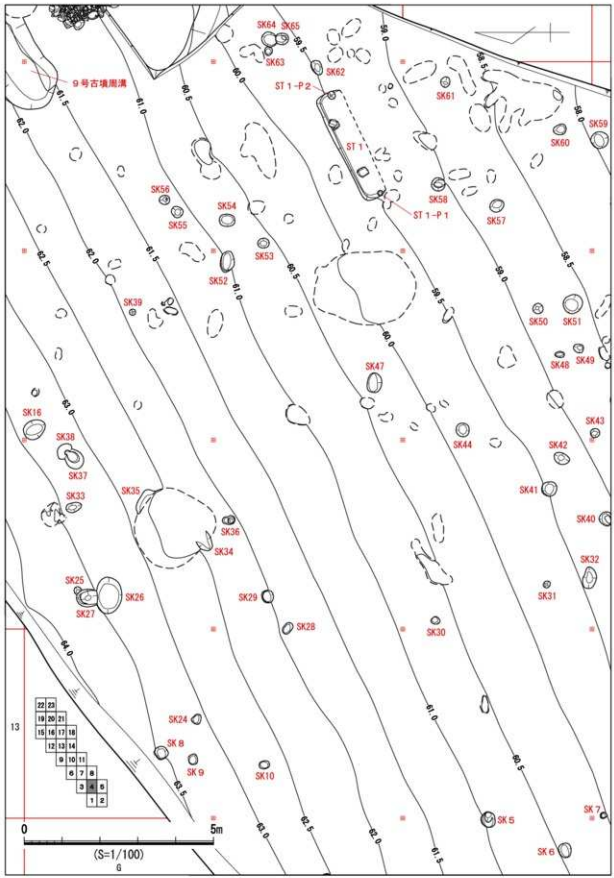
第47図　発掘区全域図分割図①



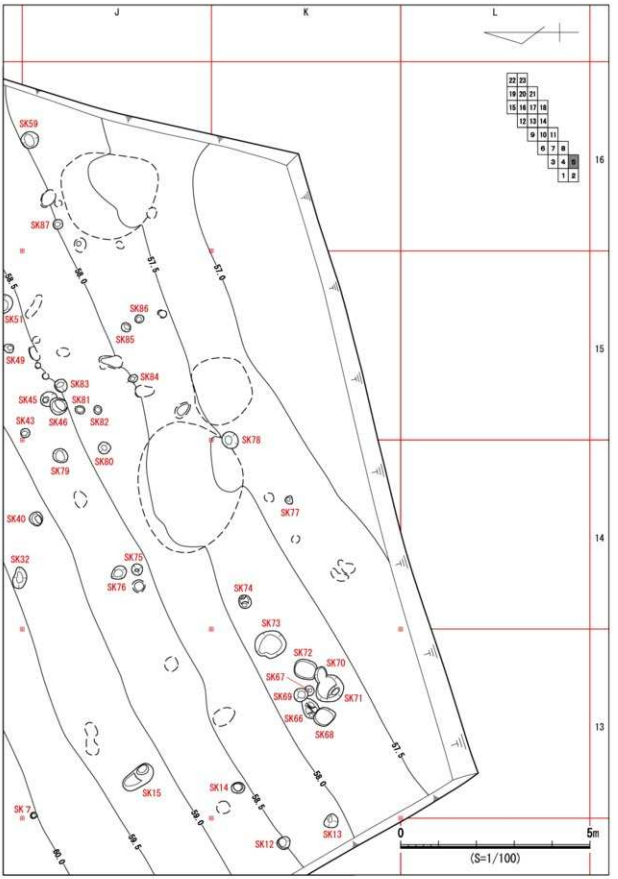
第48図　発掘区全域図分割図②



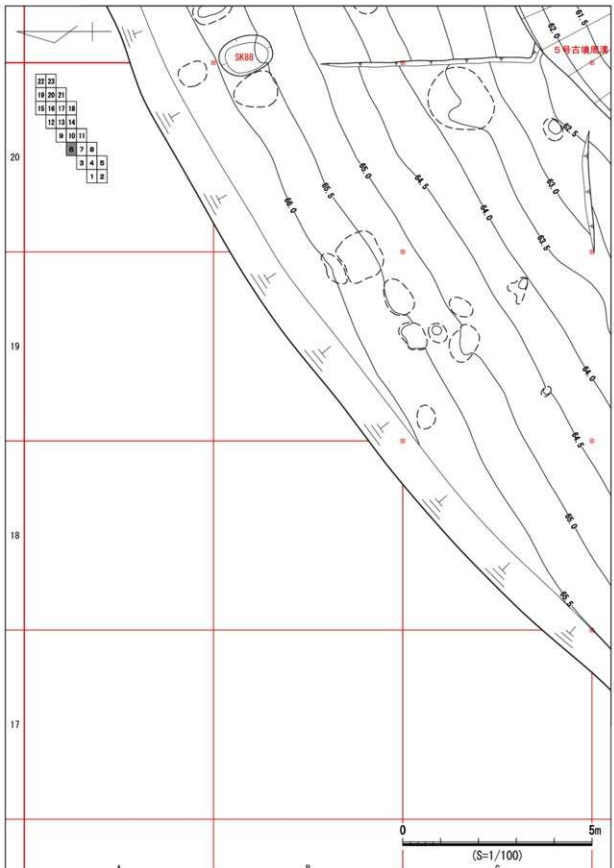
第49図　発掘区全域図分割図③



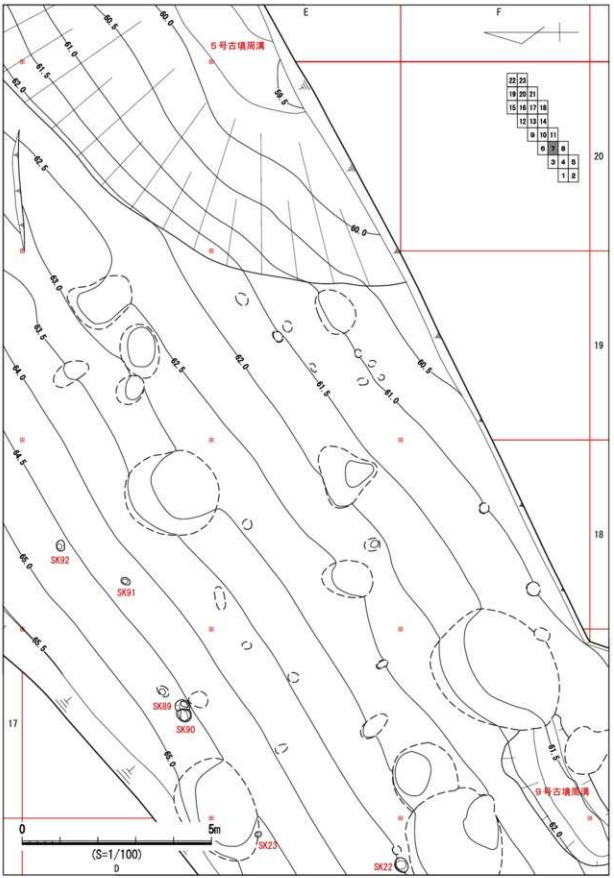
第50図　発掘区全域図分割図④



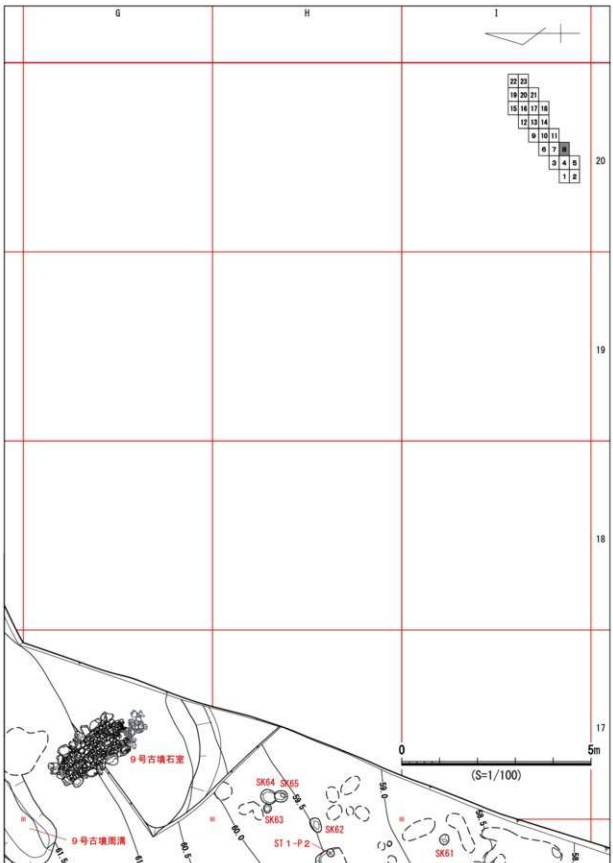
第51図　発掘区全域図分割図⑤



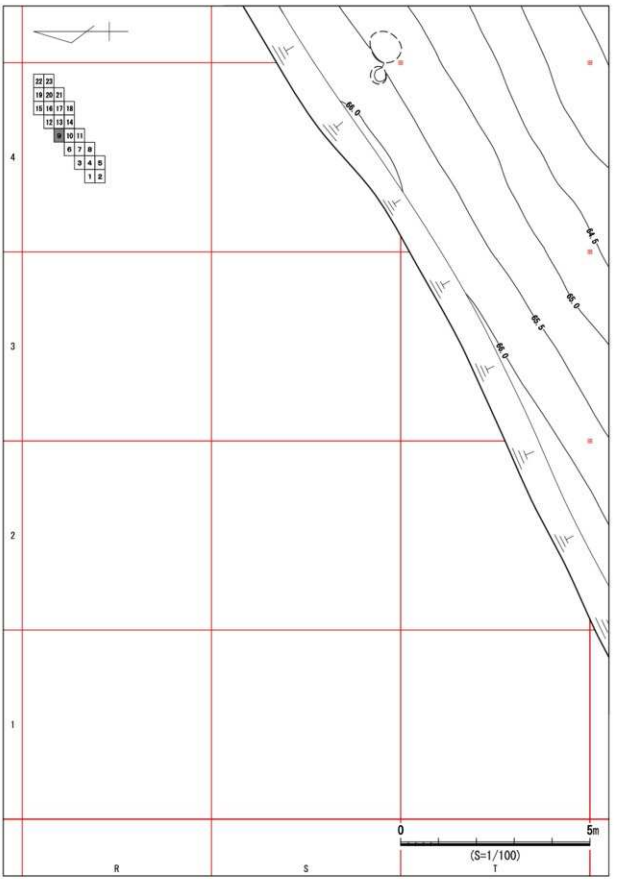
第52図　発掘区全域図分割図⑥



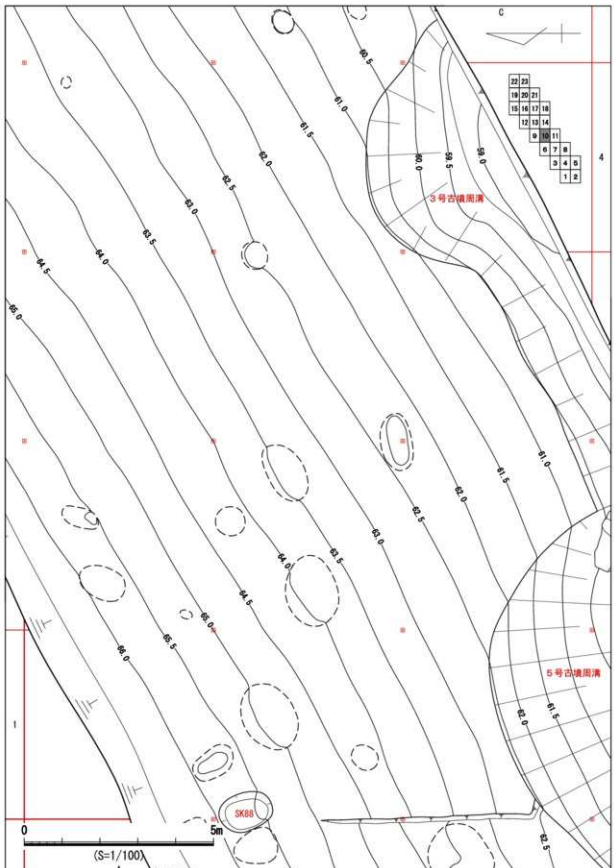
第53図　発掘区全域図分割図⑦



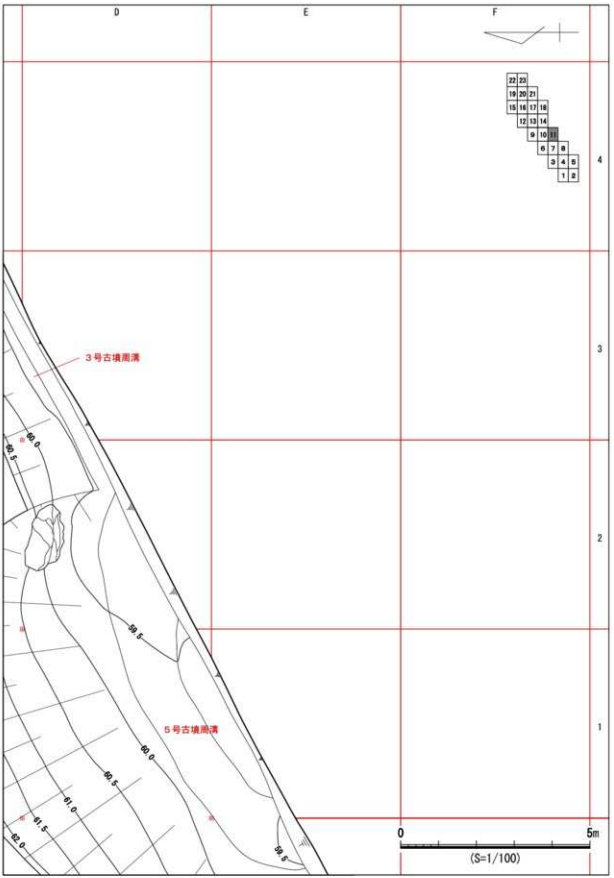
第54図　発掘区全域図分割図⑧



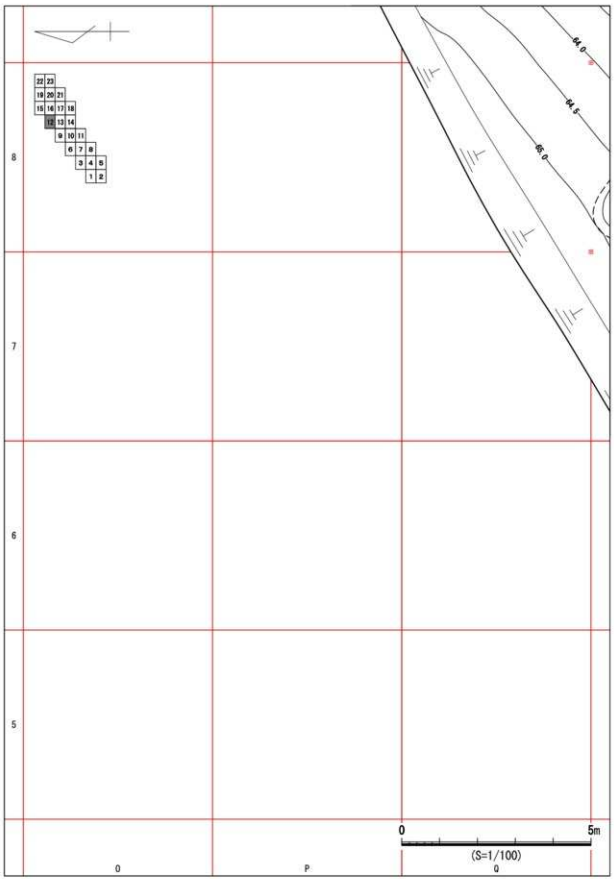
第55図　発掘区全域図分割図⑨



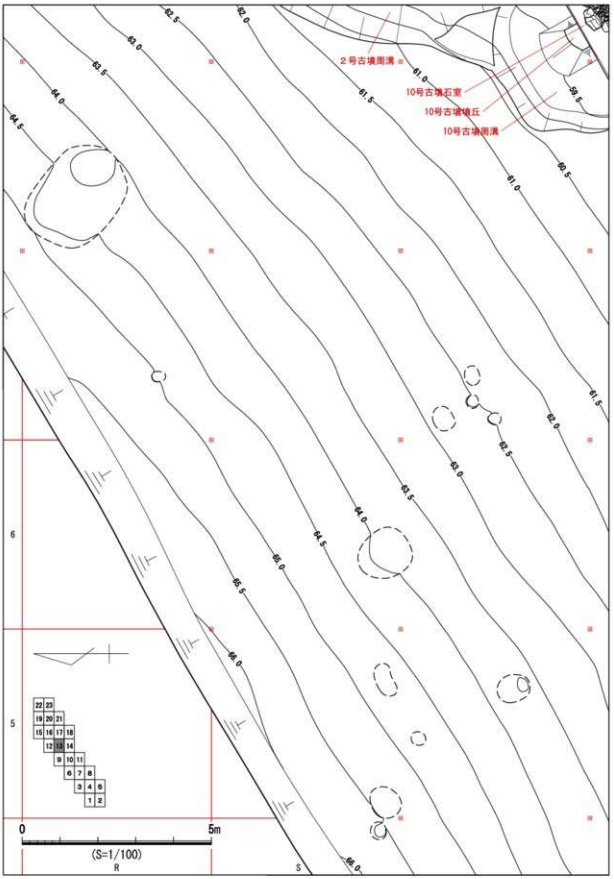
第56図　発掘区全域図分割図⑪



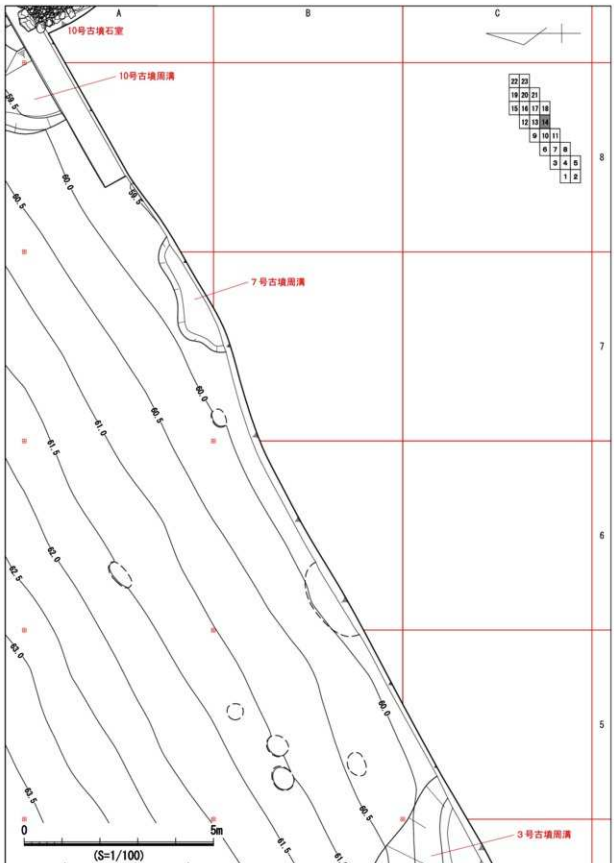
第57図　発掘区全域図分割図⑪



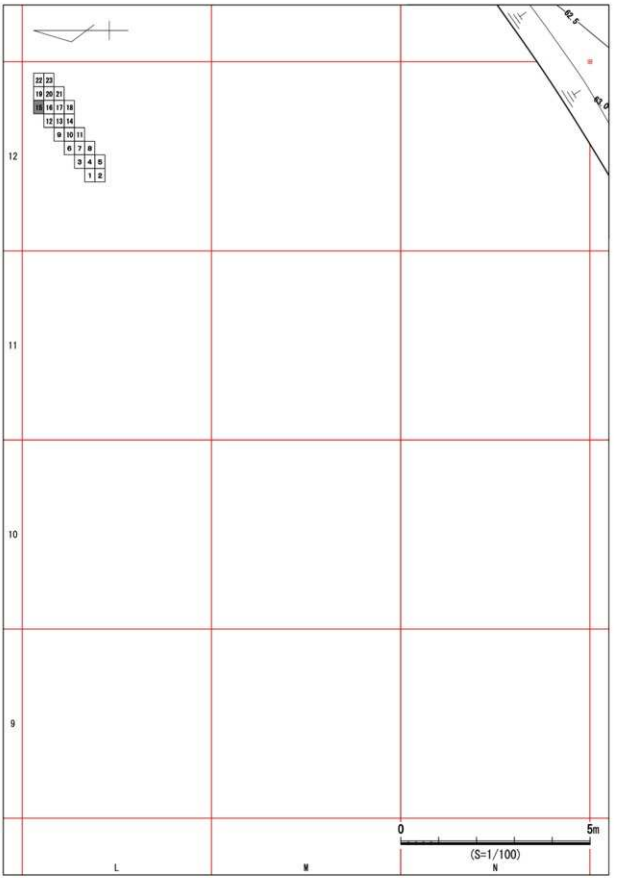
第58図　発掘区全域図分割図⑫



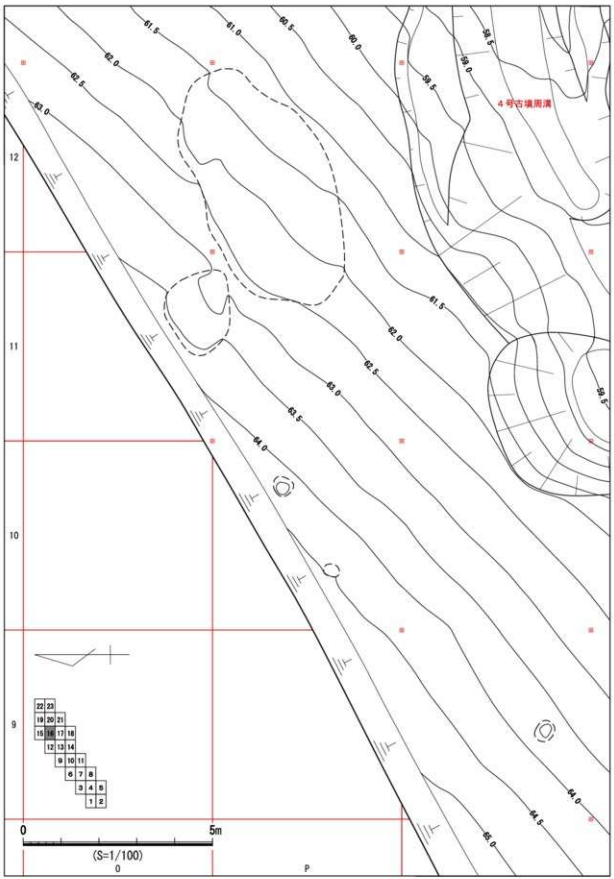
第59図　**発掘区全域図分割図⑬**



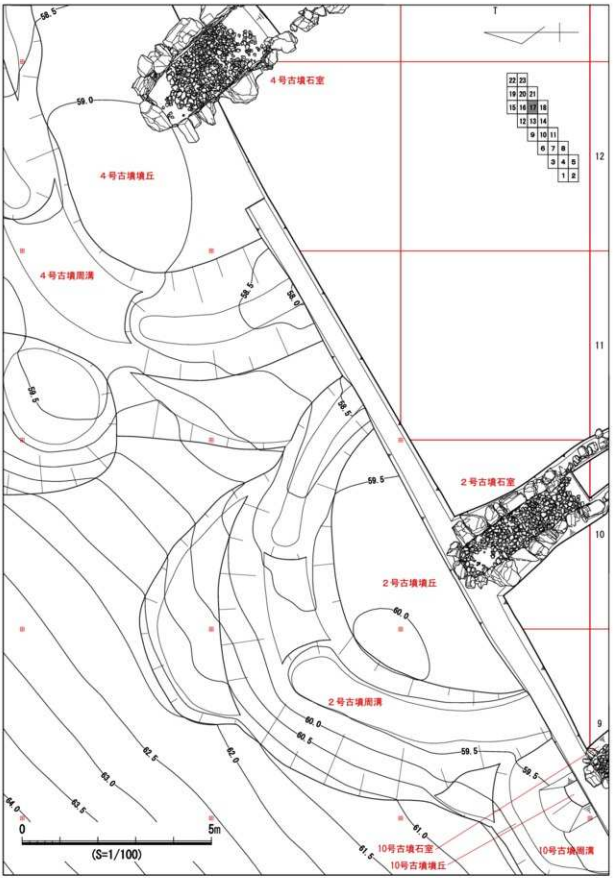
第60図　発掘区全域図分割図⑭



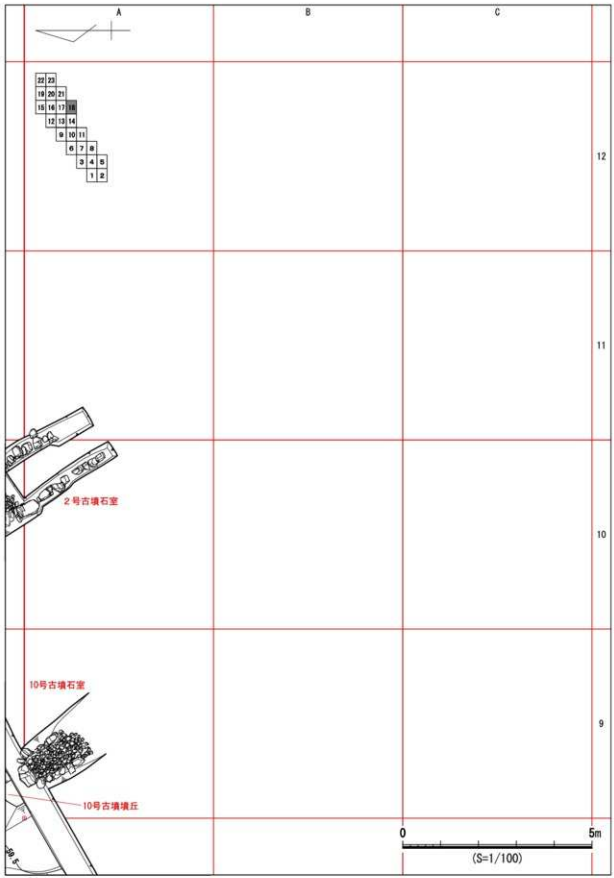
第61図　発掘区全域図分割図⑮



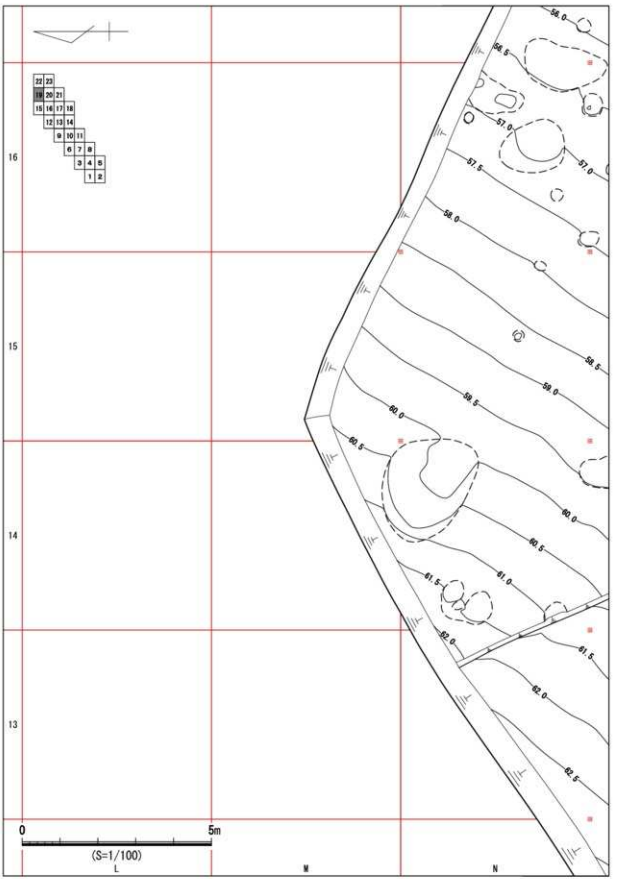
第62図　発掘区全域図分割図⑯



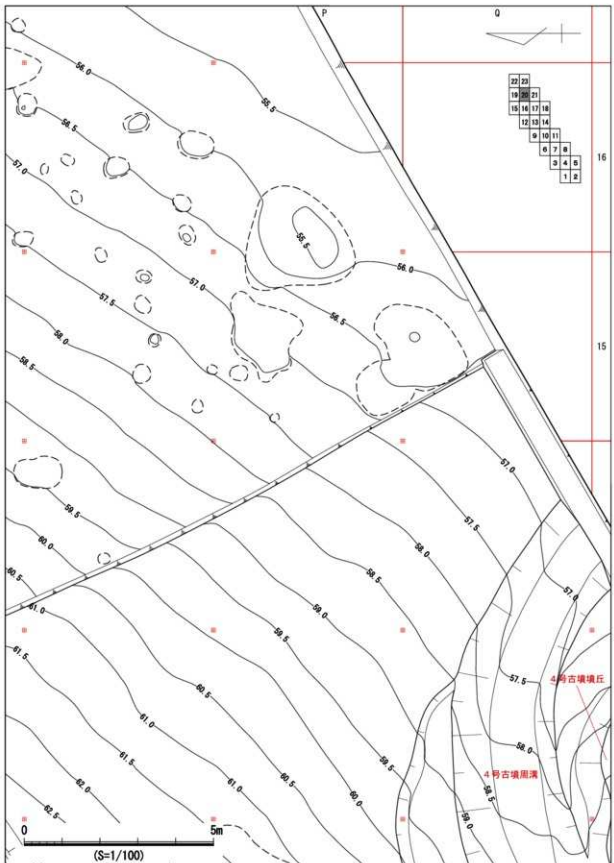
第63図　発掘区全域図分割図⑰



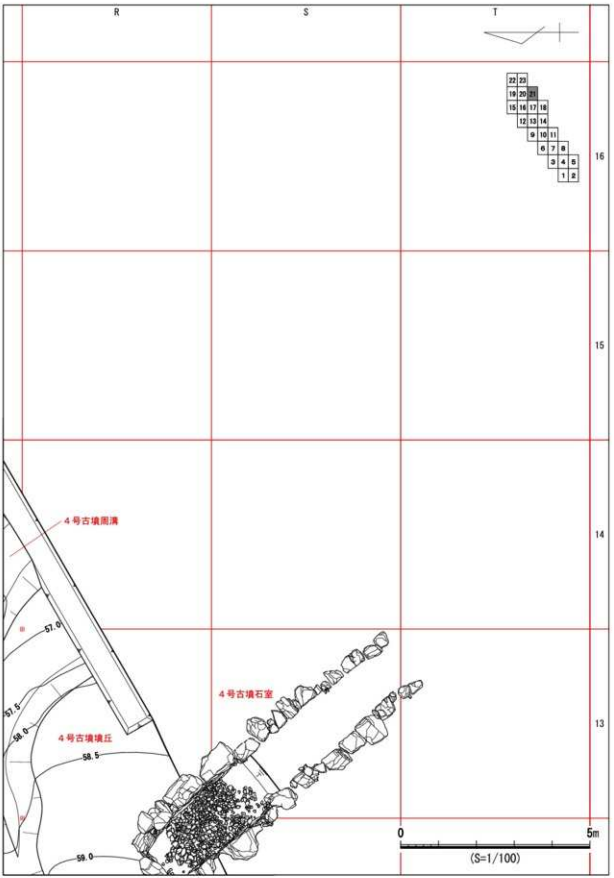
第64図　発掘区全域図分割図⑱



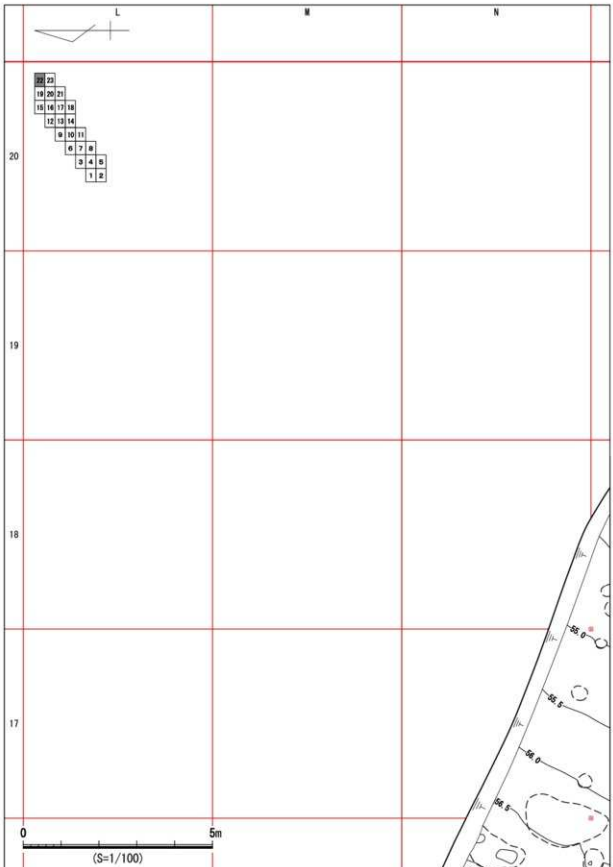
第65図　発掘区全域図分割図⑲



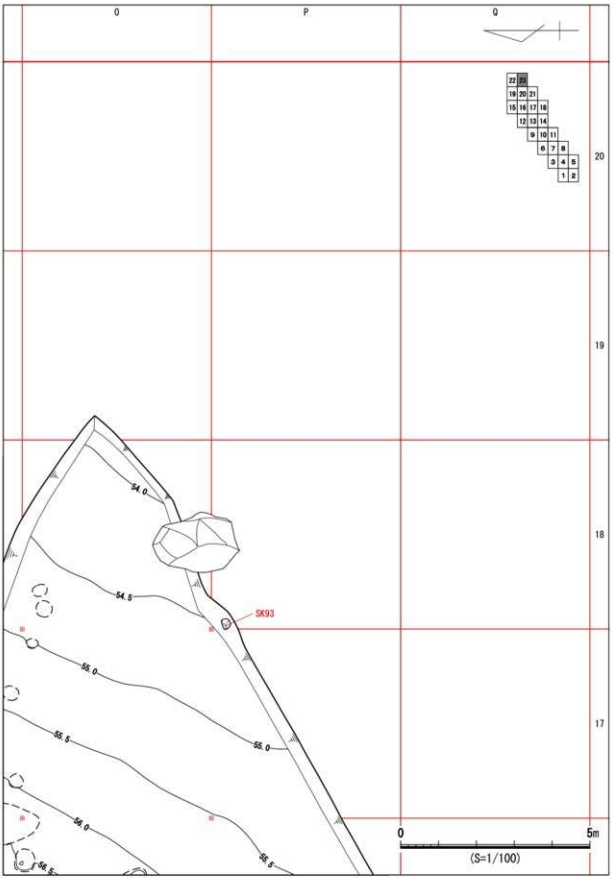
第66図　発掘区全域図分割図㉘



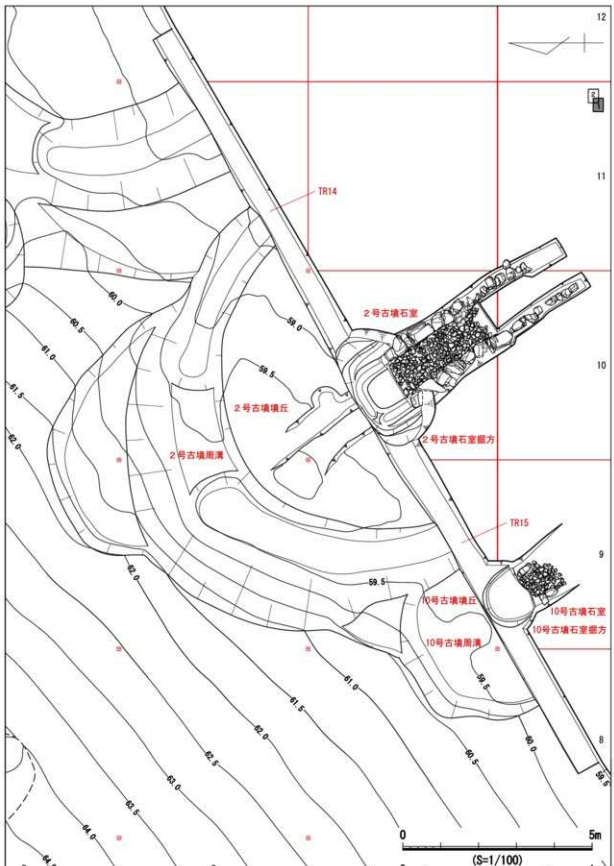
第67図　発掘区全域図分割図㉑



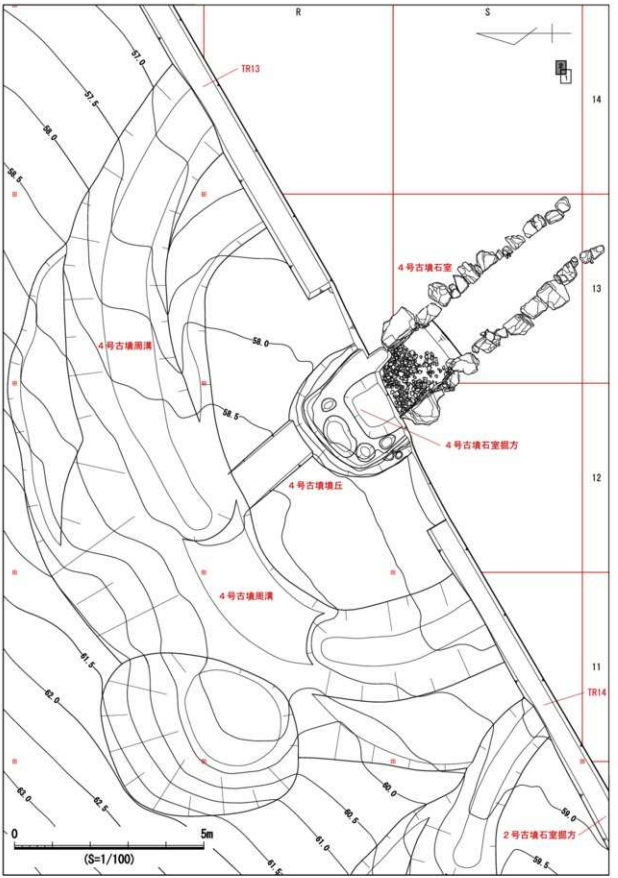
第68図　発掘区全域図分割図⑰



第69図　発掘区全域図分割図㉓



第70図　発掘区全域図墳丘下分割図①



第71図　発掘区全域図墳丘下分割図②

第4章　自然科学分析

第1節　分析の概要

2・4号古墳の石室内から出土した須恵器は、形態の特徴や肉眼観察による胎土の様相から、美濃須衛産若しくは在地産の可能性が高いと判断した。在地産としては、当遺跡と地理的に近接する丸山古窯が産地として考えられ、6世紀後半から8世紀の須恵器を生産していたことから時期が一致する。そこで2・4号古墳石室内から出土した土器のうち、器種が断定できる試料を選定し、その産地を確認する目的で、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、周辺の窯跡のデータと比較、検討した。

分析の結果、4号古墳出土須恵器（平瓶）は長良川流域の試料と似た元素を有していることが明らかになった。2号古墳出土須恵器（鉢）は、形態や肉眼観察による胎土の特徴からは丸山古窯産である可能性が高いと判断したが、比較したどの窯跡出土試料とも近似しない結果となった。その一方で、同じ丘陵に所在する小洞西1号古墳のSD1出土試料と、リン－カリウムの分布において類似していることは注目される（第73図）。在地産の中でも、特に長良川右岸に近接する別の生産地を想定することができるかもしれないが、現時点で産地を判断することは難しい。

以上のことから、両試料ともに在地産の可能性が高いことを科学分析で裏付けることができた。

第2節　2・4号古墳石室出土須恵器の胎土分析

1　はじめに

関市広見字小洞に所在する小洞古墳群より出土した須恵器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、周辺の窯跡のデータと比較、検討した。分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2　試料と方法

分析対象は、2号古墳石室から出土した須恵器鉢と、4号古墳石室から出土した須恵器平瓶の、計2点である（第15表）。時期は、7世紀とみられている。

第15表　胎土分析対象

分析No.	取上番号	掲載番号	遺構種別	器種
1	0125	8	2号古墳石室	須恵器鉢
2	0088	17	4号古墳石室	須恵器平瓶

試料は、当センターがあらかじめ採取した破片を使用した。蛍光X線分析には、土器を用いてガラスビードを作製し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。試料は、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削り去った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をアルミナ製乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ とメタホウ酸リチウム $LiBO_2$ を8：2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）にて、検量線法による定量

分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター及び米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、ナトリウム（Na_2O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al_2O_3）、ケイ素（SiO_2）、リン（P_2O_5）、カリウム（K_2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO_2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe_2O_3）の主成分10元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分4元素の計14元素である。

3　結果

第16表に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

分析の結果、ナトリウム（Na_2O）が0.15%と0.30%、マグネシウム（MgO）が0.38%と0.90%、アルミニウム（Al_2O_3）が19.6%と19.4%、ケイ素（SiO_2）が72.8%と69.6%、リン（P_2O_5）が0.036%と0.062%、カリウム（K_2O）が1.18%と2.74%、カルシウム（CaO）が0.07%と0.19%、チタン（TiO_2）が0.96%と0.92%、マンガン（MnO）が0.009%と0.004%、鉄（Fe_2O_3）が2.98%と4.03%、ルビジウム（Rb）が61ppmと164ppm、ストロンチウム（Sr）が36ppmと69ppm、イットリウム（Y）が21ppmと25ppm、ジルコニウム（Zr）が411ppmと283ppmであった。

第16表　蛍光X線分析結果（mass%）

分析No.	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	0.15	0.38	19.6	72.8	0.036	1.18	0.07	0.96	0.009	2.98	98.2	61	36	21	411
2	0.30	0.90	19.4	69.6	0.062	2.74	0.19	0.92	0.004	4.03	98.1	164	69	25	283

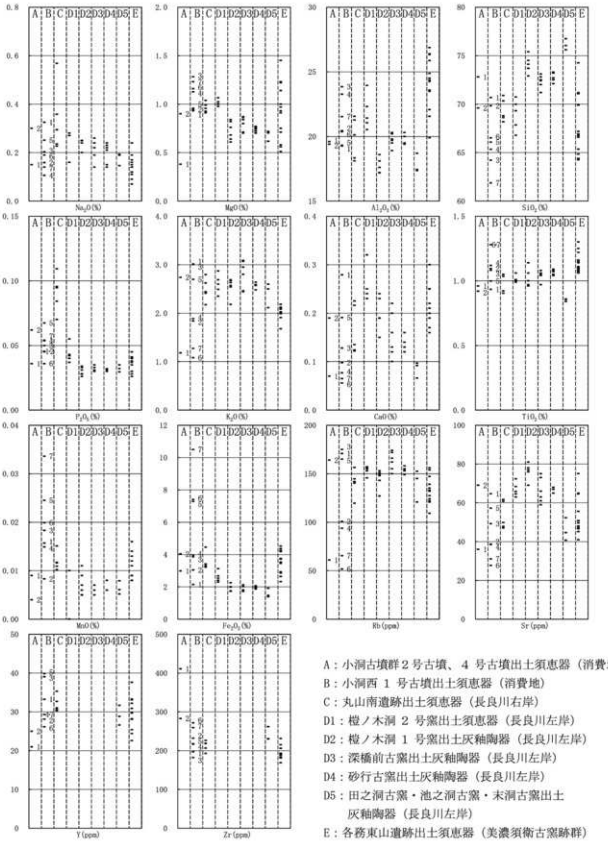
4　考察

ここでは、過去に分析されている周辺の須恵器・灰釉陶器の分析結果を引用し、比較、検討する。引用した試料は、近隣の長良川右岸に所在する小洞西1号古墳出土の須恵器7点（竹原2008）、丸山2号窯跡の灰原とみられている丸山南遺跡出土の須恵器5点（竹原2008）と、長良川左岸に所在する樫ノ木洞2号窯出土の須恵器5点（藤根・L.Zauri2000）、同1号窯出土の灰釉陶器6点（小村・藤根・今村2003）、深橋前古窯出土の灰釉陶器6点（小村・藤根・今村2003）、砂行古窯出土の灰釉陶器6点（小村・藤根・今村2003）、田之洞古窯・池之洞古窯・末洞古窯出土の灰釉陶器各1点、美濃須衛古窯跡群に属する各務東山遺跡出土の須恵器13点（藤根・今村・小村2002）である（第17表）。なお、小洞西1号古墳は消費地、その他は生産地（窯跡）の出土試料となる。第72図に、各元素の分布図を遺跡ごとに示す。

まず、窯跡出土試料間を比較すると、長良川右岸（第72図のC）、長良川左岸（第72図のD1～D5）、美濃須衛古窯跡群（第72図のE）間では、多くの元素において分布の重複がみられたが、リン（P_2O_5）における長良川右岸、カリウム（K_2O）における美濃須衛古窯跡群など、他の窯跡出土試料とは若干異なる分布を示す元素もみられた。

今回分析した小洞古墳群2号古墳と4号古墳出土の須恵器2点を、これら窯跡出土試料と比較すると、4号古墳の分析No.2は、これら窯跡出土試料の元素分布範囲に概ね収まった。完全に一致するわけではないものの、ナトリウム（Na_2O）やリン（P_2O_5）、鉄（Fe_2O_3）が比較的多いといった特徴から、長良川左岸の丸山南遺跡出土の須恵器の元素分布に比較的近いと考えられる。一方、2号古墳の分析No.1は、マグネシウム（MgO）やカリウム（K_2O）、ルビジウム（Rb）、ジルコニウム（Zr）といった多くの元素において、今回比較した窯跡出土試料の元素分布から外れた値を示しており、材料的に異なると考えられる。

第73図に、窯跡出土試料間の比較において、比較的明瞭な差異がみられたリン（P_2O_5）-カリウム（K_2O）



A：小洞古墳群２号古墳、４号古墳出土須恵器（消費地）
B：小洞西１号古墳出土須恵器（消費地）
C：丸山南遺跡出土須恵器（長良川右岸）
D1：樫ノ木洞２号窯出土須恵器（長良川左岸）
D2：樫ノ木洞１号窯出土灰釉陶器（長良川左岸）
D3：深橋前古窯出土灰釉陶器（長良川左岸）
D4：砂行古窯出土灰釉陶器（長良川左岸）
D5：田之洞古窯・池之洞古窯・末洞古窯出土灰釉陶器（長良川左岸）
E：各務東山遺跡出土須恵器（美濃須衛古窯跡群）

第72図　各元素分布図

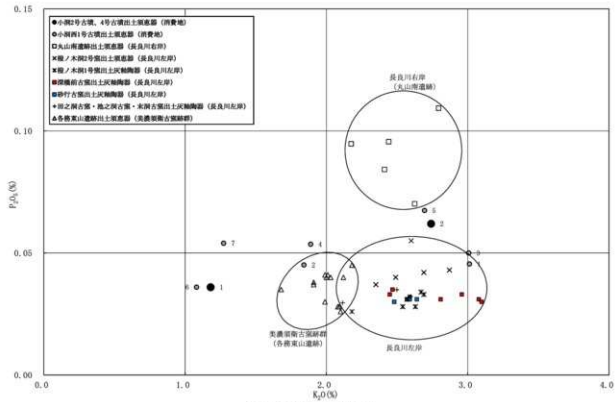
の分布図を示す。

5　おわりに

小洞古墳群より出土した須恵器について元素分析を行い、周辺の窯跡出土の土器と比較した結果、小洞４号古墳の分析 No. ２は、長良川右岸、左岸の窯跡や美濃須衛古窯跡群の土器の元素分布範囲に収まる化学組成を示した。なかでも、丸山南遺跡出土の須恵器の化学組成の元素分布に比較的似ていた。一方、小洞２号古墳の分析 No. １は、今回比較した窯跡出土試料とはやや異なる化学組成を示した。

第17表　周辺の窯跡等出土試料の蛍光X線分析結果（藤根ほか，2000；2002；小村ほか，2003；竹原2008より引用）

分析No.	遺跡	器種	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	小洞西１号古墳	須恵器	0.33	0.93	19.3	70.7	0.046	3.01	0.28	0.93	0.016	2.14	97.6	171	65	33	197
2			0.16	0.95	20.4	69.8	0.045	1.84	0.10	1.10	0.008	3.05	97.5	101	39	28	232
3			0.20	1.28	23.8	64.2	0.050	3.01	0.13	1.08	0.018	3.85	97.7	175	49	39	182
4			0.11	1.13	23.3	65.3	0.054	1.89	0.08	1.12	0.015	3.97	97.0	94	39	29	217
5			0.25	0.96	19.3	66.1	0.067	2.69	0.19	1.00	0.025	7.28	97.9	165	57	40	218
6			0.19	1.16	20.4	66.5	0.036	1.08	0.06	1.28	0.020	7.41	98.1	52	28	26	272
7			0.14	1.23	21.5	61.9	0.054	1.27	0.07	1.28	0.034	10.50	98.0	65	31	29	260
8	丸山南遺跡	須恵器	0.57	0.96	20.1	68.8	0.109	2.79	0.23	0.92	0.010	3.28	97.8	156	62	35	193
9			0.24	0.99	21.3	68.6	0.084	2.41	0.12	1.03	0.012	3.31	98.1	142	47	31	218
10			0.29	0.93	18.1	70.3	0.095	2.18	0.14	1.05	0.015	4.45	97.6	120	50	30	226
11			0.23	1.04	21.6	68.2	0.096	2.44	0.12	1.05	0.012	3.41	98.1	145	48	33	219
12			0.36	0.91	18.3	70.9	0.070	2.62	0.22	0.90	0.011	3.22	97.5	140	61	31	207
42	檜ノ木洞２号窯	須恵器	0.27	1.00	21.4	70.7	0.042	2.69	0.25	1.01	0.010	2.40	99.8	156	68		
43			0.28	1.02	22.3	67.8	0.037	2.35	0.23	1.06	0.010	2.54	97.7	146	63		
44			0.16	1.07	23.9	66.8	0.055	2.60	0.32	1.06	0.010	2.29	98.3	157	72		
45			0.27	1.00	21.1	69.3	0.043	2.87	0.24	0.99	0.000	3.12	98.9	155	65		
46			0.27	0.98	20.5	70.0	0.040	2.49	0.23	1.00	0.000	2.68	98.2	153	66		
56	檜ノ木洞１号窯	灰釉陶器	0.25	0.76	18.1	74.5	0.031	2.57	0.14	0.97	0.006	1.74	99.2	143	77		
57			0.24	0.64	17.2	75.4	0.028	2.54	0.19	0.96	0.005	1.75	99.0	148	81		
58			0.25	0.82	18.1	73.7	0.033	2.69	0.23	1.06	0.009	1.98	98.9	153	78		
59			0.25	0.68	17.6	74.1	0.028	2.63	0.19	1.00	0.007	2.25	98.7	149	76		
60			0.20	0.61	17.2	73.7	0.026	2.18	0.15	1.00	0.005	1.74	96.8	127	69		
61			0.25	0.84	18.6	72.9	0.034	2.67	0.24	1.14	0.011	2.00	98.7	151	76		
44	深橋前古窯	灰釉陶器	0.26	0.86	20.3	72.4	0.031	3.07	0.20	1.04	0.005	1.72	99.9	174	75		
45			0.14	0.70	18.9	73.1	0.035	2.46	0.12	0.97	0.007	1.76	98.2	150	59		
46			0.22	0.87	19.7	72.0	0.033	2.95	0.16	1.06	0.007	2.12	99.1	166	63		
47			0.24	0.84	20.2	71.2	0.030	3.09	0.22	1.08	0.005	1.81	98.7	172	73		
48			0.19	0.80	19.5	72.5	0.031	2.80	0.13	1.05	0.007	2.01	99.0	162	66		
49			0.19	0.71	19.8	72.8	0.033	2.44	0.10	1.04	0.006	1.77	98.9	155	61		
50	砂行古窯	灰釉陶器	0.14	0.72	19.4	73.2	0.031	2.64	0.16	1.05	0.006	1.87	99.2	155	65		
51			0.15	0.75	19.5	73.2	0.031	2.57	0.14	1.07	0.006	2.04	99.5	154	65		
52			0.24	0.77	20.0	72.1	0.032	2.59	0.14	1.09	0.008	2.06	99.0	158	68		
53			0.22	0.70	19.4	73.3	0.030	2.48	0.12	1.04	0.006	1.94	99.2	149	65		
54			0.23	0.76	20.3	72.5	0.031	2.59	0.13	1.09	0.006	1.97	99.6	155	67		
55			0.21	0.74	19.5	72.7	0.031	2.57	0.12	1.08	0.006	1.95	98.9	153	65		
1	田之洞池之洞末洞	須恵器	0.19	0.72	17.4	76.0	0.032	2.60	0.10	0.84	0.008	1.91	99.9	145	52	32	231
2			0.19	0.70	18.7	75.6	0.035	2.50	0.07	0.86	0.006	1.39	100.0	152	45	29	230
3			0.15	0.62	17.4	76.7	0.030	2.12	0.09	0.86	0.005	1.47	99.4	121	41	27	262
1	各務東山遺跡	須恵器	0.14	0.75	24.4	66.8	0.045	2.18	0.22	1.09	0.009	4.18	99.7	132	51	28	184
2			0.24	0.58	23.6	71.2	0.030	1.99	0.25	1.10	0.008	2.32	101.3	109	75	23	189
3			0.12	0.51	24.3	67.2	0.041	1.99	0.19	1.16	0.008	3.72	99.2	127	45	25	191
4			0.15	0.93	23.5	66.6	0.040	2.00	0.19	1.07	0.014	4.25	98.7	154	48	32	182
5			0.09	1.00	21.6	70.0	0.035	1.68	0.16	1.30	0.011	2.86	98.7	135	41	33	192
6			0.14	1.14	24.5	69.9	0.038	1.91	0.21	1.25	0.011	3.53	102.6	121	56	31	231
7			0.19	1.23	22.1	71.1	0.028	2.08	0.30	1.11	0.013	2.93	101.0	122	65	33	215
8			0.11	0.71	25.9	65.4	0.040	2.12	0.21	1.08	0.009	3.75	99.2	122	51	24	189
9			0.07	1.22	26.4	64.8	0.040	2.03	0.21	1.15	0.012	4.52	100.5	124	50	30	190
10			0.12	0.91	24.9	64.4	0.041	2.01	0.17	1.10	0.009	4.36	98.0	156	47	30	181
11			0.17	0.97	19.9	74.3	0.028	2.09	0.20	1.06	0.016	2.64	101.3	139	65	30	193
12			0.16	0.56	26.9	64.3	0.037	1.91	0.21	1.14	0.008	3.73	98.9	147	47	28	169
13			0.11	1.45	26.3	66.9	0.026	2.10	0.25	1.22	0.011	3.45	101.9	133	65	38	206



第73図　K_2O-P_2O_5 分布図

引用・参考文献

藤根　久・Lomtatize Zauri.2000「須恵器・灰釉陶器の化学組成」『檜ノ木洞遺跡』、財団法人岐阜県文化財保護センター

藤根　久・今村美智子・小村美代子 2002「坏および甕等の胎土分析」『各務東山遺跡発掘調査報告書』、各務原市埋蔵文化財調査センター

小村美代子・藤根　久・今村美智子 2003「窯跡出土灰釉陶器の胎土分析」『深橋前遺跡』、財団法人岐阜県文化財保護センター

中井　泉編 2005『蛍光Ｘ線分析の実際』242 頁、朝倉書店

竹原弘展 2008「小洞西１号古墳関連遺構出土須恵器の胎土分析」『小洞遺跡、小洞西１号古墳』、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

第５章　総括

今回の発掘調査によって、古墳４基の構造の確認と、重複関係から築造順を推定することができた。古墳に伴う遺物は少数であったが、同一古墳群内における古墳構造を比較検討できる好例といえる。ここでは、各遺構の形態及びその特徴を比較することで小洞古墳群の特徴を抽出し、美濃地域における当遺跡の位置づけを行う。

第１節　小洞古墳群における墳丘と石室の構築技法

１　墳丘の構築技法について

２・４号古墳については、墳丘を断割る調査を行うことができたため、墳丘の築造過程を断面で観察することが可能である。石室は、発掘区外に延び、玄門入口から羨道にかけては未調査であるため、玄室を中心に観察できた箇所から構築過程の復元を試みる（第74・75図、第18表）。

第Ⅰ段階・選地　古墳の築造場所と各古墳の位置が決定され（選地）、その場所が整備される段階である。古墳築造の準備段階である。

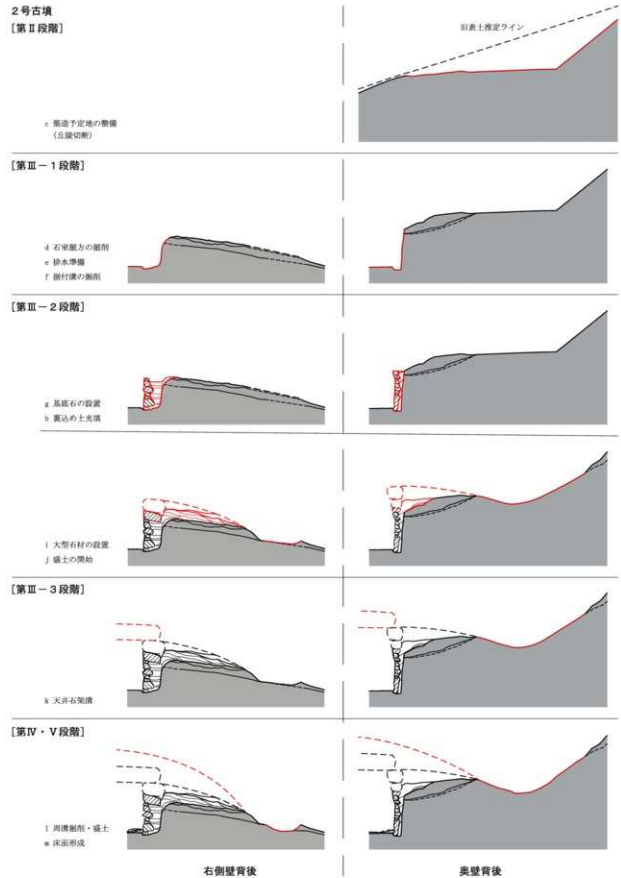
第Ⅱ段階・規格決定・整備　墳丘及び石室の規模・形態を決定し、築造予定地の整備を行う段階である。丘陵地に立地するため、群内では大型にあたる２・３・４・５号古墳には、平坦面を獲得するために丘陵の掘り込み（丘陵切断）が行われた。この平坦面は墳丘後背部のみに設けられ、石室掘方は平坦面の外側に設けられることから、作業スペースの確保に関係する可能性が高い。丘陵切断によって切り出された土も墳丘の盛土に使用でき、付近に仮置きされたであろう。

第Ⅲ段階・石室構築　本段階は、石室構築準備段階（第Ⅲ－１段階）と石室壁面構築段階（第Ⅲ－２段階）、石室天井構築段階（第Ⅲ－３段階）の３段階に細別できる。

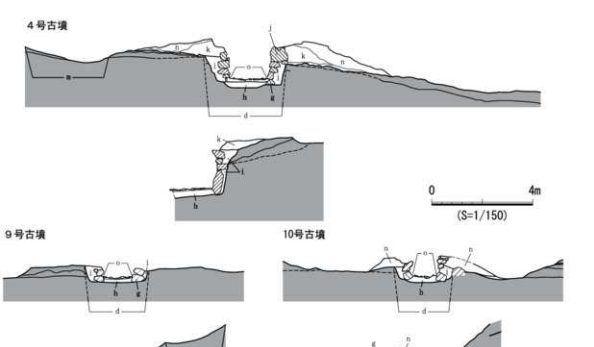
第Ⅲ－１段階では、石室の構築位置を決定したのち、斜面地に横穴を掘るようにして、規模・形態に応じた石室掘方を掘削する。２・４号古墳石室では、構築段階で掘方底面からの湧水を排水する必要が生じ、掘方底面にて排水処理を行った（第３章第４節参照）。石室壁体を成形するための基準となる据付穴や溝を掘削するが、各古墳でその方法は異なっている。

第Ⅲ－２段階は、掘方内に石材を設置し、石室壁体を構築する段階である。本段階はさらに６つの段階に細分できるため次節で述べる。基本的には奥壁から入口側へ向かって石材を１段ずつ積み、１段ごとに石室掘方内へ裏込め土を充填する。裏込め土は-Ⅲ層に該当し、石室掘方掘削時に排出された土を使用した可能性が高い。また、しまりのある土とない土を交互に充填している。これらの石材の裏込め土充填と同時に墳丘外方へ伸ばすように墳丘盛土が開始される。この段階における盛土の土は、２号古墳ではⅢb 層（漸移層）由来の土を、４号古墳ではⅢa 層（旧表土）からⅢb 層由来の土を用いており、周溝掘削排土を利用している可能性が高い。なお、羨道も本段階と連動して構築したと思われる。

第Ⅲ－３段階は、前段階までに盛土によって作出された平坦面及び斜面を搬入口として天井石を架構する段階で、この後石室全体を覆う盛土（いわゆる第一次墳丘）が行われたであろう。本調査では、



第74図　墳丘構築工程模式図（１）



第75図　墳丘構築工程模式図（2）

第18表　小洞古墳群における古墳の築造過程

構築工程			図中番号	2号古墳	4号古墳	9号古墳	10号古墳
第Ⅰ段階	選地		a	古墳の築造位置を決定する			
第Ⅱ段階	規格決定		b	墳丘形態・規模、石室の位置を決定する			
		整地作業準備	c	築造予定地の整備（背面カット）			
第Ⅲ段階	石室構築	掘方掘削	d	石室掘方の掘り込み			
		Ⅲ-1段階 構築準備 排水準備	e	掘方底部に溝を設ける	掘り込みを整地し、掘方底面に東へ下がる傾斜を設ける		
		石室壁体の基準設定	f	掘付溝を設ける	掘付穴を設ける	奥壁部分のみ掘付穴を設ける	石材を置き、掘方の深さを調節する
		Ⅲ-2段階 石室壁面構築段階 基底石設置	g	奥壁側から順に基底石を設置する			
				側壁基底石に極扁平な石材を用いる	右側壁基底石は東西方位の水平を保つために墳の殺す	小口積みで、掘方ライインに合わせて設置	奥壁を裏込めと1層目の整地土で固定する
		床面整地	h	基底石の設置と同時に玄室床面の整形を開始する（整地土敷設）			
		石室壁体形成	i	左右側壁を同時に積み上げながら、1段ごとに裏込め土を充填する		掘方上端まで石材を積み上げ、裏込め土を充填する	
			j	掘方上端まで達したら大型石材を配する		繰り返す	
		盛土開始	k	巨石の裏込めもかねた墳丘盛土を行う			
		Ⅲ-3段階 石室天井架構	l	（天井石を架構する）		（天井石を架構する）	
第Ⅳ段階	墳丘形成・周溝掘削		m	周溝を掘削する。掘出された土は墳丘形成に使用（盛土）する			
			n	石室から外方に向かって、石室を覆うように盛土を行う		全体を覆う盛土を行い、墳丘を形成する	
第Ⅴ段階	仕上げ	床面成形	o	礫石を敷き、床面をつくる			

（ ）内は調査時残存していなかったが、石室を構築する上で想定される工程

天井石が消失しているため、確認できていない。

第Ⅳ段階・墳丘形成：前段階に続いてさらに盛土を行い、墳丘の形状を調整する段階である。墳頂部の盛土は流出しており観察できないが、2・4号古墳の最も外側における墳丘流土がしまりのあるシルト質土であることから、墳頂部には周溝底部付近又は石室掘方掘削時の排土が用いられた可能性が高い。このことを考慮すると、2号古墳周溝に見られる段掘りは、墳丘頂部盛土に供給された土の調達場所である可能性がある。

第Ⅴ段階・石室内仕上げ　玄室内に礫を敷き、床面を敷設する[1)]。本段階後、被葬者を埋葬し、石室の閉塞を行う。

以上、古墳構築の大枠的な工程を復元し、各古墳における築造手順を示した結果、横穴式石室と墳丘の構築は連動して行われている様子が明らかになった。第18表は、各古墳の墳丘及び石室の構築工程を一覧表にまとめたもので、太枠囲みの工程は通常の古墳築造において通有の工程である。最も規模の大きい4号古墳の築造は、さらに多くの工程を踏むが、小型の9・10号古墳でも通有の工程を踏んで構築されており、基本的な構築方法は2・4号古墳と変わりない。

2　石室の構築技法について

今回の調査を行った石室は全て横穴式石室で、2・4号古墳は両袖式であることを確認し、第3章では、規模に関わらず石室の形態が似ていることを指摘した。9・10号古墳は側壁の残存状況が悪いため、2・4号古墳を中心に石室各部の構造についてまとめておく（写真3、第76図）。

残存する側壁は、2・4号古墳ともに5～7段目までを確認でき、石材の重なり合いから、奥壁と袖部を形成する石材をはじめに置き、次に側壁石材を配置している。両古墳共に、奥壁基底石の高さまでは、右側壁では石材が奥壁に接するようにして据えられている。側壁には玄門に向かって傾斜する横目地が確認でき、基本的には奥壁側から玄門方向に向かって途切れることなく石材を配置するが、2号古墳右側壁3段目のように目地の水平を調節する段では玄門から奥壁側に向かって配置する場合もみられる。

石材の積み方は、奥壁最下段とそれに接する両側壁の石材を平積みすることは両石室で共通しており、奥壁では最下段を構成する石材数や大きさに差はあるものの、平積み＋長手積みを基本とする。側壁は、ある目地の上下で積み方が変わるというようなことはなく、単なる作業単位を示す目地[2)]であると思われる。右側壁では長手積みを多用する一方で、左側壁では長手積みと小口積みが混在しており、石材の積み方に規則性は見出せない。側壁目地に注目すると、それぞれ奥壁基底石の天端に揃う位置に目地がみられ、奥壁基底石の高さを石室下半部構築時の基準としている。また、奥壁・側壁共にこの高さから持ち送りが開始され、双方の壁面を繋ぐように配置される石材もこの高さから顕著になる。さらに、それぞれの側壁の上部（2号古墳は5段目、4号古墳は4・5段目）には、奥行き0.7mを超える大型の石材を用いることが注目されるが、これらの石材は奥壁基底石に揃う目地上に配置されており、石室上半構築のはじめに配置された可能性が高い。この石材の積み方には長手積み、平積みがみられ、石室壁面を効率的に構築すると同時に、石室背面の基盤層上面に控えを伸ばすような意図がみられる[3)]。

以上の特徴を踏まえて、古墳構築過程第Ⅲ－2段階を細かくみると、以下のようになる。

Ⅲ-２-（１）段階：奥壁と玄門を形成する石材を配置し、裏込め土を充填する。２号古墳奥壁では、基底石左端の天端の高さまで石材を積む。奥壁基底石の高さを、石室下半部構築の基準とする。

-（２）段階：側壁基底石を設置し、最初の裏込め土を充填する。以降、裏込め土は、石材を１段積むごとに充填する。

-（３）段階：側壁を奥壁１段目の高さまで積む。

-（４）段階：奥壁と側壁の間詰めを行い、高さを揃える。両壁への掛け渡しもこの高さから開始される。

-（５）段階：奥壁から両側壁の順に１段ずつ石材を積む。石室掘方上端まで積んだ時点で、基盤面に掛かるようにして大型の石材を側壁に積む。

-（６）段階：天井石を架構する。

なお、墳丘構築過程第Ⅱ段階で設けられた石室後背部の平坦面を、石室構築段階でも作業スペースとしたことが想定される。２号古墳では石室掘方肩部がなだらかになり、内部へ入り込む土層（第 14 図 44 層）を確認したことから、石材の搬入路は作業スペースから斜面下方に当たる東側より搬入した可能性が高い。

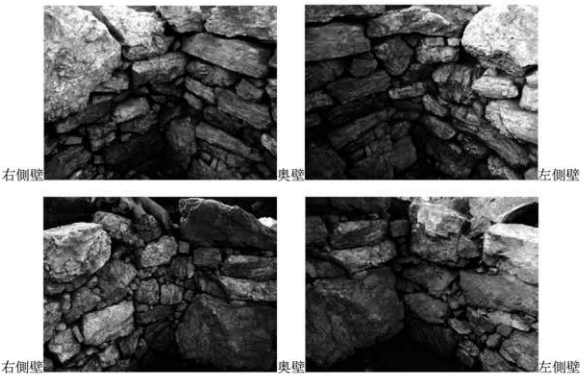
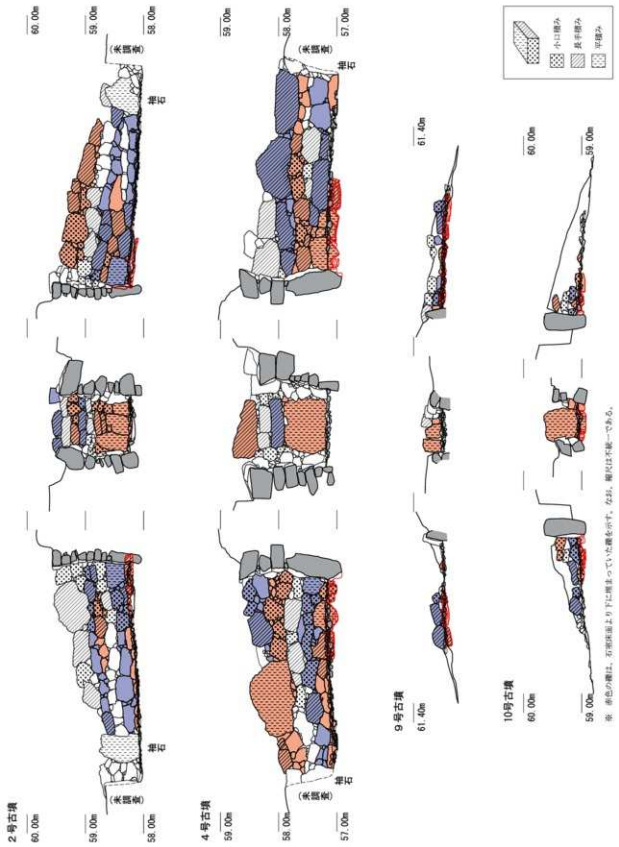


写真３　奥壁と側壁の設置関係（上：２号古墳、下：４号古墳）



第76図　石室石材積み上げ状況図

第2節　長良川中流域における横穴式石室の変遷と小洞古墳群の位置づけ

東海地方の横穴式石室は、畿内との共通性が高い系譜と、北部九州に遡源が認められる非畿内系石室の系譜が存在し（第19表）、それぞれの特徴が各地域内で複雑に混在している（鈴木 2007）[4]。そこで、長良川中流域周辺に分布する横穴式石室の構造の特徴を概観し、小洞古墳群の位置づけについて検討する（第20表、第77～79図）。

第19表　横穴式石室各系譜の諸特徴

	畿内系	北部九州系（西三河系）
奥壁	多段石積み （次第に、基底石大型化）	大型石材（腰石・一枚石）を利用する
平面形	長方形を指向する 片袖・両袖・無袖式	胴張りを指向する 擬似両袖式・複室両袖式・竪穴系横口式
天井	平らである	弧状・傾斜を有する
前壁	明瞭に作出する	形成しない。棚石を使用する
側壁石積	長手+小口（成瀬B類） 全て長手（成瀬D類）	全て小口で控え積みをする（成瀬A1類） 平+長手+小口（成瀬C類）
袖部 玄門	立柱石を用いず、玄門を内側に突出させない。 （ただし、袖部基底石は次第に大型化し、立てて使用するようになる）	玄門立柱石を多用し、内側に突出させる （擬似両袖式） 棚石を使用する

美濃地域における横穴式石室についての研究は、成瀬正勝（1985）、中井正幸（1992）、横幕大祐（2011）らによって行われ、河川流域ごとに独自の様相と展開を持つことが認識されている。当遺跡が位置する長良川中流域では、6世紀前半頃に陽徳寺裏山古墳群にて、横穴式石室が採用されたのが初現である。同古墳群1号古墳は、川原石を用いた両袖式横穴式石室（以下、「両袖式」という。）で、平面形は胴張りである[5]。この1号古墳とほぼ同時期に築造された4号古墳は、無袖式の竪穴系横口式石室[6]で、1号古墳の方がより豊富な副葬品を有していた。横穴式石室導入当初から形態や規模による被葬者の階層表現を行っていたことが窺われる。石室形態の系譜は北部九州に求められ、若狭を経由（成瀬 1990、横幕 2011）若しくは太平洋の海上ルートを経由（鈴木 2007）して当地域に持ち込まれたと考えられており、玄室はすべて川原石を用いて構築する[7]。なお、陽徳寺古墳群の石室形態は当地域に後出する横穴式石室に系譜を追うことができない（成瀬 1990）。

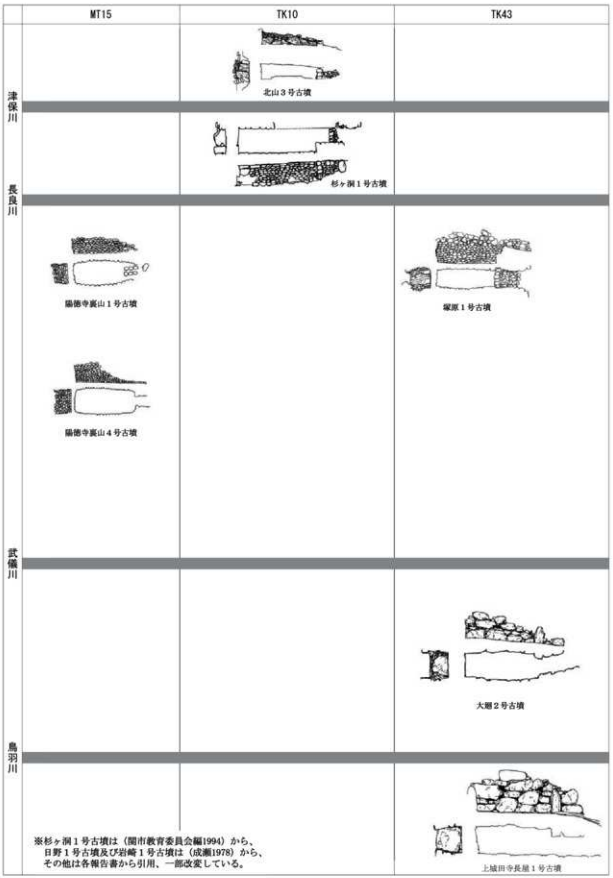
以降、当地域では7世紀中ごろまで横穴式石室が採用された。東海西部地域は、畿内系の影響が現れる時期が他地域よりもやや遅れ（鈴木・中井 2011）[8]、長良川中流域では、TK10型式併行期の杉ヶ洞1号古墳が畿内系石室の初現に位置づけられる。石室石材は全て川原石であるが、平面形は長方形を指向し、やや大きめの石材4石を積んで左袖部を形成する。奥壁最下段にはやや大型の石材2石を縦方向に配置する。その一方で、明確な北部九州系の特徴をもつ北山3号古墳もこの時期に築造された古墳である。北山3号古墳は、玄室床面が1段下がる竪穴系横口式石室で、側壁基底部に明瞭な腰石を用いている。この時期以降に美濃地域にみられる北部九州系の系譜は、西三河地域で受容されたものが当地域に伝播している可能性が高く、畿内系・西三河系それぞれの要素が独立して採用されている[9]。

これに続く段階は、TK43型式併行期の上城田寺長屋1号古墳や大廻2号古墳が挙げられ、横穴式石室定着期であると同時に、美濃地方における両袖式石室の採用時期でもある。また、石材の大型化や羨道の長大化など、畿内と同様の変化をたどる一方で、北部九州系の特徴である玄門立柱石の使用も同時に開始される。大廻2号古墳では、胴張りの平面形や玄門立柱石、壁体基底部に大型石材の使用

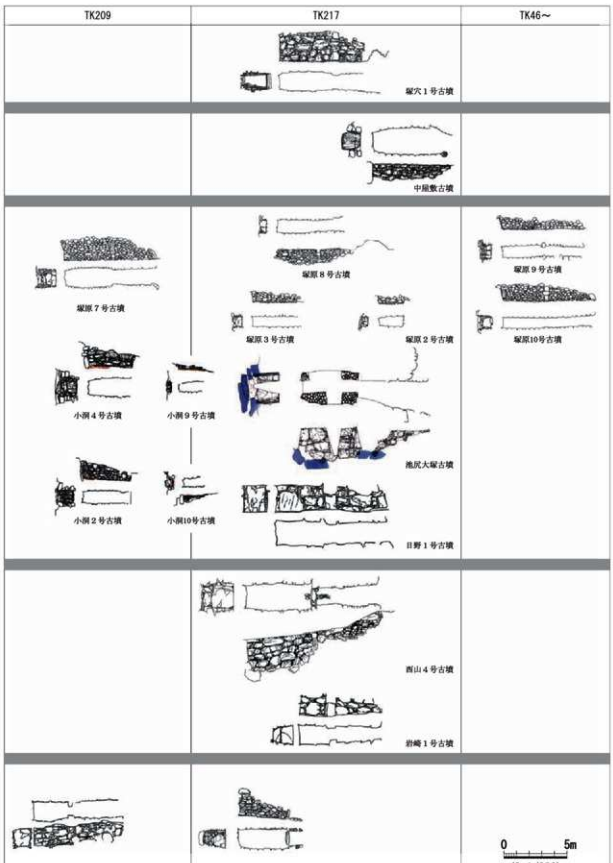
第 20 表　長良川中流域の横穴式石室一覧

通番	名称	大きさ（m）				袖部		奥壁	側壁 成瀬1999 分類	棚石	敷石	石室平面形	棚石	備考
		全長	玄室長	玄室幅	羨道長	袖石	袖の形							
1	大潮１号古墳	－	－	－	－	－	－	鏡右？	－	－	－	－	－	
2	大潮２号古墳	8.8	3.5	1.4	5.3	○立柱石	両袖	鏡右	C	×	×	胴張り	－	
3	石谷１号古墳	12.6	5.8	2.8	6.8	○	両袖	鏡右	BorD	－	－	胴張り	○	
4	上城田寺３古墳群５号古墳	7.3	2.8	1.5	4.5	○	偏位両袖	鏡右	D	×	－	長方形	○	
5	上城田寺４古墳群１号古墳	3.5	3.5	0.8	－	×	無袖	鏡２列+長	D	×	×	長方形	－	
6	上城田寺４古墳群２号古墳	6.9	6.9	1.5	－	×	無袖	鏡右+長・小	B	×	小石敷き	胴張り	－	
7	上城田寺４古墳群３号古墳	3.4	3.4	1	－	×	無袖	鏡右+長・小	D？	×	×	長方形	－	
8	上城田寺４古墳群４号古墳	5.6	4.5	1.4	1.1	×	無袖or左片袖	鏡右+小？	D？	×	小石敷き	胴張り	－	
9	上城田寺４古墳群５号古墳	6.2	2.7	1.2	3.5	○立柱石	両袖	鏡右+長？	B	×	×	長方形	－	
10	上城田寺４古墳群７号古墳	3.1+	3.1	0.9	－	○立柱石	両袖	鏡右・開部？	D	×	×	胴張り	－	
11	上城田寺４古墳群８号古墳	6.4	6.4	1.3	－	×	無袖	縦２列+長・小	D	×	小石敷き	長方形	－	
12	上城田寺４古墳群９号古墳	2.2	2.2	0.8	－	×	無袖	縦横２石+長・小	BorD	×	×	長方形	－	
13	上城田寺４古墳群10号古墳	2.8	2.8	0.8	－	×	無袖	鏡右・開部+小	D	×	×	長方形	－	
14	上城田寺４古墳群11号古墳	2.7	2.7	0.6	－	×	無袖	鏡２列+長	B？	×	×	長方形	－	
15	上城田寺４古墳群12号古墳	2.9	2.9	0.7	－	×	無袖	鏡２列+長	B	×	×	長方形	－	
16	上城田寺４古墳群13号古墳	3.2	3.2	0.9	－	×	無袖	鏡３列+長	BorD	×	×	長方形	－	
17	上城田寺４古墳群14号古墳	2.2	2.2	0.7	－	×	無袖	鏡２列+長	BorD	×	×	やや胴張り	－	
18	上城田寺４古墳群15号古墳	2	2	0.5	－	○立柱石	両袖？	鏡右・開部+長	D	×	×	長方形	－	
19	上城田寺長根１号古墳	10.5	6	2.2	4.5	○立柱石	右片袖	鏡右・開部+？	D	×	小石敷き	長方形	－	
20	柳洞２号古墳	5.1	3.6	1.4	1.5	○立柱石	両袖	鏡右+長	B	○	×	長方形	－	
21	柳洞３号古墳	4.6	2.8	1	1.8	○立柱石	両袖	鏡３列+長	B？	×	×	長方形	－	
22	柳洞４号古墳	5	2.6	1.2	2.4	○立柱石	両袖	鏡右+長	B	○	×	長方形	－	
23	柳洞５号古墳	3.5+	3.5	1.3	－	○立柱石	無袖	鏡２列+長	BorD	○	小石敷き	長方形	－	
24	沢崎１号古墳	10.5	3.6	2.3	6.9	○立柱石	両袖	鏡右+1	D	×	－	長方形	○	
25	西山４号古墳	10	5.1	2.1	4.9	○立柱石	両袖	鏡右+長	D	○	×	長方形	－	
26	西山５号古墳	4.8	2.5	1	2.3	○立柱石	無袖	鏡右+長	D？	×	×	長方形	－	
27	七反田番場山７号古墳	6	3.2	1.2	2.8	○立柱石	偏位両袖	鏡右+	B	○	小石敷き	長方形	－	
28	七反田番場山10号古墳	1.8	－	0.6	－	×	無袖	鏡右+長	B	×	小石敷き	長方形	－	
29	中屋敷古墳	5.4	5.4	2.08	－	○立柱石	両袖	鏡右+？	B	×	－	長方形	－	
30	日野１号古墳	9.1	3.2	1.6	5.9	○	両袖	鏡右	D	○	－	長方形	○	
31	日野西山６号古墳	5.5	3.3	1.2	2.2	○立柱石？	左片袖	鏡右+？	－	×	石敷き	長方形	－	
32	千畳敷古墳	7.3	7.3	1.2	－	×	無袖	鏡２列+？	D	×	×	胴張り か	－	
33	北山３号古墳	6	5	1.3	－	×	竪穴系	鏡２列+小	C	○	×	長方形	－	棺台有
34	森古墳	9	4.3	1.6	4.7	×	偏位両袖	鏡右+長	B	×	－	長方形	○	
35	猫塚寺裏山１号古墳	6	4.8	2	1.2	×	無袖	多段石積み	A1	×	×	胴張り	－	
36	猫塚寺裏山２号古墳	5+	5	1.3	－	×	無袖	鏡２列+長・小	A？	×	小石敷き	やや胴張り	－	
37	猫塚寺裏山３号古墳	2.2+	2.2	0.7	－	○立柱石	無袖	多段石積み	A？	×	×	長方形	－	
38	猫塚寺裏山４号古墳	3.3+	3.3	1.1	－	×	無袖	多段石積み	A1	×	×	胴張り	－	
39	屋原１号古墳	7.5	4.6	1.5	2.9	×	無袖	鏡右+開部	A2	－	小石敷き	やや胴張り	－	
40	屋原２号古墳	1.9	1.9	0.7	－	×	無袖	鏡２列+長	A？	－	川原石	長方形	－	竪穴系
41	屋原３号古墳	3.8	3.8	0.7	－	×	無袖	鏡右+小	A？	－	×	長方形	－	
42	屋原４号古墳	－	－	－	－	－	－	－	－	－	小石敷き	－	－	
43	屋原５号古墳	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
44	屋原６号古墳	4.3	3.3	0.8	1	－	無袖	－	－	○	×	長方形	－	
45	屋原７号古墳	7.3	3.8	1.5	3.5	○	両袖	鏡右+長	A2	○	川原石	やや胴張り	－	
46	屋原８号古墳	6	3.1	1	2.9	○	両袖	鏡２列+長	A2	○	川原石	やや胴張り	－	
47	屋原９号古墳	6.5	3.1	1	3.4	○	両袖	鏡３列+長	A2	×	川原石	長方形	－	
48	屋原10号古墳	7.4	3.3	0.9	4.1	○	無袖	鏡右+長	A2	○	川原石	長方形	－	
49	屋原11号古墳	4.2	4.2	0.8	－	×	無袖	鏡２列+長	A2	×	川原石	長方形	－	
50	屋原12号古墳	2.9	2.9	0.9	－	×	無袖	鏡２列+長	A2	×	川原石	長方形	－	
51	屋原13号古墳	2.9	2.9	0.7	－	×	無袖	鏡３列+？	A2orD	×	川原石	長方形	－	
52	屋原14号古墳	2.1	2.1	0.8	－	×	無袖	－	－	×	川原石	長方形	－	竪穴系
53	屋原15号古墳	1.3	1.3	0.5	－	×	無袖	－	－	×	川原石	長方形	－	竪穴系
54	砂行２号古墳	2.3+	2.3	0.8	－	○立柱石	両袖？	鏡右+小	B	×	×	長方形	－	
55	砂行３号古墳	1.7+	－	0.8	－	－(立柱石)	両袖？	鏡右+？	B	×	×	長方形	－	
56	砂行４号古墳	2.1+	－	0.5	－	－	－	－	－	×	×	長方形	－	小石室
57	砂行５号古墳	0.6+	－	0.4	－	×	－	縦２列+開部	－	×	×	長方形	－	小石室
58	砂行７号古墳	－	－	－	－	×	－	－	－	×	×	長方形	－	
59	砂行８号古墳	0.6+	－	－	－	×	－	－	－	×	×	長方形	－	小石室
60	深幡御古墳	4+	－	1.3	－	×	－	鏡右	BorD	×	×	長方形	－	
61	松ヶ洞２号古墳	1.1	1.1	0.8	－	×	－	鏡２列+？	－	×	×	長方形	－	棺台有
62	杉ヶ洞１号古墳	9.6	6.1	1.9	3.5	○	左片袖	縦横２列+小	B	×	×	長方形	－	
63	一ノ門古墳	2.7+	－	－	－	－	－	－	－	－	小石敷き	－	－	
64	池尻大塚古墳	10.3	4.3	2.6+	3	○立柱石	両袖	鏡右+巨石１	C？	○	川原石	やや胴張り	距離	
65	弥勒寺古墳	0.8+	0.8+	1.3	－	－	－	鏡右+小	－	－	－	－	－	
66	小洞２号古墳	6.12	2.88	0.96	3.24	○立柱石	両袖	鏡３列+長	B？	×	小石敷き	胴張り	－	
67	小洞３号古墳	8.32	4.4	1.63	－	－	両袖	－	－	×	×	胴張り	－	（略測値）
68	小洞４号古墳	8.28	3.24	1.52	5.04	○	両袖	鏡右+長	B？	×	小石敷き	長方形	－	
69	小洞５号古墳	8	－	1.8	－	－	両袖	－	－	×	×	やや胴張り	－	（略測値）
70	小洞９号古墳	2.7	2.7	0.75	－	－	－	縦３列+？	－	×	小石敷き	胴張り か	－	小石室
71	小洞10号古墳	1.62	1.62	0.63	－	－	－	鏡右	－	×	小石敷き	胴張り か	－	小石室
72	浦山１号古墳	8.75	3.32	1.47	5.43	○	両袖	－	－	－	－	長方形	－	
73	殿岡１号古墳	9.8	4.6	1.7	5.2	○	両袖	鏡右	C	－	－	長方形	○	
74	塚穴１号古墳	8	4.2	1.5	3.8	○	両袖	鏡右+開部	B	×	小石敷き	やや胴張り	○	
75	塚穴２号古墳	7.3	7.3	1.7	－	×	無袖	鏡２列+長？	B	×	小石敷き	やや胴張り	－	

※奥壁における記述は、基底石の構造+上部の石積段を示す。（小：小口積、長：長手積、開部：開部め石）



第77図　長良川中流域周辺の横穴式石室（１）



第78図　長良川中流域周辺の横穴式石室（２）

第79図　長良川中流域周辺における横穴式石室の分布

がみられ、両袖式でありながらその他の要素はすべて北部九州系の特徴を有している。この段階までに、西三河で受容された北部九州系の石室系譜が当地域にも伝播し、横穴式石室の定着段階時で既に、これらの諸特徴が混在した様相をみせている。

小洞古墳群の２・４号古墳は、出土遺物の所属年代（TK209 型式併行期）から、これに続く時期に築造された可能性が高い。４号古墳は、平面形は長方形を指向し、羨道側壁上面からみた限りでは羨道幅が玄室幅よりも狭く、玄門立柱石が独立して突出していないことから、畿内系の要素が色濃く残る。その一方で、両袖部の基底石に立柱状の石材を用い、奥壁と側壁からなる隅角に石材を渡し掛けるといった、北部九州系譜にみられる用石法も取り入れている。２号古墳の袖部は突出具合が非常に浅いが、４号古墳と同様の用石法によって形成され、畿内系の様相を残す。玄門立柱石の上端の高さを側壁構築の基準とし、壁体持ち送りの傾斜変換点となっている。これらの様相からは、基本的な構造や構築技法などは畿内系譜をベースとしながら、袖部や奥壁隅の構築技法に西三河系の特徴を採用していることが分かる。構築技法に複数の系譜が混在している石室形態が、この時期までに長良川中流域における在地型石室として定着していたと考えられる。

次の TK217 型式併行期の段階では、長方形の平面形を指向し、大型石材を用いた石室が多数構築される。池尻大塚古墳は、明瞭な両袖部と前壁構造を有しており、系譜ではなく畿内からの直接的な技術交流がこの時期再度行われていたことを示しており（関市教育委員会 2015）、この時期に畿内からの２度目の技術伝播があったと思われる（服部 1993）[10]。一方で、西山４号古墳や椿洞２号古墳は、平面形や側壁石積み方法には畿内的な特徴がみられるものの、玄門部には棚石を採用し、西三河からの新たな影響を受けている。また、TK209～TK217 型式併行期には、小洞古墳群９・10 号古墳のような小規模石室が登場し始め、以降、塚原古墳群２号古墳にみられるような小型穴式石室も古墳群中に取り入れられていく。大型石室の増加と同時に、古墳群中に見られる小規模石室の登場は、古墳の築造が可能となった階層が段階的に拡大し、その裾野が広がったことで、新たな階層を表現しようとしたこ

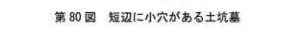
とによると考えられている（横幕 2001）。横穴式石室文化の終焉間際に、周辺地域からの技術伝播が再び盛んに行われるが、畿内系の特徴を有する石室は本段階以降築造されなくなり、TK46 型式段階には当地域における横穴式石室文化は終焉を迎える。

以上、長良川中流域周辺における横穴式石室の形態の変遷を概観した。畿内系・西三河系それぞれの技術導入時期に大きな時期差はないと思われる。しかし、次段階以降、独立して突出しない袖部の形成や、石材の大型化など、石室構築技法は畿内の動向と同様の変化をみせながらも、立柱石や胴張りの平面形、棚石といった主に石室の意匠に関わる部位に西三河からの影響を受ける傾向がある [11]。この状況から、畿内系譜をベースに西三河からの影響が融合して、長良川流域における独自の横穴式石室を成立させたとみることができるだろう。小洞古墳群について、直接的な系譜関係をもつ石室は今回確認できなかったが、複数の系譜が混在した石室形態が当地域において定着した時期の特徴を有しているといえる。

第３節　小洞古墳群の立地と古墳群の形成過程

小洞古墳群は、武芸川と長良川に挟まれた地域に位置し、円形丘陵の南側裾に立地する。中でも、平野部に向かって横穴式石室が開口するような南東側を選地する。この地域は、河川合流付近に陽徳寺裏山古墳群や塚原古墳群などの古墳が集中する。さらに、長良川の屈曲地点には池尻大塚古墳や弥勒寺官衙遺跡群が存在し、当地域における伝統的豪族であるムゲツ氏の統治地域として、古墳時代から古代にかけて特に盛行した地域であるといえる。小洞古墳群の周辺には当該期の集落遺跡は見つかっておらず、墓域としての利用が目立つ。小洞古墳群の石室がほぼ山石を使用して構築していることから、選地には石室石材の確保という観点も視野に入れていただろう。

小洞古墳群は、丘陵の裾部にほぼ横並び状態に立地する。未調査である古墳を含めても盟主的な規模の古墳はみられず、９・10 号古墳を除いてほぼ同じ規模の古墳が連なっている。７号古墳と３号古墳の間にはやや広めの空白地帯がみられ、東西２つのグループによって古墳群を形成していた可能性が高い。今回調査を行った古墳の観察から、東グループでは４号古墳→２



第 80 図　短辺に小穴がある土坑墓

号古墳→10号古墳、西グループでは3号古墳→5号古墳の順に築造したことが明らかとなった[12]。群中では中規模に当たる古墳を東から西に順次築造し、最後に小規模古墳である9・10号古墳を築造したとみられる。小規模古墳の石室は、小型の横穴式石室としては丁寧な造りであり、墳丘はほとんど確認できないものの周溝を有する点など、小型であること以外は中規模古墳のものと大差ない造りである。このような石室のあり方は、近隣では岐阜市上城田寺第4古墳群に確認でき、中型古墳の築造以降その周辺に順次築造されることが判明している。小石室とも呼ばれるこれらの石室は、これまで幼児用の墓や、複次葬した成人の改葬墓（松本1993）[13]の可能性が指摘されてきたが、9・10号古墳からは人骨や鉄釘等は出土していない。

また、古墳以外の埋葬施設として、土坑墓（ST1）1基を確認した。副葬品と考えられる耳環が1点出土したのみで所属時期については不明であるが、10号古墳に隣接する位置に設けられていることから、西グループに所属すると考えられる[14]。土坑墓の両短辺には浅い小穴（ST1－P1・P2）を設けており、三重県四日市市の西山遺跡SK45及びSK61（第80図）に同様の例を確認できる以外、その役割等は不明である[15]。古墳群中に土坑墓が設置される事例は、岐阜県内では塚原遺跡SK6や各務原市蘇原東山古墳群1・2号土坑墓などがある。

小規模古墳や土坑墓の築造時期は明確な判断根拠がないものの、横幕大祐（2004）[16]が指摘するように、7世紀中頃以降に見られる墓制の簡略化に伴う規模の縮小によるものとは安易に考えるべきではないだろう。小規模古墳や土坑墓を中規模古墳と近接する位置関係から古墳群を形成するグループに所属すると考えるならば、2・4号古墳において7世紀中ごろまで追葬を行っていた可能性が十分に考えられる一方で、何らかの理由で中規模古墳に追葬されることが許されなかった被葬者の存在を想起させる。小洞古墳群にみられる多様な埋葬形態の採用は、被葬者の階層差や、生前の関係性を示している可能性がある。

注

1）玄室床面整地土と玄室壁面基底石の設置の先後関係が明らかでない場合、礫床の敷設を行ったタイミングを判断することは困難である。石室内装の仕上げとみる場合や、壁体基底石と同時に床面造作を行ったとみる場合などがあるが、今回はひとまず石室内仕上げ段階として最終工程に位置づけた。

2）成瀬（1999）は、美濃地域における横穴式石室の側壁の積石技法を観察し、側壁に見られる目地には、当遺跡に見られるような作業単位を示すものと、積石技法の変化を示すものがあることを指摘している。後者の目地は、壁体の安定化や玄室幅の確保のために、石室掘方の内外で石材の積み方を変える際に表れるという。

成瀬正勝 1999「美濃における横穴式石室の築造技法－側壁の積石技法を中心に－」『岐阜史学』第96号、岐阜史学会

3）同じ技法が、当遺跡に程近い上城田寺長屋1号古墳でも採用され、側壁上部の石材を掘方外の基盤面上に乗せることは、天井石を含む石室上部石材の荷重が下部の石積みにはほとんど掛からなくなり、石室の保持に有利であることが指摘されている。また、成瀬（1999）は、掘方内外での石材の大きさの使い分けについて、瑞浪市大島1号古墳を例に上げ、「掘方内部では石室幅を確保するために石材を配置するスペースに限りがあったために小型石材を用いざるを得ず、外部では壁体の安定を図るために大型の石材で奥行きを持たせている」と説明している。

岐阜市教育委員会 1985「Ⅳ　上城田寺長屋第1号墳」『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書』

4）鈴木一有 2007「東海の横穴式石室における分布と伝播」『近畿の横穴式石室Ⅱ、横穴式石室研究会

5）意図的に胴張りを指向したものではなく、小型の川原石を用いて構築したため、四隅を丸く納めることで壁体の安定を図った結果であるという指摘がある。

成瀬正勝 2001「横穴式石室の導入」『美濃・飛騨の古墳とその社会』、株式会社同成社

6）開口部から石室に入る際、一段下がる形態の石室である。今回は石室系譜の採用傾向を検討するために、横穴式石室の範疇に含めた。美濃地域の特に東部域において、「本格的な横穴式石室の導入以前の一時期、もしくはその後にも普遍的に見られるもの」（財団法人岐阜市教育文化振興事業団 1998）と評価されている。

財団法人岐阜市教育文化振興事業団 1998『北山３号墳』

7）玄室は全て川原石を用いるが、羨道には山石を用いており、明確な区別が行われている。

8）ここでいう東海西部地域とは、伊勢・志摩・尾張・美濃・飛騨を指す。

鈴木一有・中井正幸 2011「東海」『古墳時代』上、青木書店

9）成瀬（2001）は、陽徳時裏山１号古墳の系譜が追えない理由として、杉ヶ洞１号墳にみられる畿内系片袖式石室の美濃地域への浸透力の強さをあげ、畿内政権による地域支配が当初導入されていた北部九州系の系譜を払拭する方向で進められたことを指摘している。（前掲注２文献）

10）服部哲也 1993「東海地方」『季刊考古学』第 45 号、雄山閣出版株式会社

11）太田宏明（2016）は、横穴式石室の形態的特徴を示す属性について、特定の形態や規格などにおける一定の意匠を遵守して作出された特徴を「意匠的属性」、用石法や加工技術など製作時の動作パターンの痕跡として残る特徴を「技術的属性」として区別している。それぞれの属性が伝播する範囲は必ずしも一致するとは限らず、「意匠的属性」は首長間の遠距離での社会関係、「技術的属性」はより下位層を含む地域全体での隣接地域との社会関係において伝播する傾向があることを指摘している。

太田宏明 2016『横穴式石室と古墳時代社会』、株式会社雄山閣

12）５号古墳の西側には、５号古墳と重複関係を持つ可能性が高い６号古墳が存在する。６号古墳は埋葬施設が露出していないため詳細は不明であるが、平成 26 年に関市教育委員会によって行われた調査（関市教育委員会 2017）で、墳丘流出土内とみられる土層から、須恵器壺類の口縁部破片が出土している。このことから、東西各グループは、少なくとも中規模古墳３基、小規模古墳１基の、ほぼ同じ構成からなると思われる。

関市教育委員会 2017『関市市内遺跡発掘調査報告書』

13）松木百合子（1993）は、奈良県天理市竜王山古墳群の小石室について、成人の単次葬が不可能な規模の石室でもその築造時期が７世紀代に集中することから小児だけの墓とは考えにくいとし、石室内から鉄釘が出土していることから人骨のみを集めて埋葬した成人の改葬墓の可能性を指摘している。小石室の誕生については、薄葬令の施行に伴って、次代の墓制である火葬墓とのあいだを繋ぐ埋葬形態であると評価している。

松木百合子 1993「横穴石石室の終末（群集墳）」『季刊考古学』第 45 号、雄山閣出版株式会社

14）ただし、SK１の主軸方位が、横穴式石室の主軸方位に直交する向きであることには注意を払う必要がある。

15）ST１－P１・P２を木棺の小口を押さえるための杭の痕跡と仮定して、検出遺構から木棺の大きさを推定した場合、木棺の角が土坑のコーナーとぶつかるため、構造上木棺を納めた土坑と推定することはできない。

16）横幕大祐 2004「美濃における古墳終末に関する覚書」『かにかくに』八賀晋先生古希記念論文集刊行会編、三星出版

引用・参考文献

青木敬 2004「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号、國學院大學古墳時代研究会
青木敬 2017『土木技術の古代史』、株式会社吉川弘文館
石井智大 2007「横穴式石室に関する用語」『近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会事務局
宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、国立歴史民俗博物館
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40
太田宏明 2016『横穴式石室と古墳時代社会』、株式会社雄山閣
各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
各務原市埋蔵文化財調査センター1999『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』、各務原市教育委員会
関西縄文土器研究会 2007『関西の突帯文土器』（資料集）
岐阜県 1972『岐阜県史』（通史編　原始）
岐阜県 2003『岐阜県史』（考古資料）
岐阜県教育委員会 2007『改訂版　岐阜県　遺跡地図』
岐阜市 1979『岐阜市史』（資料編　考古・文化財）
岐阜市教育委員会 1977『大廻古墳群発掘調査報告書』
岐阜市教育委員会 1985『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書』
岐阜市教育委員会 1986『椿洞古墳群』
岐阜市教育委員会 1994『上城田寺古墳群』
岐阜県文化財保護センター2010『中屋敷遺跡・中屋敷古墳』
財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター2003『深橋前遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『七反田番場山７・10・11 号古墳』
財団法人岐阜県教育委文化財団文化財保護センター2008『小洞遺跡　小洞西１号古墳』
財団法人岐阜市教育文化振興事業団 1998『岐阜市北山３号墳』
齋藤孝正 1995「Ⅰ　東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第３巻東日本編、雄山閣出版
鈴木一有 2007「東海の横穴式石室における分布と伝播」『近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会
鈴木一有・中井正幸 2011「東海」『古墳時代』上、青木書店
須川勝以 2006「東海の横穴式石室　三河編」『東海学セミナー（２）』、春日井市教育委員会
関市教育委員会 1989『塚原遺跡　塚原古墳群』
関市教育委員会編 1994『新修関市史』（考古・文化財編）
関市教育委員会編 1996『新修関市史』（通史編　自然・原始・古代・中世）
関市教育委員会 2012『国指定史跡弥勒寺官衙遺跡群弥勒寺東遺跡Ⅰ－郡庁区域－』
関市教育委員会 2015『国指定史跡弥勒寺官衙遺跡群　弥勒寺東遺跡Ⅲ』
関市教育委員会 2017『関市市内遺跡発掘調査報告書』
武部真紀 2006「山茶碗の用途をめぐって」『研究紀要』第７号、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財

団愛知県埋蔵文化財センター
田辺昭三 1982『須恵器大成』、角川書店
津市埋蔵文化財センター2005『津市埋蔵文化財センター年報９』
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき』各種遺構調査編、文化文化財部記念物課監修、株式会社同成社
中井正幸 1992「資料編　岐阜の横穴式古墳」『花岡山古墳群』、大垣市教育委員会文化部
中島庄一 1995「使用痕」『縄文文化の研究』（７　道具と技術）、雄山閣出版株式会社
成瀬正勝 1985「横穴式石室の型式と変遷について」『岐阜史学』第 79 号、岐阜史学会
成瀬正勝 1992「美濃における畿内系横穴式石室の受容と展開」『岐阜史学』第 83 号、岐阜史学会
成瀬正勝 1999「美濃における横穴式石室の築造技法」『岐阜史学』第 96 号、岐阜史学会
成瀬正勝 2001「横穴式石室の導入」『美濃・飛騨の古墳とその社会』、株式会社同成社
服部伊久男（1988）「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集』第９、吉川弘文館
服部哲也 1993「東海地方」『季刊考古学』第 45 号、雄山閣出版株式会社
藤井康隆・瀬川貴文 2005『横穴式石室からみた濃尾の地域社会』（資料編－濃尾の横穴式石室集成）、勢濃尾研究会
藤澤良祐 2007「第２節　灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史』別編窯業２中世・近世　瀬戸系、愛知県史編さん委員会
藤山龍造 2013「“利器としての剥片”から考えるために－その認識に向けて－」『駿台史学』第 147 号、明治大学史学地理学会
藤原秀樹 1997「美濃丸山窯の須恵器」『古代の土器５－１　７世紀の土器』（近畿東部・東海編）、古代の土器研究会
松本百合子 1993「横穴石石室の終末（群集墳）」『季刊考古学』第 45 号、雄山閣出版株式会社
美濃古墳文化研究会 1992『美濃の後期古墳』
美濃市教育委員会 1993『塚穴古墳群発掘調査報告書』
美濃市教育委員会 2004『調査概要報告　渡来川北遺跡　縄文時代草創期の調査』
美濃市教育委員会 2005『古村遺跡』
美濃市教育委員会 2007『渡来川北遺跡　Ｂ１地区、Ｂ２地区、Ｂ３地区の調査』
右島和夫・土生田純之・曺永鉉・吉井秀夫 2003『古墳構築の復元的研究』、株式会社雄山閣
横幕大祐 2001「美濃地方における後期古墳の状況」『第８回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会、三河古墳研究会
横幕大祐 2004「美濃における古墳終末に関する覚書」『かにかくに』八賀晋先生古希記念論文集刊行会編、三星出版
横幕大祐 2008「群集墳の偏在とその背景」『東海の古墳風景』（季刊考古学・別冊 16）、株式会社雄山閣
四日市市遺跡調査会 2003『西野遺跡　西野古墳群』
吉田章一郎 1973「岐阜県関市陽徳寺裏山古墳の発掘」『青山史學』第３号、青山学院大学文学部史学科研究室

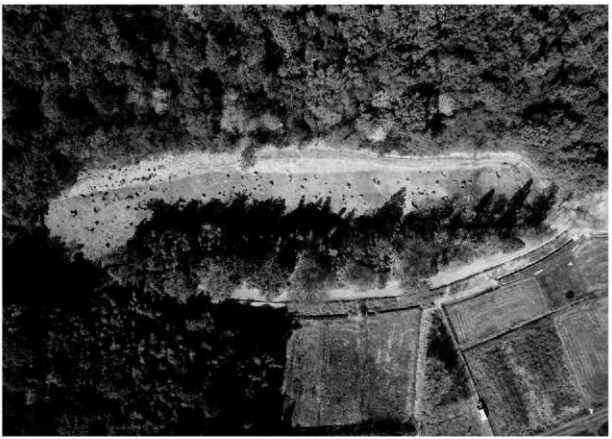
渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会
渡辺博人 1988「美濃陶衛窯の須恵器生産」『古代文化』第 40 巻第 6 号、財團法人古代学協会

写 真 図 版

図版１　発掘区遠景・近景

発掘区遠景（東から）

発掘区近景（西から）



発掘区全景（上が北）

調査前状況（東から）

図版３　２号古墳（１）

２・４・10 号古墳（上が北）

２号古墳全景（北から）

２号古墳周溝完掘状況（北東から）

２号古墳墳丘北側周溝土層断面（東から）

２号古墳玄室全景（南から）

２号古墳石室左側壁（東から）

２号古墳石室右側壁（西から）

図版５　２号古墳（３）

２号古墳石室奥壁（南から）

２号古墳左側壁上部の大型石材（東から）

２号古墳石室玄門（北から）

２号古墳石室左側玄門立柱石（東から）

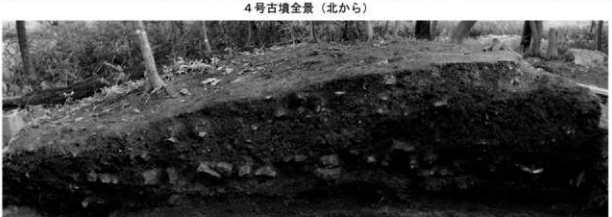
２号古墳石室基底石検出状況（東から）

２号古墳石室掘方完掘状況（南から）

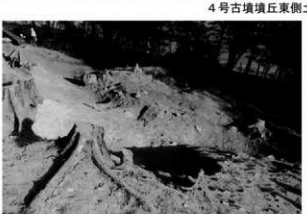
２号古墳石室羨道検出状況（南東から）

２号古墳須恵器出土状況（南から）

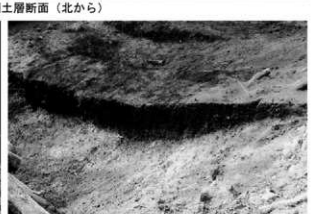
４号古墳全景（北から）



４号古墳墳丘東側土層断面（北から）



４号古墳周溝完掘状況（北西から）



４号古墳墳丘北側周溝土層断面（北東から）

図版７　４号古墳（２）

４号古墳玄室全景（南から）

４号古墳石室右側壁（西から）

４号古墳石室左側壁（東から）

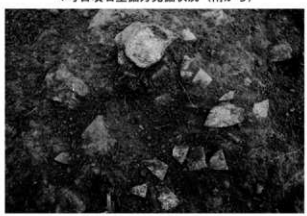
４号古墳石室奥壁（南から）

４号古墳石室玄門（北から）

４号古墳石室基底石検出状況（南から）

４号古墳石室掘方完掘状況（南から）

４号古墳刀子・臼玉出土状況（南から）



４号古墳山茶碗出土状況（南から）

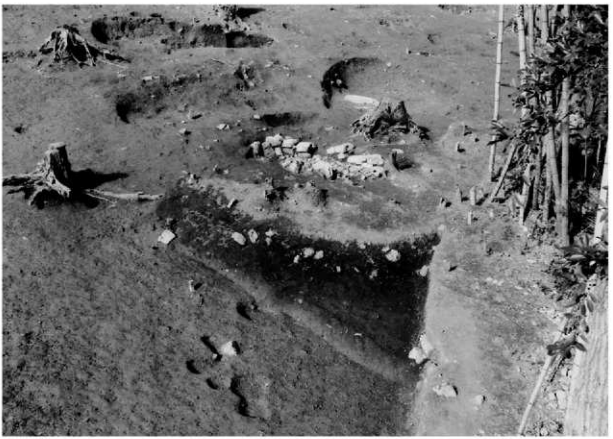
３号古墳周溝完掘状況（東から）

５号古墳周溝完掘状況（北から）

５号古墳墳丘北側周溝土層断面（東から）

７号古墳周溝完掘状況（北から）

図版９　９号古墳



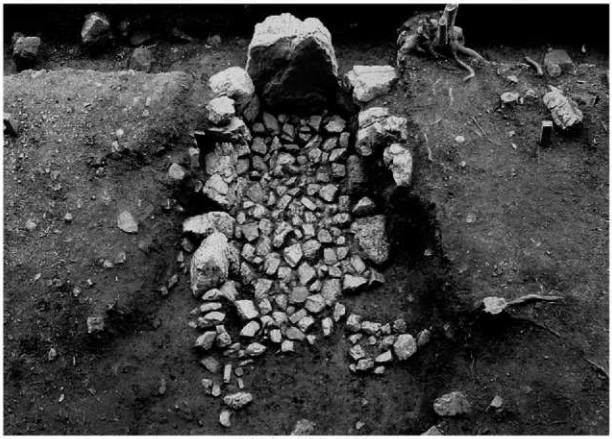
９号古墳全景（南西から）

９号古墳石室全景（南から）

９号古墳石室右側壁（西から）

９号古墳石室掘方完掘状況（南から）

10 号古墳全景（北から）



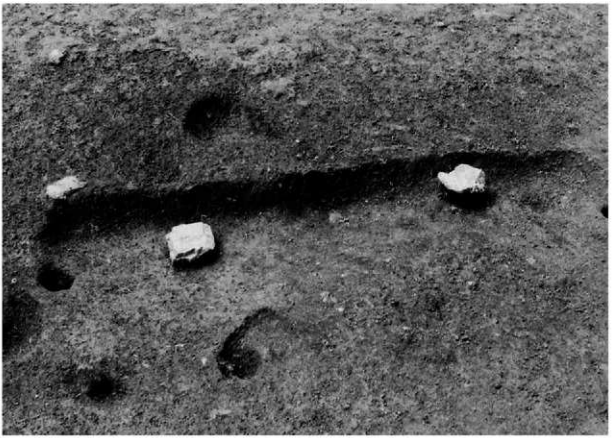
10 号古墳石室全景（南から）

10 号古墳石室左側壁（南東から）

10 号古墳石室掘方完掘状況（南から）

図版11　ST１（１）

９号古墳・ST１全景（上が北）



ST１全景（南東から）

ST１検出状況（南東から）

ST１土層断面（南西から）

ST１-P１土層断面（南西から）

ST１-P２土層断面（南西から）

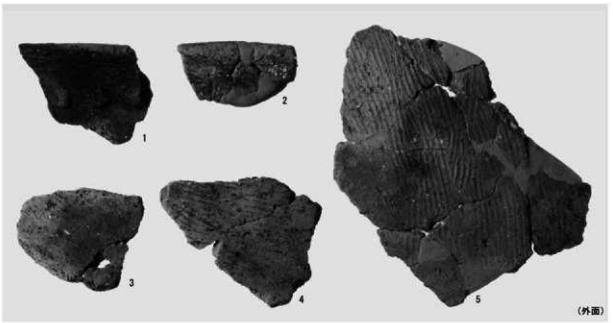
ST１耳環出土状況（南から）

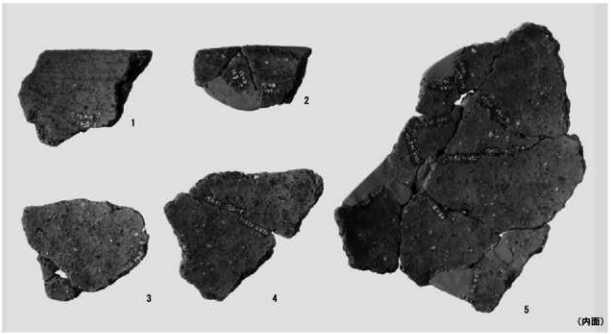
SK93 検出状況（北から）

SK93 縄文土器出土状況（北から）

SK93 完掘状況（北から）

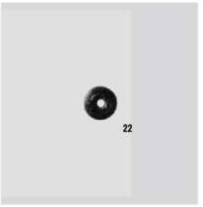
図版 13　出土遺物（１）



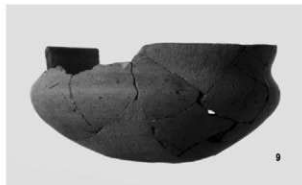


SK95 出土縄文土器

SK95 出土石器

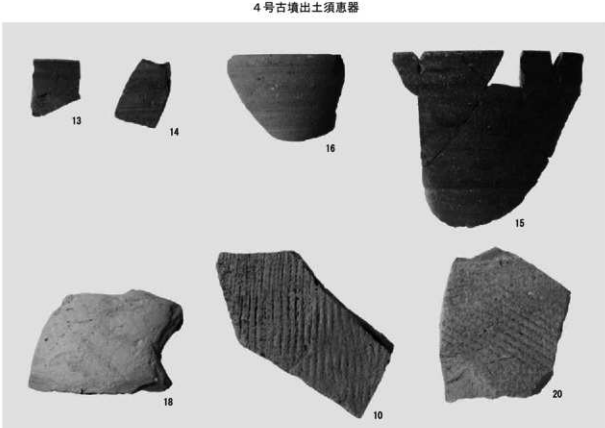


４号古墳出土石製品



２号古墳出土須恵器

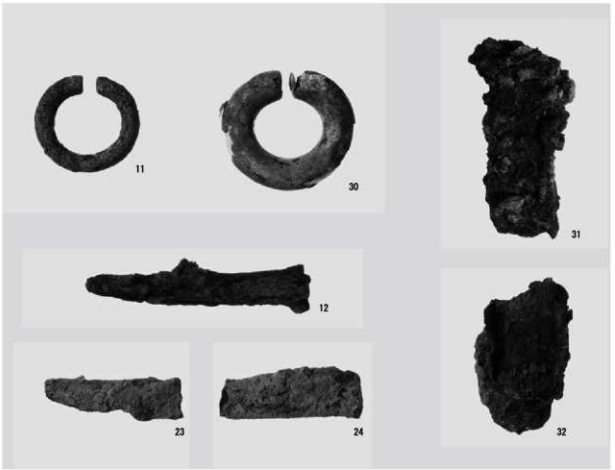
４号古墳出土須恵器



４号古墳出土（13 ～ 16, 18, 20）・２号古墳出土（10）須恵器

図版 15　出土遺物（3）

5号古墳出土土師器



2号古墳出土（11, 12）・4号古墳出土（23, 24）・ST 1出土（30）・根跡出土（31, 32）金属製品

4号古墳出土山茶碗

報 告 書 抄 録

ふりがな	こぼらこふんぐん
書　　名	小洞古墳群
副 書 名	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第142集
編 著 者 名	辻田真穂
編 集 機 関	岐阜県文化財保護センター
所　在　地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL058-237-8550　FAX058-237-8551
発行年月日	2019年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
こぼらこふんぐん 小洞古墳群	岐阜県関市広見2436-2	21205	04049	35°30'19"	136°51'59"	20150513 ～ 20151215	2,629	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小洞古墳群	古墳	縄文時代 古墳時代 中世	古墳　7基 土坑墓　1基 土坑　93基	縄文土器　60点 須恵器　58点 土師器　38点 山茶碗　40点 石器・石製品　3点 金属製品　7点	横穴式石室の石室構造や構築技法に地域性が見られる。小石室や土坑墓を含む、多様な埋葬施設を確認。

要　約

小洞古墳群は、長良川と武儀川の合流地点から北へ約2.5km上流に位置する。長良川と武儀川に挟まれた台地の南部には、標高100m程の丘陵が点在しており、そのうちの一つの丘陵南斜面に立地する。調査で確認した古墳は全て円墳で、墳丘規模に大小の差が確認できる。横穴式石室を有し、規模に関わらず同じ技法で構築している。遺構の重複関係や土層断面の観察から、東から西へと順次古墳を築造した可能性が高い。発掘区の中央には空白地がみられ、東西に分かれる2つのグループが存在していたことを示している。古墳以外の埋葬施設としては土坑墓1基を確認し、耳環が出土した。畿内から導入された石室構築技法が浸透し、長良川流域において在地の石室構造や構築技法が表出する6世紀後半から7世紀中ごろにかけて築造された古墳群であることが明らかになった。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第142集

小洞古墳群

2019年 2月 28日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印　　刷　株式会社もとすいんさつ